

平成 26 年度発掘調査報告書
南川尻遺跡 下向遺跡 沼袋Ⅱ遺跡
沼袋Ⅲ遺跡 八幡沖遺跡

ほか調査概報（39 遺跡）

2015

(公財) 岩手県文化振興事業団

平成 26 年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成26年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で43遺跡、約20万m²が調査され、縄文時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します

平成27年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理 事 長 菅 野 洋 樹

目 次

平成26年度の発掘調査の概要について 1

I 発掘調査報告

(1) 南川尻遺跡（洋野町）	5	(4) 沼袋Ⅲ遺跡（田野畠村）	67
(2) 下向遺跡（洋野町）	35	(5) 八幡沖遺跡（一関市）	79
(3) 沼袋Ⅱ遺跡（田野畠村）	47		

II 発掘調査概報

(6) 中村遺跡（北上市）	91	(26) 木戸井内Ⅵ遺跡（宮古市）	111
(7) 新里愛宕裏遺跡（遠野市）	92	(27) 磐鶴石崎遺跡（宮古市）	112
(8) 九重沢Ⅲ遺跡（遠野市）	93	(28) 沼里遺跡（宮古市）	113
(9) 栃洞Ⅲ遺跡（遠野市）	94	(29) 荷竹日向Ⅰ遺跡（宮古市）	114
(10) 平野原Ⅲ遺跡（遠野市）	95	(30) 石峰Ⅱ遺跡（山田町）	115
(11) 館岡Ⅱ遺跡（平泉町）	96	(31) 間木戸Ⅰ遺跡（山田町）	116
(12) 西平内Ⅰ遺跡（洋野町）	97	(32) 沢田Ⅲ遺跡（山田町）	117
(13) 北ノ越遺跡（久慈市）	98	(33) 田屋遺跡（大槌町）	118
(14) 宇部館跡（久慈市）	99	(34) 松磯遺跡（大槌町）	119
(15) 伏津館跡（野田村）	100	(35) 田鎮車堂前遺跡（宮古市）	120
(16) 中平遺跡（野田村）	101	(36) 千鶴Ⅳ遺跡（宮古市）	121
(17) 上泉沢遺跡（野田村）	102	(37) 宮野貝塚（大船渡市）	122
(18) 力持遺跡（普代村）	103	(38) 伽羅之御所跡（平泉町）	123
(19) 菅窪長屋構Ⅱ遺跡（田野畠村）	104	(39) 八幡沖遺跡（一関市）	124
(20) 菅窪長屋構Ⅲ遺跡（田野畠村）	105	(40) 赤前Ⅲ遺跡（宮古市）	125
(21) 向新田Ⅲ遺跡（宮古市）	106	(41) 浜川目沢田Ⅰ遺跡（山田町）	126
(22) 青野滝北Ⅰ遺跡（宮古市）	107	(42) 焼山遺跡（山田町）	127
(23) 青野滝北Ⅱ遺跡（宮古市）	108	(43) 赤浜Ⅱ遺跡（大槌町）	128
(24) 青野滝北Ⅲ遺跡（宮古市）	109	(44) 高田城跡（陸前高田市）	129
(25) 高根遺跡（宮古市）	110		
調査報告遺跡抄録			130

平成 26 年度の発掘調査の概要について

平成 26 年度の発掘調査は 51 遺跡 220,349m²で開始したが、最終的には 43 遺跡 175,513m²について発掘調査を実施した。これらの遺跡は、沿岸部を中心に県内の 7 市 4 町 3 村にまたがっている。実績値を前年度と比較すると、遺跡数で 6 遺跡、面積で約 20,000m²減少している。県内陸部と沿岸部を結ぶ復興支援道路関係の調査が今年度から新たに加わった。復興事業に関連した調査が、受託面積全体の約 8 割以上を占めた。通常の調査としては、北上川河川改修事業や内陸部の県道改良事業などが挙げられるが、農地整備事業に起因した調査が皆無であったことは特筆される。調査を実施した 43 遺跡のうち、7 遺跡については平成 25 年度からの継続調査、17 遺跡については調査未了のために次年度以降への継続調査となった。全体に遺構密度の高い遺跡が多くあったことと、調査途中に対象範囲が拡大したことによるものである。

縄文時代では、遠野市新里愛宕裏遺跡では中期の住居跡 4 棟、九重沢Ⅲ遺跡では後期の住居跡 5 棟などが見つかっている。洋野町西平内 I 遺跡では、後期の環状に展開する配石墓群と列石、これらの遺構を覆う整地層が確認された。大槌町赤浜 II 遺跡でも配石遺構が確認され本格調査は次年度以降の予定である。普代村力持遺跡では、狹小な範囲から膨大な土器とともに、縄文時代中期を中心とする住居跡が 60 棟以上検出された。この地域はほぼ北緯 40 度に位置しており、北に展開する円筒式土器文化と南に展開する大木式土器文化の交錯する様子が読み取れる遺跡である。縄文中期の住居跡が卓越しているなかで、宮古市向新田Ⅲ遺跡では縄文時代前期と晚期の住居跡が複数見つかっている。同じく、宮古市高根遺跡では山腹急斜面に住居跡、貯蔵穴が構築されており、從来に見られない縄文時代の占地の在り方を再考させる事例であった。山田町石崎 II 遺跡、間木戸 I 遺跡、沢田Ⅲ遺跡、浜川目沢田 I 遺跡では、縄文時代中期を主体とする住居跡群が見つかっており、沿岸部でも内陸部と遜色のない大規模な集落が営まれていたことが明らかになった。

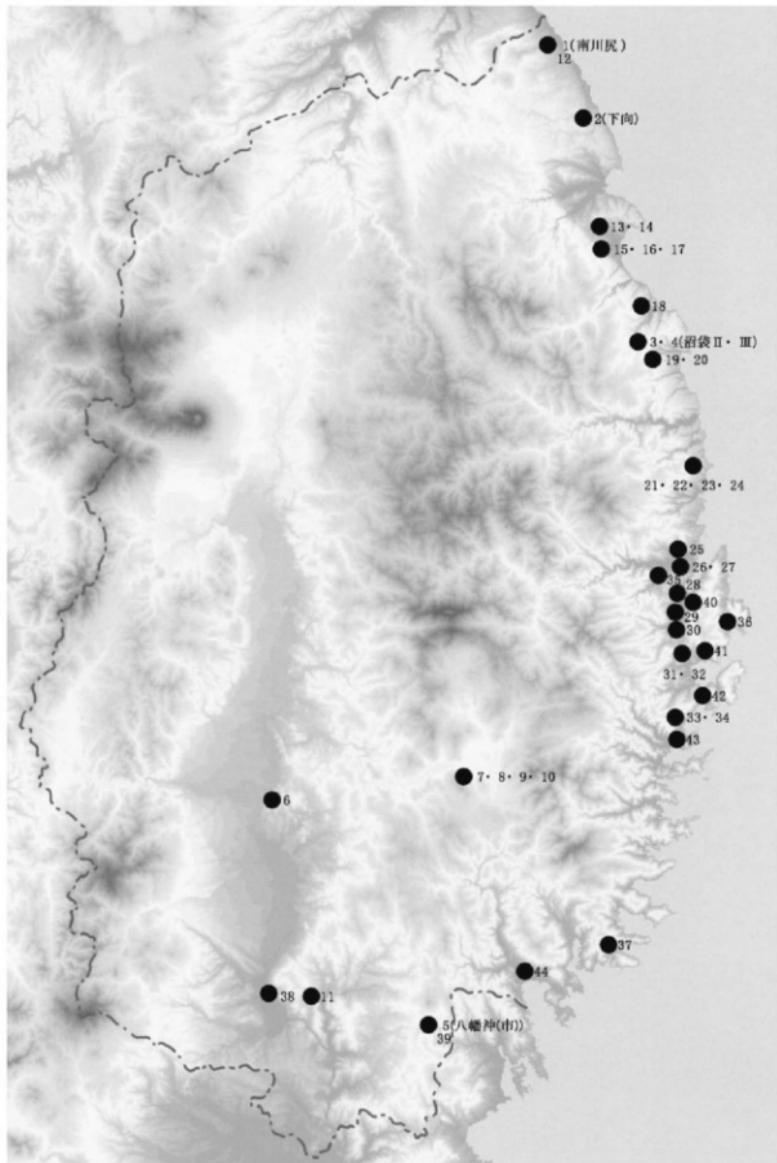
弥生時代では、北上市中村遺跡で前年度調査した千苅遺跡から続く弥生時代初め頃の遺物包含層(土器捨て場)が確認された。宮古市木戸井内 VI 遺跡からは、弥生時代後半の方形基調の住居跡が 2 棟見つかっている。

古代のうち古墳時代から奈良時代では、野田村中平遺跡・同上泉沢遺跡、宮古市沼里遺跡で住居跡が複数見つかっている。また内陸部では、中村遺跡(北上市)の調査が行われ、奈良～平安時代の 100 棟以上の住居跡が見つかった。前年度調査の千苅遺跡と同一であり、集落の範囲が更に拡大した。宮古市荷竹日向 I 遺跡では、70 棟に及ぶ住居跡のほか、鍛冶工房跡・鍛冶炉・排滓場が見つかり、集落内に鉄生産関連の工房を抱える様相が確認された。平泉関連では、伽羅之御所跡で、隣接する無量光院の南辺に相当すると思われる堀跡が見つかった。宮古市田鎮車堂前遺跡では、12 世紀のかわらけや陶磁器類のほか、鎧の一部である小札、馬具などの鉄製品が出土した。12 世紀藤原氏関連の遺構・遺物が、内陸部と違わない形で沿岸部にも存在することが明らかとなった。

中世では、久慈市宇部館跡、野田村伏津館跡、宮古市荷竹日向 I 遺跡、山田町石崎 II 遺跡、陸前高田市高田城跡、一関市八幡沖遺跡、平泉町館岡 II 遺跡などで調査が行われた。高田城跡では、堀跡・土塁・切岸・掘立柱建物跡等が見つかっているが、建物や遺物が非常に少ないと特色として挙げられる。

今年度は、平成 24 年度の後半から開始された復興関連調査が 3 年目を迎えた。内陸に比較し調査事例の少なかった沿岸部において、各時代・各地域の調査が実施されたことは非常に意味のあることである。現地説明会等の開催にあたっても、毎回百名以上の参加があり、関心の高さがうかがわれた。

(調査課長 斎藤邦雄)



平成 26 年度 調査遺跡位置図

I 発掘調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42 × 32 × 30cm

中コンテナ：42 × 32 × 20cm

小コンテナ：42 × 32 × 10cm

みなみかわじり
(1) 南川尻遺跡

所 在 地	九戸郡洋野町種市第28地割地内	遺跡コード・略号	I F 48-1197・MK J-14
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	6,340m ²
事 業 名	三陸沿岸道路	調査終了面積	6,340m ²
発掘調査期間	平成26年9月4日～10月30日	調査担当者	小林弘卓・宇部めぐみ、 柄澤 星

1 調査に至る経過

南川尻遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（洋野～階上）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年10月24日付け国東整陸二調第1007号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年10月25日～10月26日にわたり試掘調査を行い、平成24年11月6日付け教生第1509号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財團法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 遺跡位置図

(1) 南川尻遺跡

2 遺跡の位置と立地

南川尻遺跡は、洋野町役場より北西へ約2kmの地点に位置し、標高は47~58mを測る。遺跡の現況は山林・水田である。今回の調査区は、西から東へ延びる尾根の頂部と北側を東流する沢(無名)までの斜面地が対象である。

3 基本層序

山側(南側)の調査区をA区、谷側(北側)をB区とした。A区の現況は山林、B区は水田ということもあり、B区においては後世による地形の改変が顕著なため、層序は地点によってやや異なるが、基本的には尾根上にあたるA区からB区北方の沢まで一連の堆積であり、統括すると以下のようになる。

I層…表土、現耕作土相当。B区においては複数回の盛土・水田耕作土に細分できる。

II層…10YR1.7/1黒色土。B区のみで確認。水田造成以前の旧表土。

III層…10YR2/2黒褐色土。遺物を少量包含する。

IV層…10YR3/3暗褐色土。遺構検出面。黄褐色土ブロック(八戸火山灰)を含む。部分的に堆積しており、下方に行くほど厚くなる。

V層…10YR4/4~5/6褐色~黄褐色八戸火山灰。遺構検出面。地山相当。

VI層…砂礫層。B区北側斜面下方でのみ確認。

遺構検出面は基本的にはIV層であるが、A区においては限定的であり、尾根の頂部にあたる南西側では確認できない。また、旧表土としたII層についても同様で、A区では確認していない。したがって、A区における基本層序は、I~III~IV層またはI~III~V層となる。

4 調査の概要

今回の調査対象部分は山側の1,500m²(A区)であったが、北側の沢付近で焼土や散在する土器片を確認したことから、A区より北側部分を対象に9本のトレンチを設定し、試掘調査を行った。この結果、T3・4・5において遺物を確認したことから、これらと周辺の遺構の想定される範囲を含む840m²(B区)を対象に本調査を行うこととした。

(1) 検出遺構

検出された遺構は、竪穴住居跡2棟、土坑5基、焼土遺構1基、陥し穴状遺構(※以下、陥し穴と略す)11基である。遺構の大半はA区で確認されている。B区は現況が水田ということもあり、削平・盛土といった本来の地形からの改変が顕著で、焼土遺構と陥し穴が各1基ずつ確認されるにとどまった。

S K 01 竪穴住居跡(第3図、写真図版2・3)

<位置・検出状況> A区東側の平坦部に位置し、検出面はIV層である。褐色土・暗褐色土・黒褐色土の混在する不整形なプランで検出した。

<重複遺構> S K T 10を切る。また、S K 01 A・Bと近接しており、直接的な切り合いは調査では見られなかつたが、同時存在はないものと判断される。

<平面形・規模> 径約280cmの円形を呈する。

<埋土> 7層に細分した。全体に褐色土・暗褐色土・黒褐色土が混在する。下位には部分的に灰白色系の火山灰が見られる。鑑定を行ったが、十和田起源火山灰の二次堆積との結果であった。

<壁・床面> 壁は床面との境が明確ではなく、緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは最深部で約30cmを測る。床面はやや凹凸が見られ、部分的に縮まりが認められる。

<炉> 中心部に地床炉を確認した。約50×30cmの楕円状に赤褐色焼土が広がる。焼成面は非常に堅く縮まり、深度は約20cmと良好である。

<床面施設> 中心部に土坑(K 1)を確認した。開口部径約110cmの円形を呈する。黒褐色土の単層

で、深さは約25cm、断面形は中央部がやや低い播鉢状となる。上記の地床炉がこのK1覆土上面に形成されていることから、地床炉形成以前の掘り込みであると判断される。

＜遺物＞土器は約3.9kgが出土し、このうち復元の良好な9点(1～9)を掲載した。石器は敲磨器(37)・礫器(38)の2点が下層より出土した。

＜時期＞出土遺物から縄文時代後期前葉に帰属すると考えられる。また、床面より採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、 $2,960 \pm 30$ yrBPという結果が得られた。

S I 02堅穴住居跡(第3図、写真図版3)

＜位置・検出状況＞A区東側のはば平坦部に位置する。検出時に焼土範囲を確認したことから、当初は焼土遺構と考えたが、僅かであるが覆土と考えられる土層を確認したこと、周辺に柱穴を検出したことから、堅穴住居跡と判断するに至った。

＜平面形・規模＞上記のとおり、南側に壁と思われる部分を確認した。その範囲から推定すると径550cm前後の円形を呈するものと考えられる。

＜埋土＞部分的に確認できたのは黒褐色土の単層である。

＜壁・床面＞壁の明確な立ち上がりは不明。床面と思われる範囲も同様に不明だが、炉周辺はほぼ平坦である。

＜炉＞約45×40cmの円形に広がる赤褐色焼土である。焼成の深度は約10cmを測る。

＜床面施設＞南側において柱穴を2個(P1・2)確認した。いずれも径40～50cmの円形を呈し、深さは50cm台である。

＜遺物＞本遺構に伴うものか不明な点はあるが、検出時に炉周辺から出土したものも合わせると、土器約1.8kg、石器1点が出土した。このうち、土器3点(10～12)と石匙(39)を掲載した。

＜時期＞出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。

S K01A・B土坑(第4図、写真図版4)

＜位置・検出状況＞A区東側の平坦部に位置し、検出面はIV層である。当初は隣接するS I 01の覆土の一部と捉えたが、精査の結果、それと異なる単独の土坑であることが判った。また、精査中は袋状に下部が広がる形態のものと考えていたが、断面状況から上下に重複する2基の土坑であると判断した。上部の土坑をSK01A(以下Aと表記)、下部をSK01B(以下Bと表記)した。

＜重複遺構＞AがBを切る。

＜平面形・規模＞Aは開口部径約210cm、底部径約200cmの円形を呈する。Bは上部がAに切られているため全容は不明だが、開口部の残存直径約180cm、底部約170×150cmの楕円形を呈する。

＜埋土＞Aは5層に細分した。主体は黒褐色土で、下位に黑色土が堆積する。Bは13層に細分した。黒褐色土を主体とし、壁側は崩落した黄褐色土や流入した地山起源の褐色土が堆積する。自然堆積か。

＜壁・底面＞Aの壁は北側では中位で内湾、南側では外側に膨らみ立ち上がり、深さは約80cmを測る。底面はやや凹凸が認められる。Bの壁はやや外傾して立ち上がり、深さは約45cmが残存、検出面から推定される深さは120cmである。底面は平坦である。

＜遺物＞土器はAから約700g、Bからは約50g出土した。石器は出土していない。このうち、Aより出土の1点(13)を掲載した。

＜時期・機能＞縄文時代後期の範疇に含まれると考えられる。

S K03土坑(第4図、写真図版4)

＜位置・検出状況＞A区南東側の平坦部に位置し、検出面はIV層である。

＜平面形・規模＞開口部径約140cm、底部径約90～100cmの円形を呈する。

(1) 南川尻遺跡

<埋土> 3層に細分した。下位に暗褐色土、上位に黒褐色土が堆積する自然堆積と考えられる。

<壁・底面>壁は底面から緩やかに立ち上がり、深さは約30cmである。底面は概ね平坦である。

<遺物>なし。

<時期・機能>詳細不明。

S K04土坑(第4図、写真図版4)

<位置・検出状況> A区東側の平坦部に位置し、検出面はIV層である。

<平面形・規模> 開口部約90×80cm、底部約80×60cmの楕円形を呈する。

<埋土> 3層に細分したが、主体となるのは黒褐色土である。中位には黄橙色土の火山灰ブロックが見られる。自然堆積と考えられる。

<壁・底面>壁は底面から緩やかに立ち上がり、深さは約20cmを測る。底面は概ね平坦である。

<遺物>なし。

<時期・機能>出土遺物がないため詳細は不明。中位より出土の火山灰を鑑定委託したところ、S I 01同様、十和田起源の二次堆積という結果であった。直接的な時期を特定するには至らなかったが、S I 01と同等の時期である可能性が高いものと考えられる。機能については不明。

S K05土坑(第4図、写真図版4)

<位置・検出状況> A区北東側の平坦部に位置し、検出面はIV層である。

<平面形・規模> 開口部約110×100cm、底部径約70cmの円形を呈する。

<埋土> 暗褐色土の単層である。

<壁・底面>壁は外傾して立ち上がり、深さは約20cmである。底面には凹凸が認められる。

<遺物>土器が約10g出土した。

<時期・機能>詳細不明。

S N01焼土遺構(第4図、写真図版7)

<位置・検出状況> B区北側の傾斜地に位置する。IV層で検出した。

<平面形・規模> 110×70cmの楕円に近い形状である。

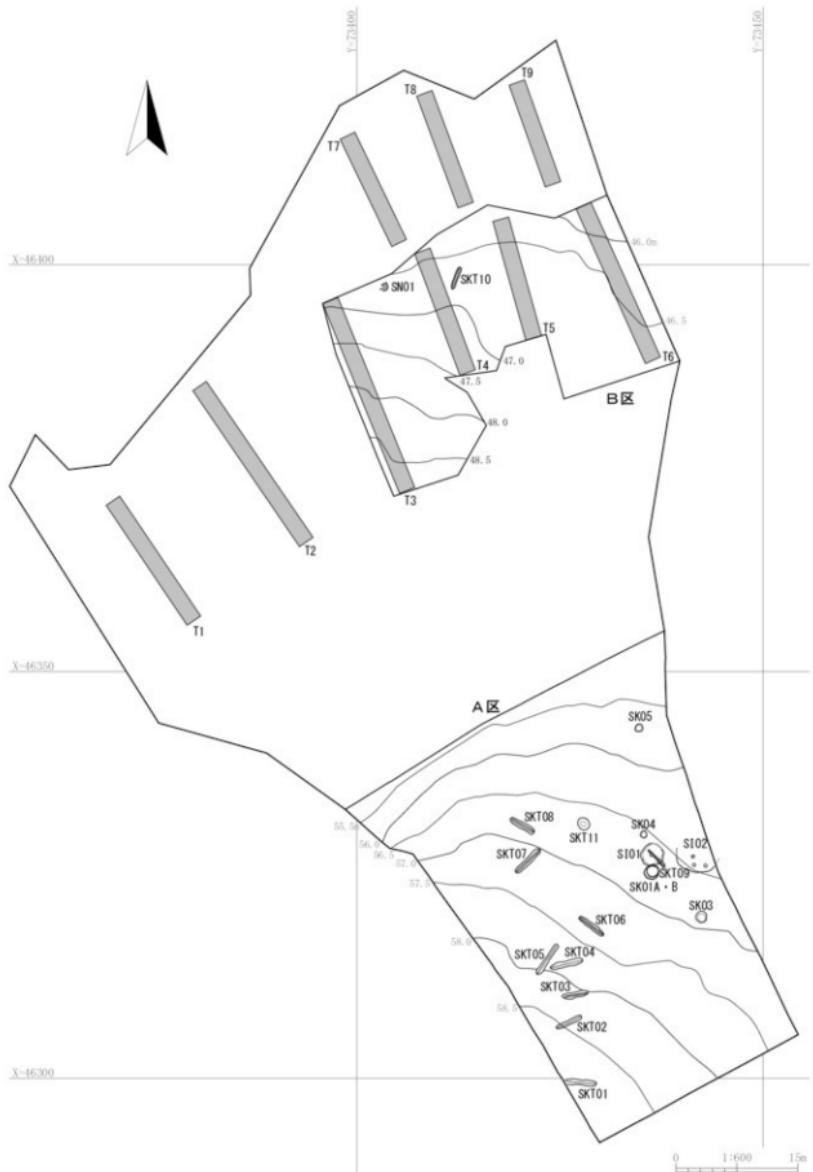
<厚さ・色調>被熱深度は最大10cmを測る。赤褐色を呈する。上面には縮まりが認められる。

<遺物>本遺構周辺から多くの遺物が出土しており、本遺構に関連する可能性があることからこれらを含めている。土器は約6.9kg出土しており、石器は出土していない。このうち8点(14~21)を掲載した。

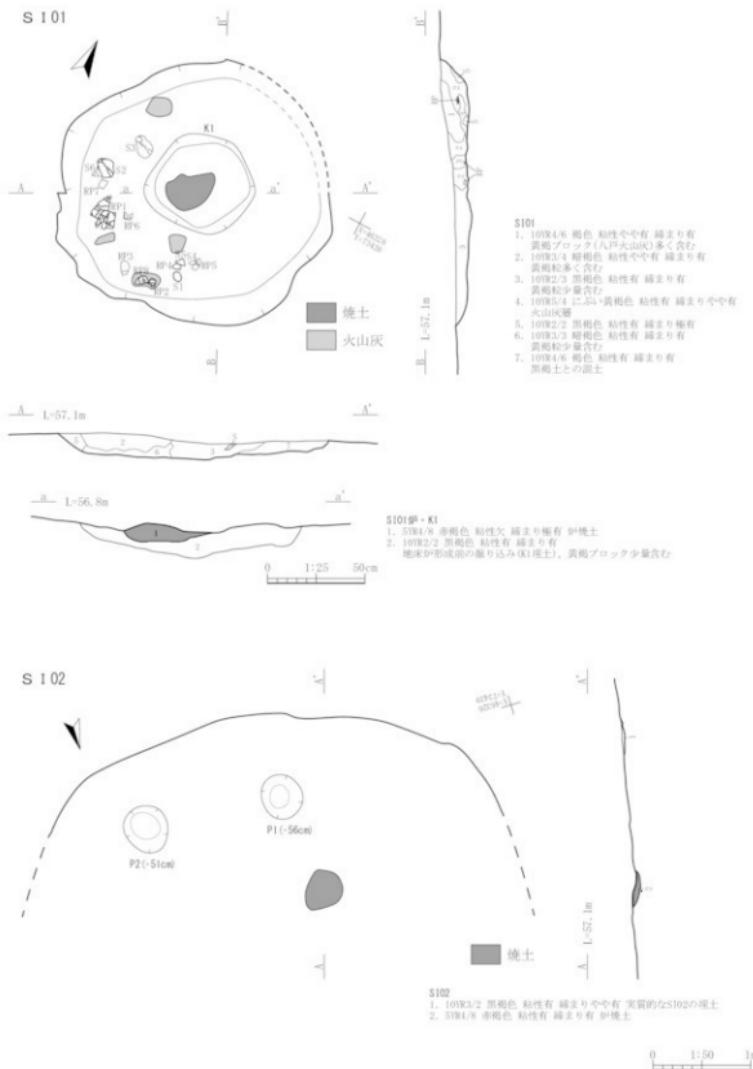
<時期>上記の遺物から縄文時代後期後葉が想定される。攪乱が著しく断定はできないものの、遺物の出土状況から推察すると、本遺構は堅穴住居跡の炉であった可能性がある。

S K T01~11陥し穴状遺構(第1表、第5~7図、写真図版5~7)

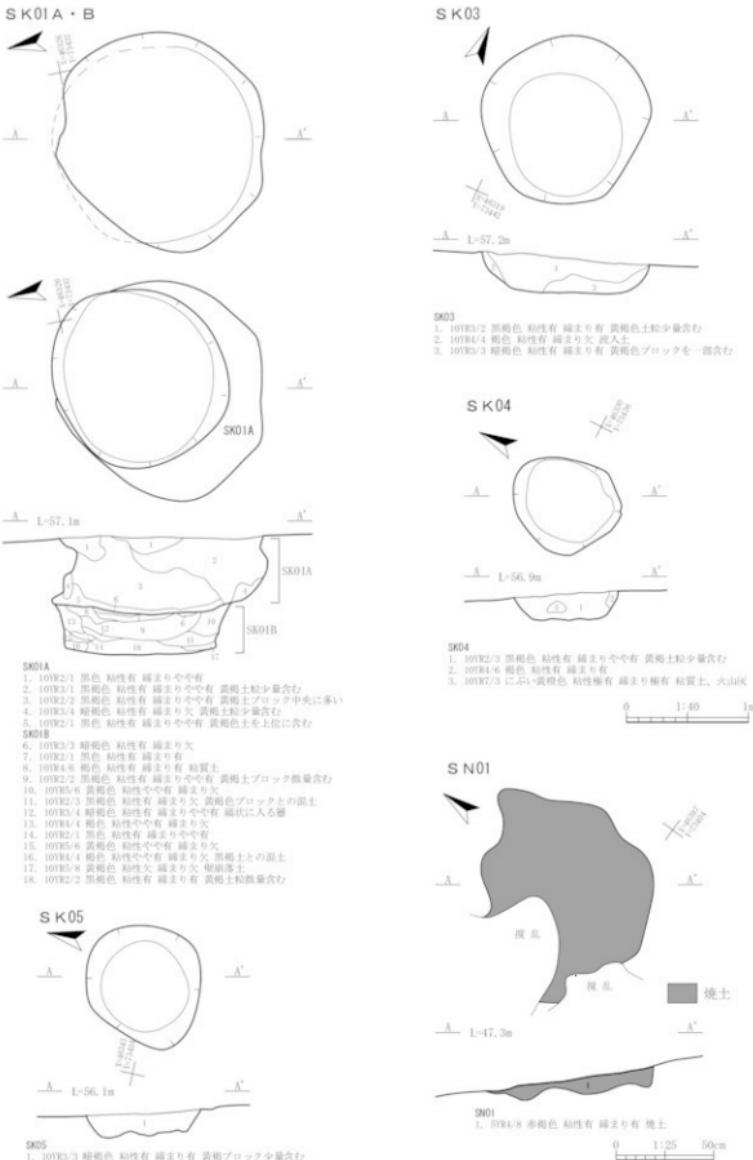
紙幅の都合により各遺構の詳細は第1表に記した。概観のみ述べると、A区で10基、B区で1基検出されている。溝状の形態のものがほとんどであり、円形のものはS K T11のみである。分布状況としてはA区南西部に集中しており、これらの大半は長軸方向が等高線にはほぼ平行する。S K T05・07が等高線に直交するが、これらが重複することがないことから同時期に計画的に配置された可能性が窺える。



第2図 遺構配置図

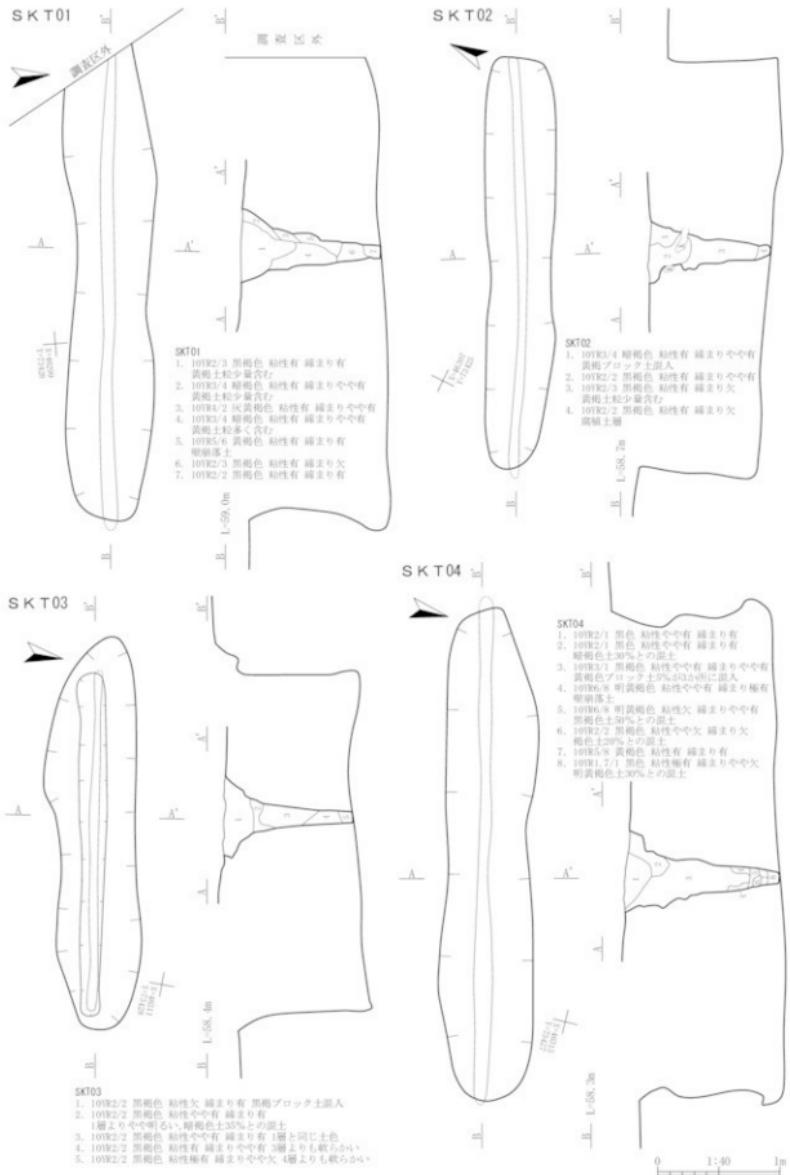


第3図 S 101・02

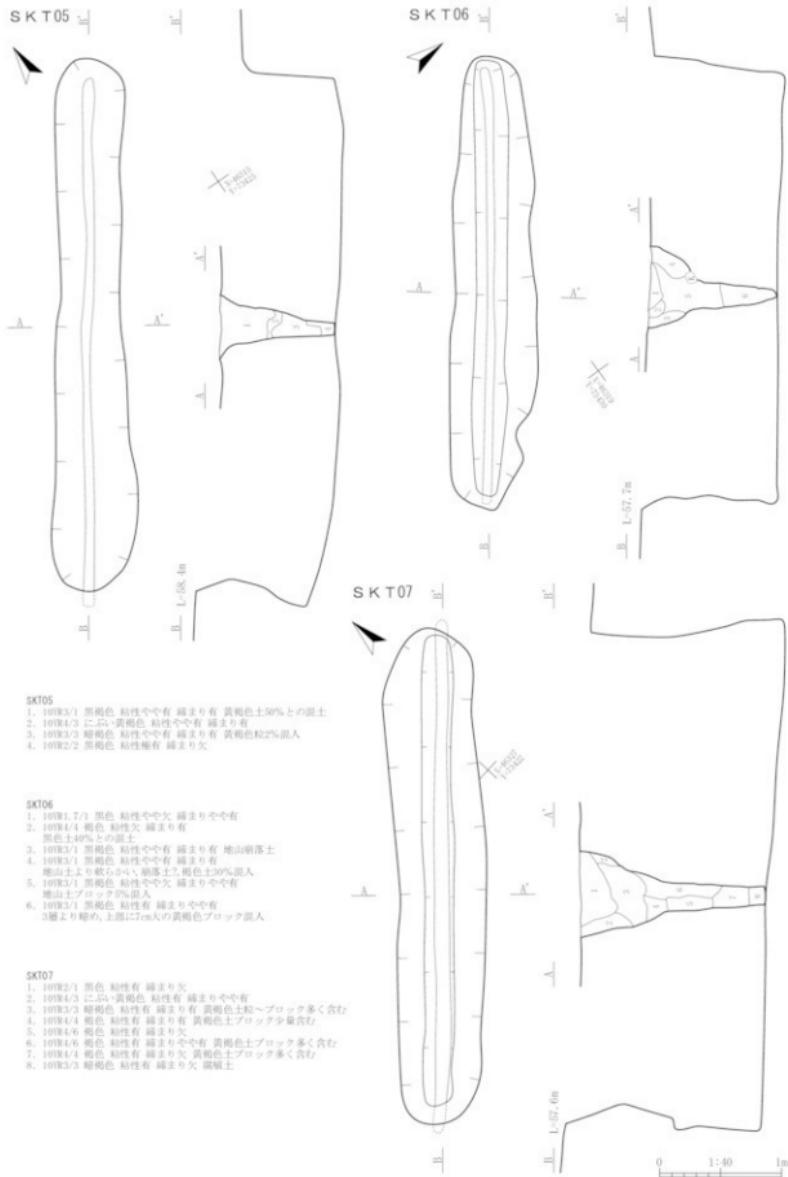


第4図 SK01~05、SN01

(1) 南川尻道路

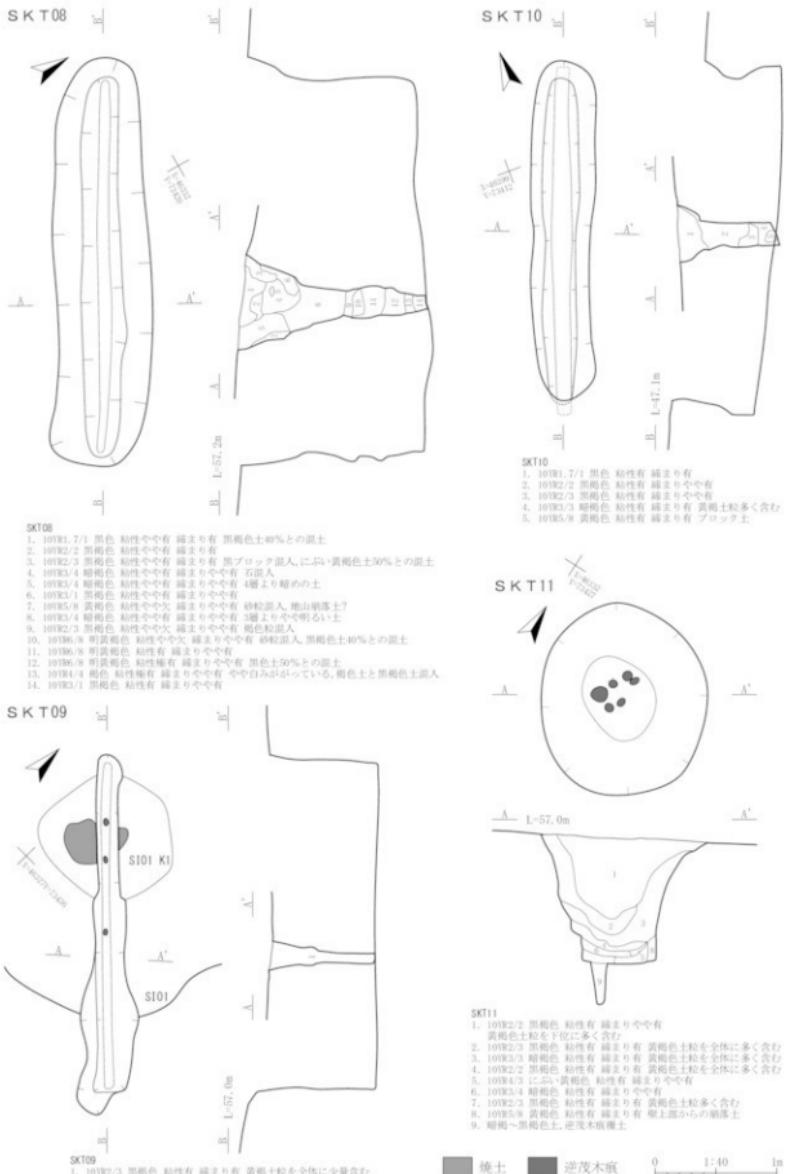


第5図 SKT01~04



第6図 SKT 05 ~ 07

(1) 南川尻道路



第7図 SKT08~11

第1表 陥穴一覧表

遺構名	区域・位置	検出面	規模(cm)		形状	主軸方位	残存深度(cm)	出土遺物	特記所見	回版	写真回版
			開口部	底部							
S KT 01	A区・南西	V層	390以上×70	390以上×10	溝状	東・西	115	なし	西端は調査区外へ届く	5	5
S KT 02	A区・南西	V層	340×60	345×8	溝状	北北西・南南東	90~100	なし		5	5
S KT 03	A区・南西	V層	320×60~70	280×5~8	溝状	東・西	110	なし		5	5
S KT 04	A区・中央西	V層	400×65~75	420×10	溝状	東・西	120~130	なし		6	6
S KT 05	A区・中央西	V層	430×50~70	430×7	溝状	北東・南西	80~100	なし		6	6
S KT 06	A区・中央	V層	370×70	360×5~10	溝状	北西・南東	105	なし		6	6
S KT 07	A区・中央北	IV層	400×70	420×10	溝状	北東・南西	160	土器280g		6	6
S KT 08	A区・中央北	IV層	330×80	300×6~10	溝状	北西・南東	150~190	土器90g		7	6
S KT 09	A区・中央東	IV層	300×30~50	275×6	溝状	北西・南東	85~100	なし	S101と重複、切られる 追茂木痕3個確認、深さ約 20cm	7	7
S KT 10	B区中央北	IV層	280×5	285×10~17	溝状	北北東・南南西	60~85	なし		7	7
S KT 11	A区中央北	IV層	160×135	70×55	梢円形	—	100	なし	追茂木痕6個確認、 深さ30~35cm	7	7

(2)出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器は大コンテナ3箱(総量27.1kg)、石器は中コンテナ1箱(総量8.3kg)である。掲載したのは、土器は36点(1~36)、石器は18点(37~54)である。選択基準としては、土器はおよそ形状がわかるもの、時期を特定できる文様をもつものなどを抽出、石器は出土した全点を掲載した。

土器は大半が遺構外からの出土であり、遺構内としてはS I 01からの出土が最も多い。時期的には、36以外は縄文時代後期前葉と後期後葉の2時期におよそ含まれる。後期前葉とした土器は、S I 02周辺やA区遺構外からの出土が多い。特徴として、12・20・24のように沈線による幾何学的な文様が見られるものがある。10・22は平行に引かれた沈線により文様帯が区画され、無文帯には丁寧なミガキが認められる。22は口縁突起部に「ノ」字状の貼付が見られることから、他より一段階古い可能性もある。29は小径の底部をもつものである。形状から施塙土器の可能性も考えられる。後期後葉に含まれる土器は全体で最も多く、約7割がこれに帰属する。全体的な特徴として、口縁部が山型突起をもつものや沈線間に刻みが施されるもの、無文のものなどがある。5・14・15・30~32は口縁部が山型に突起するものである。いずれも口唇部に刻みが入り、下部には沈線が施される。17~19は並行する沈線間に刻みが施されるものである。17はこれにボタン状の貼付が伴う。3・4・6・7・11・13・31・33・34は無文の土器である。器種が椀となるものが多く、口縁部が残るものは口唇が角張ったり、上端が平坦となるのが特徴である。内外面とも丁寧にナデ成形されるものが多いが、6・11のように成形が粗いものも見受けられる。3は小型の注口土器である。この他、縄文のみのものがあるが、全体的に筋が細かいものが多く、1・2のように輪積み痕が顕著なものがある。36のみ上記の時期から外れる。縄文のみのため可能性の示唆に止めるが、底部からの立ち上がりの形状から縄文時代晩期~弥生時代に属する可能性がある。

石器は遺構内からの出土は3点のみで、他はすべて遺構外からの出土である。器種としては、敲磨器や礫器、打製石斧といった礫石器がほとんどで、剥片石器は1点のみである。敲磨器としたのは37・48~54である。37は敲き痕と磨り痕の両方が見られ、縁辺を敲き、平坦面を磨りに使用している。48~52は敲き痕のみ見られるもので、稜の明確な側面に使用痕を残すものや全体に痕跡を残すものがある。53・54は磨り痕のみ見られるものである。縁辺の一部に鈍角な刃部を有するものを礫器としたが、38・45~47がこれにあたる。40~44は打製石斧である。礫器と異なり定形性をもつものをこれに含めた。40・42は刃部を側面にも有する。

5 総括

今回の調査の結果、南川尻遺跡は縄文時代後期の集落と狩猟場を併せ持つ遺跡であることが明らかとなった。時期としては、出土土器から縄文時代後期前葉と後葉の大きく2時期に分かれるが、後葉のものが多数を占める。前者に帰属する可能性のある遺構はS I 02、後者ではS I 01・S K 01・S K 04・S N 01である。遺構は谷側のB区では水田による地形変更のため遺構は少数しか確認されず、尾根上のA区でその大半が確認できる。このA区においては、遺構の配置に一定の傾向が観察でき、西側に溝状の陥し穴が集中する。これらは長軸方向が等高線に平行するものが多いが、重複するところなく、概ね直線上に並ぶことからも、同時期に計画的に配置された可能性が高い。一方、堅穴住居跡や土坑類といった集落に関係する施設はA区の東側に多い傾向にある。陥し穴が集中する西側ではこれらの遺構が確認されないことから、同時期での居住域・狩猟場といった場の使い分けが行われていたことが推測される。また、配置的にも陥し穴は調査区外南西方向に、居住施設は東方向に続いている可能性が考えられる。

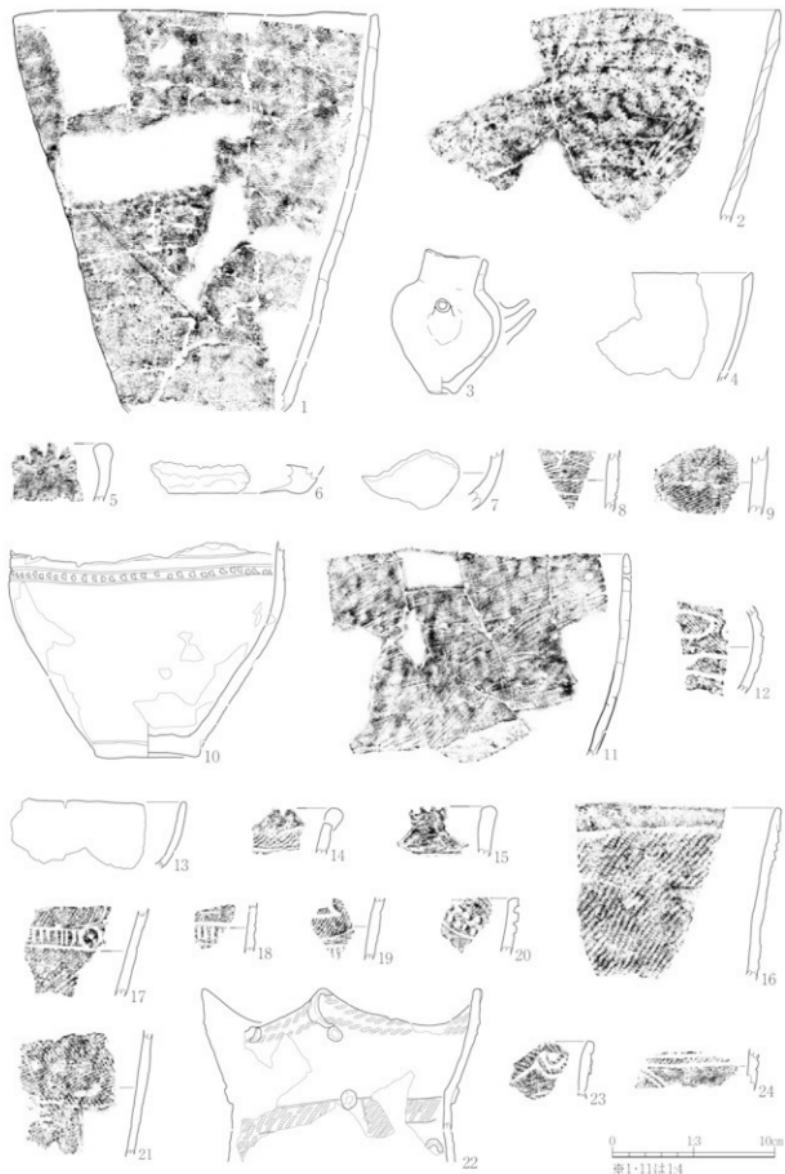
なお、南川尻遺跡に関する報告はこれを以ってすべてとする。

<引用・参考文献>

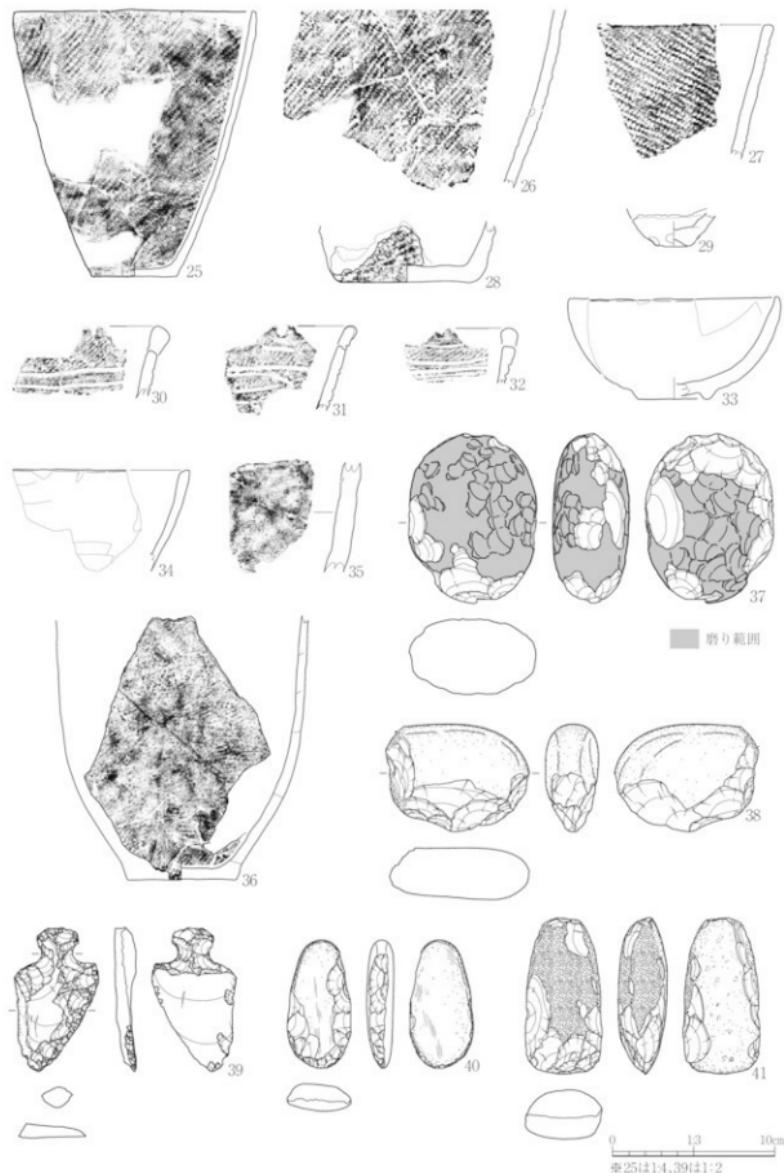
- 種市町教育委員会 2005 「種市町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ」 種市町埋蔵文化財調査報告書第2集
洋野町教育委員会 2013 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集

第2表 土器觀察表

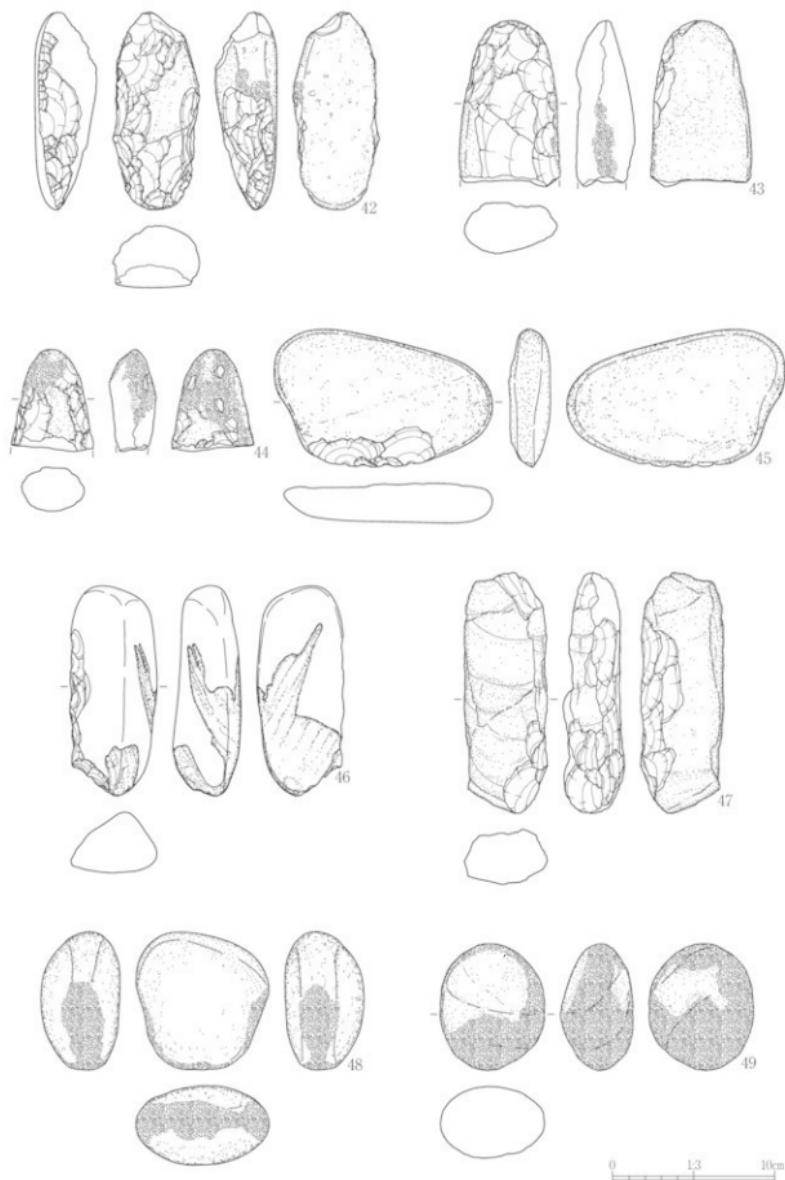
No.	出 土 地 点	層 位	器 種	部 位	文様・符號・その他		時 期	備 考
					外 面	内 面		
1	S 001 RP1-6~7	床面	漆鉢	口縁~側	RL縦・底		ナガ	後期後葉
2	S 001 RP8	床面直上層	漆鉢	口縁~側	無文・輪模み痕跡者・ナガ		ナガ	後期後葉
3	S 001 RP2	床面直上層	口縫	完形	無文・ナガ		ナガ	後期後葉
4	S 001	埋土	鉢?	口縁	口縁平無・無文・ミガキ		ナガ	後期後葉
5	S 001 ♯PK1	埋土	漆鉢	口縁	波状口縁(山型突起)・口唇に剥み		ナガ	後期後葉
6	S 001 北西	埋土・床面	鉢	底	無文・ナガ		ナガ	後期後葉
7	S 001 ♯PK1	埋土	碗?	底	無文・ナガ		ナガ	後期後葉
8	S 001	床面	漆鉢	側	LR縦→沈縦		ナガ	後期後葉
9	S 001 中央	床面	漆鉢	側	LR縦		ナガ	後期後葉
10	S 002 周辺		漆鉢	側~底	丸縛(平行)・刺突・下部平無・ミガキ		ナガ	後期前葉
11	S 002 周辺		漆鉢	口縁~側	無文・斜方向へのナガ顎者・被修孔		ナガ	SK01A埋土出土と接合
12	S 002	床面	漆鉢	側	L縦→沈縦		ナガ	後期前葉
13	SK01A	埋土	鉢	口縁~側	無文・ミガキ		ミガキ	後期後葉
14	SNN1 周囲		漆鉢	口縁	波状口縁(山型突起)・口唇に剥み・上横→沈縦		ナガ	後期後葉
15	SNN1 周囲		漆鉢	口縁	波状口縁(山型突起)・口唇に剥み・沈縦・ミガキ		ナガ	後期後葉
16	SNN1 周囲		漆鉢	口縁~側	剪造口縁・加縫		ナガ	後期後葉
17	SNN01 周囲		漆鉢	側	ハサ伏突起粘付・丸縛・開削み		ナガ	後期後葉
18	SNN01 周囲		漆鉢	側	沈縦・平行)・開削み		ナガ	後期後葉
19	SNN1 周囲		漆鉢	側	沈縦・LR縦		ナガ	後期後葉
20	SNN1 周囲		漆鉢	側	BL縦・刺突・底		ナガ	後期前葉?
21	SNN1 周囲		漆鉢	側	柱状(上横・底横)・加縫		ナガ	後期後葉
22	AK 北寄り西端	Ⅲ層	漆鉢	口縁~側	波状口縁(山型突起4つ)・L縦・底(2条)・ボタン状突起粘付・ノリ字彫刻付・ミガキ・北縫(金)・LR縦		ミガキ	後期初期~前葉
23	AK 中央北寄り	Ⅲ層	漆鉢	口縁	波状口縁(山型突起)・點付→BL縦・刺突		ナガ	後期前葉
24	AK 北側	Ⅲ層	漆鉢	側	丸縛(平行)・側		ナガ	後期前葉
25	AK 東斜面土器	黑色土層(Ⅲ層)	漆鉢	口縁~底	BL縦→ミガキ付近→BL縦横		ミガキ	後期前葉
26	AK 北寄り西端	Ⅲ層	漆鉢	口縁	口縁~側		ミガキ	後期前葉
27	AK 北寄り西端	Ⅲ層	漆鉢	口縫	口縫平縦・LR縦		ナガ	後期前葉
28	AK 北寄り西端	Ⅲ層	漆鉢	底	底縫・LR縦		ナガ	後期前葉
29	AK 中央南寄り	?	鉢?	底?	無文・斜縫・丸縫		ナガ	後期前葉?
30	AK 北寄り東	Ⅲ層	漆鉢	口縫	波状口縁(山型突起)・口縫剥み・上横→沈縦・彩色(赤褐色)		ナガ	後期後葉
31	BK 黒色土層(Ⅲ層)	漆鉢	口縫	波状口縁(山型突起)・口縫剥み・RL縦→沈縦		ナガ	後期後葉	
32	BK 北側	Ⅲ層	漆鉢	口縫	波状口縁(山型突起)・口縫剥み・RL縦→沈縦		ナガ	後期後葉
33	AK 中央	Ⅲ層	鉢?	口縫~底	無文・ナガ		ナガ	後期後葉
34	AK 北寄り東	Ⅲ層	漆鉢	口縫?	口縫・無文・ナガ		ナガ	後期後葉
35	BK 北側	Ⅲ層	漆鉢	側	無文・ナガ		ナガ	後期後葉
36	BK T9	砂層	漆鉢	口縫~底	RL縦		ミガキ	弥生?



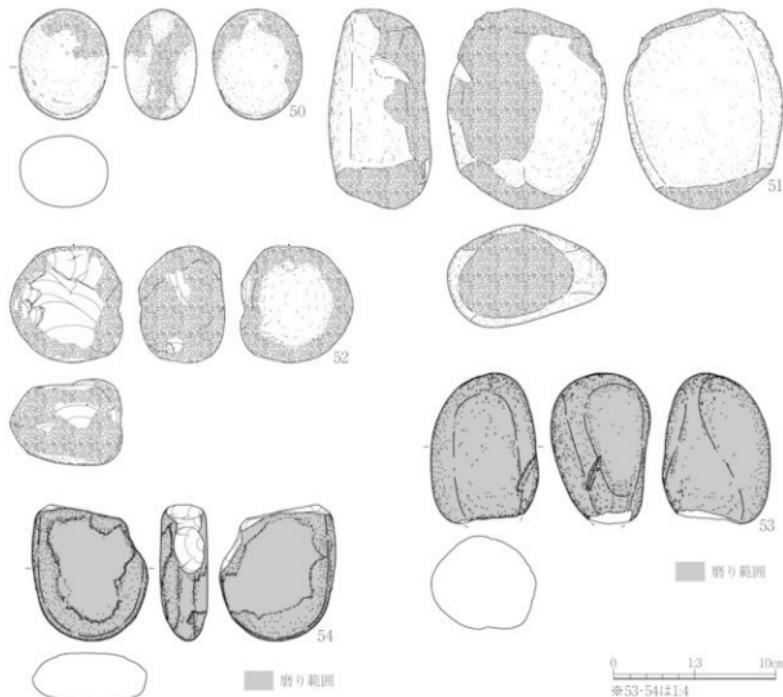
第8図 土器(1)



第9図 土器(2)、石器(1)



第10図 石器(2)



第11図 石器(3)

第3表 石器観察表

No.	出土地点	層位	器種	計測値 () は残存値				石質	産地・時代	備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
37	SI01	床面直上層	敲磨器	10.6	7.9	4.7	5608	花崗岩	中生代白堊紀・北上山地	
38	SI01 西	埋土下位	鍤器	6.7	8.7	3.3	328.6	はんれい岩	中生代白堊紀・北上山地	
39	SI02 邊周辺		石匙	5.7	3.5	0.9	140	頁岩	中生代・北上山地	
40	A1区 北東	Ⅲ～Ⅳ層	打製石斧	8.0	4.0	1.7	76.2	ピン岩	中生代・白堊紀・北上山地	
41	A1区 中央	IV層	打製石斧	9.7	4.8	3.0	2032	砂岩	中生代・北上山地	
42	A1区 中央	Ⅲ層	打製石斧	12.2	5.3	3.8	334.4	細粒閃綠岩	中生代白堊紀・北上山地	
43	A1区 南東	Ⅲ層	打製石斧	9.9	6.2	3.6	333.7	ピン岩	中生代白堊紀・北上山地	下部欠損
44	A1区 北東	Ⅲ～Ⅳ層	打製石斧	6.2	5.1	2.8	115.7	細粒閃綠岩	中生代白堊紀・北上山地	下部欠損
45	A1区 中央北	Ⅲ～Ⅳ層	鍤器	8.4	13.4	2.5	444.9	砂岩	中生代・北上山地	
46	A1区 中央北	Ⅲ～Ⅳ層	鍤器	13.0	5.4	4.1	436.3	はんれい岩	中生代白堊紀・北上山地	
47	A1区 中央西	Ⅲ～Ⅳ層	鍤器	14.9	5.2	3.8	386.9	半花崗岩 (アグライト)	中生代白堊紀・北上山地	
48	A1区 中央東	Ⅲ～Ⅳ層	敲石	8.5	8.2	4.9	577.3	はんれい岩	中生代白堊紀・北上山地	
49	A1区 中央北	Ⅲ～Ⅳ層	敲石	7.8	6.4	4.5	299.4	砂岩	中生代・北上山地	
50	A1区 北西	Ⅲ～Ⅳ層	敲石	6.9	5.5	4.5	235.0	砂岩	中生代・北上山地	
51	A1区 北西		敲石	12.3	9.7	6.2	982.6	砂岩	中生代・北上山地	
52	B1区 T3	Ⅲ層	敲石	7.2	6.8	5.8	465.3	はんれい岩	中生代白堊紀・北上山地	
53	A1区 中央北	Ⅲ～Ⅳ層	磨石	(124)	8.9	8.2	1181.8	半花崗岩 (アグライト)	中生代白堊紀・北上山地	
54	A1区 北西端	Ⅲ～Ⅳ層	磨石	(108)	9.5	3.9	649.6	砂岩	中生代・北上山地	

[分析鑑定報告 1]

南川尻遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

南川尻遺跡は、岩手県九戸郡洋野町種市第28地割内(北緯40°24'51"、東経141°41'54")に所在する。測定対象試料は、堅穴住居跡 S I 01の床面から出土した炭化物の合計 1 点である(表1)。

2 測定の意義

遺跡内における堅穴住居跡の時期を特定する。

3 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸(AAA : Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO_2)を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とパックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが 100 以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示

される。グラフの縦軸が $\delta^{13}\text{C}$ 年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $\delta^{13}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。曆年較正年代は、 $\text{^{14}C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果測定

結果を表1・2に示す。試料No.1の $\text{^{14}C}$ 年代は 2900 ± 30 yrBP、曆年較正年代(1σ)は1216~1127calBCの範囲で示され、繩文時代晚期初頭に相当する(小林編2008)。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

引用文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧繩文土器、総覧繩文土器刊行委員会、アム・ブロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

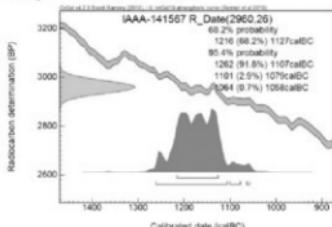
表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-141567	No.1	SI01 床面	炭化物	AAA	-27.07 \pm 0.63	2,960 \pm 30	69.18 \pm 0.23

表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 $\text{^{14}C}$ 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ曆年代範囲	2σ曆年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-141567	2,990 \pm 20	68.89 \pm 0.21	2,960 \pm 26	1216calBC - 1127calBC (68.2%)	1262calBC - 1107calBC (91.8%) 1101calBC - 1079calBC (2.9%) 1064calBC - 1058calBC (0.7%)

[図版] 曆年較正年代グラフ



[分析鑑定報告2]

南川尻遺跡における火山灰分析

(株)パリノ・サーヴェイ

はじめに

九戸郡洋野町南川尻遺跡の発掘調査では、縄文時代後期～晩期の竪穴住居、土坑等の遺構や縄文土器、土師器等の遺物が検出されている。今回の分析調査では、遺構覆土より採取した火山灰質試料を対象として、テフラの検出同定や屈折率測定により、既知の火山灰との対比を行い、遺構の年代指標を作成する。

1 試料

試料は、竪穴住居 S I01(試料名「MKJ-141027 SI01 南西 床面直上」)、土坑 S K04(試料名「MKJ-141028 SK04 埋土中位」)から各1点採取された。計2点である。

2 分析方法

(1) テフラ検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、实体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

(2) 火山ガラスの屈折率測定

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3 結果

(1) テフラ検出同定

結果を、表1に記す。両試料とも、軽石は検出されなかつたが、無色透明の軽石型火山ガラス、バブル型火山ガラスが極めて微量～微量混在する。またいずれの試料も、バブル型火山ガラスが少なく、SK04 埋土中位では、褐色のバブル型火山ガラスが極めて微量混在する。

表1 テフラ分析結果

試料番号		火山ガラス		軽石			備考
		量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
MKJ-141027	SI01 南西	床面直上	1 (+)	cl·pm>cl·bw	-	-	石英、斜長石の斑晶++
MKJ-141028	SK04	埋土中位	2 +	cl·pm>cl·bw, br·bw	-	-	石英、斜長石の斑晶++

凡例 - : 合まれない, (+) : きわめて微量, + : 微量

cl: 無色透明 hr: 褐色 bw: バブル型 pm: 軽石型

(2) 火山ガラスの屈折率測定

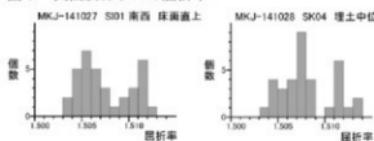
試料の火山ガラスの屈折率測定結果を図1に記す。

S I01 南西 床面直上で検出された火山ガラスの屈折率のレンジは、n1.503-1.512であり、n1.505、n1.511の集中度が高い。

(1) 南川尻遺跡

S K04 埋土中位で検出された火山ガラスの屈折率のレンジは、n1.503-1.513であり、n1.507、n1.511の集中度が高い。

図1 火山灰ガラスの屈折率



4 考察

今回分析試料とした火山灰の可能性があるとされた2試料からは、わずかながら火山ガラスが検出されている。本遺跡の地理的位置を考慮すれば、これらは十和田カルデラからの噴出物である可能性が高い。

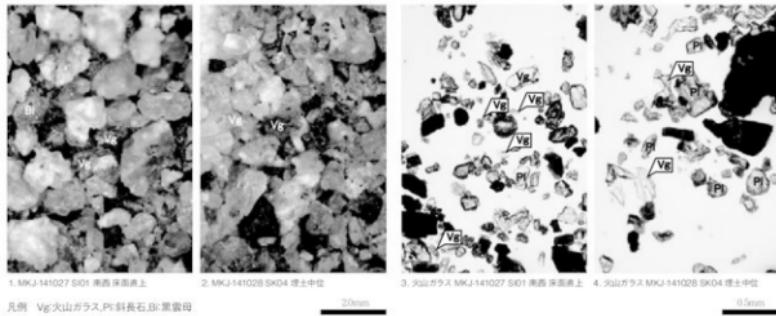
町田・新井(2003)による十和田カルデラの完新世テフラの火山ガラスの屈折率をみると、今回の試料のような比較的広い屈折率を示すテフラとしては、十和田八戸テフラ (To-H:町田・新井,2003;青木・新井,2000)がある。To-Hの噴出年代は、暦年較正年代で14,500-15,300年前との年代が得られている(青木・新井,2001)。

両試料で火山ガラスと共に含まれる石英、斜長石、黒雲母は、洋野町周辺に分布する前期白亜紀の黒雲母角閃石花崗閃綠岩に由来する鉱物であり、本遺跡付近の土壤に元々含まれていたと考えられる。北東北地域における発掘調査例をみると、旧石器時代終末期、縄文時代草創期の遺物包含層は、To-Hの火碎流が埋めていることがある(町田ほか,1984)。しかし、今回のテフラは微量の検出であることと、花崗閃綠岩に由来する鉱物片が混在していることから二次堆積物であると考えられ、直接遺構の年代に関わる資料としては、評価できないとみられる。

引用文献

- 青木かおり・新井房夫,2000.三陸沖海底コア KH94-3LM-8の後期更新世テフラ層序.第四紀研究,39,107-120.
古澤明,1995.火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.
町田洋・新井房夫,2003.新編 火山灰アトラス.東京大学出版社会,336p.
町田洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984.テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－.渡辺經編 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学,865-928.

図版1 テフラ





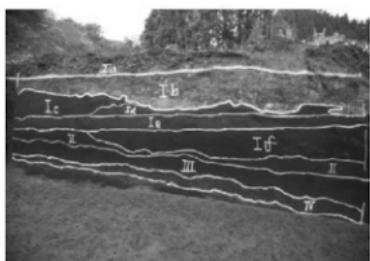
調査区 全景（上空→）



調査区 遠景（上空→）



調査前風景（S→）



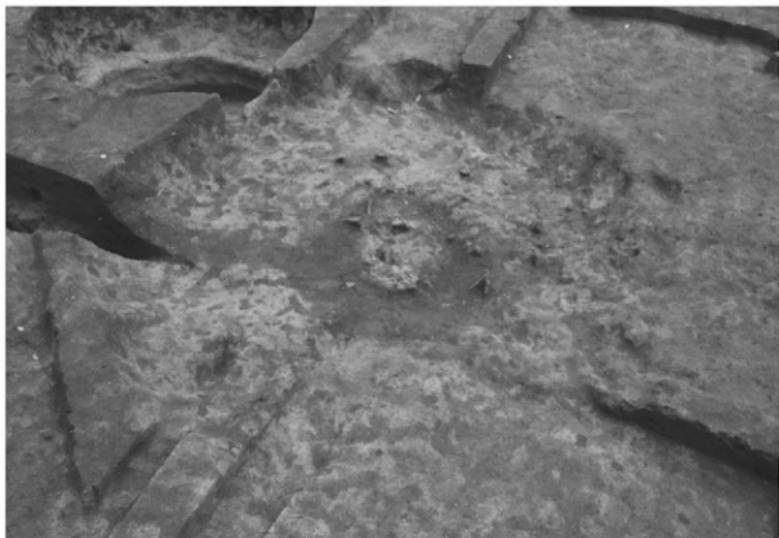
基本層序（B区）



作業風景

写真図版1 航空写真、その他

(1) 南川尻道路



S I 01 完據 (SE→)



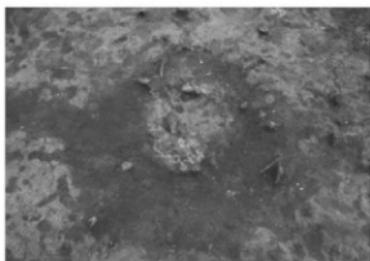
S I 01 埋土 (N→)



S I 01 埋土 (W→)

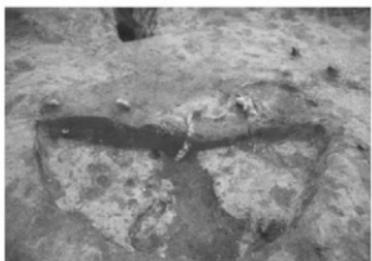


S I 01 遺物出土 (N→)

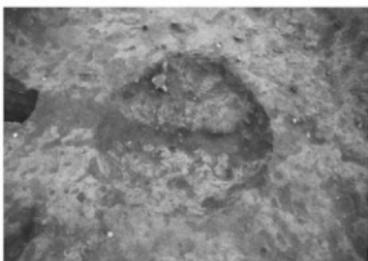


S I 01 炉 根出 (SE→)

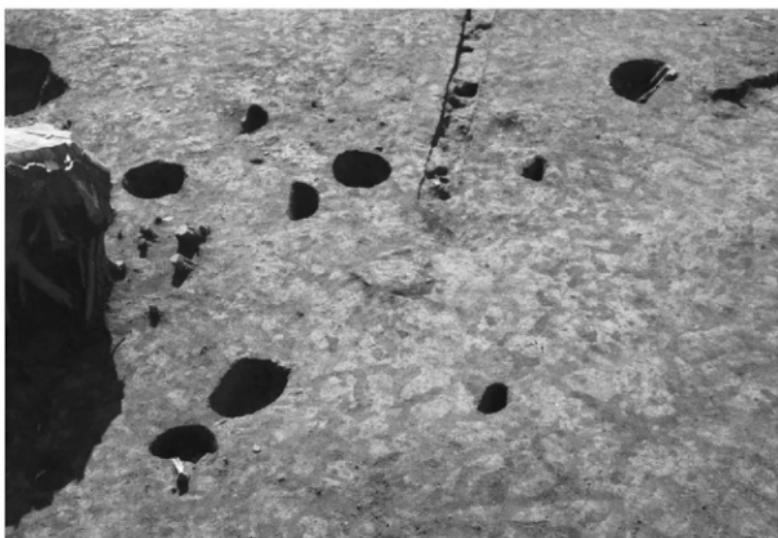
写真図版2 S I 01 窪穴住居跡 (1)



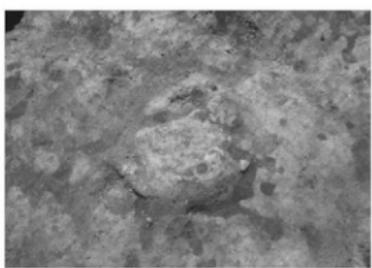
S I 01 炉・K 1 断面 (N→)



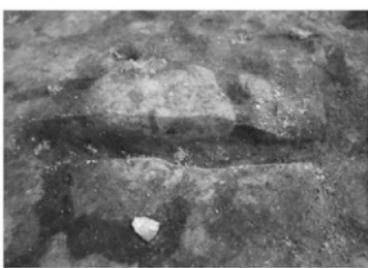
S I 01 K 1 完掘 (SE→)



S I 02 完掘 (NE→)



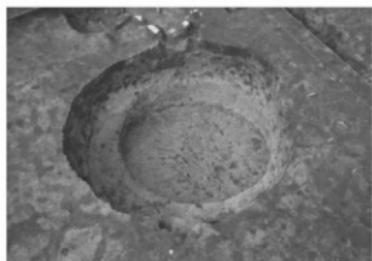
S I 02 炉 棚出 (N→)



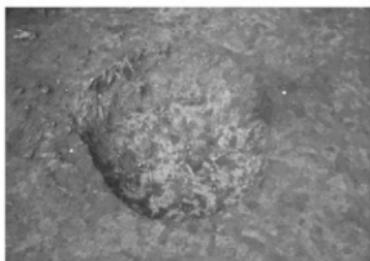
S I 02 炉 断面 (W→)

写真図版3 S I 01 (2)・02 竪穴住居跡

(1) 南川尻道路



SK 01 A・B 完掘 (S→)



SK 03 完掘 (S→)



SK 01 A・B 埋土 (NW→)



SK 03 埋土 (S→)



SK 04 完掘 (SW→)



SK 05 完掘 (E→)



SK 04 埋土 (W→)



SK 05 埋土 (W→)

写真図版4 SK 01 A・B・03～05土坑



SKT 01 完掘 (E→)



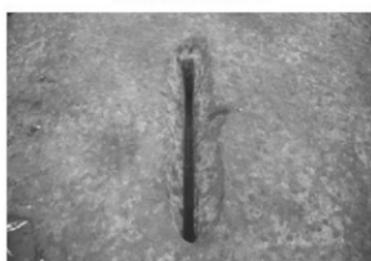
SKT 02 完掘 (E→)



SKT 01 埋土 (E→)



SKT 02 埋土 (E→)



SKT 03 完掘 (E→)



SKT 04 完掘 (E→)



SKT 03 埋土 (E→)



SKT 04 埋土 (E→)

写真図版5 SKT 01～04 陥し穴状遺構

(1) 南川尻道路



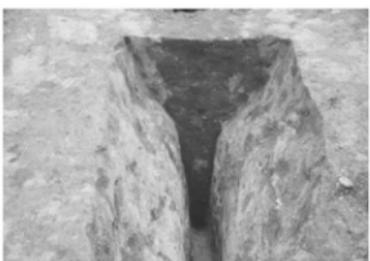
SKT 05 完掘 (E→)



SKT 06 完掘 (S→)



SKT 05 埋土 (W→)



SKT 06 埋土 (S→)



SKT 07 完掘 (W→)



SKT 08 完掘 (W→)



SKT 07 埋土 (W→)



SKT 08 埋土 (S E→)

写真図版6 SKT 05～08 裂し穴状遺構



SKT 09 完掘 (N→)



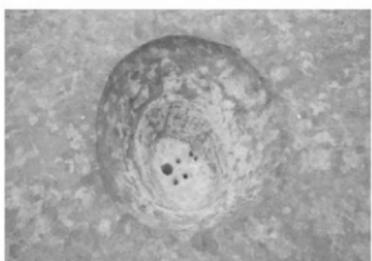
SKT 10 完掘 (N→)



SKT 09 埋土 (SE→)



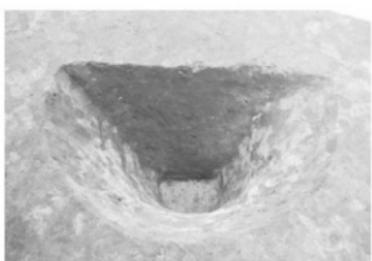
SKT 10 埋土 (N→)



SKT 11 完掘 (S→)



SN 01 梗出 (W→)



SKT 11 埋土 (S→)

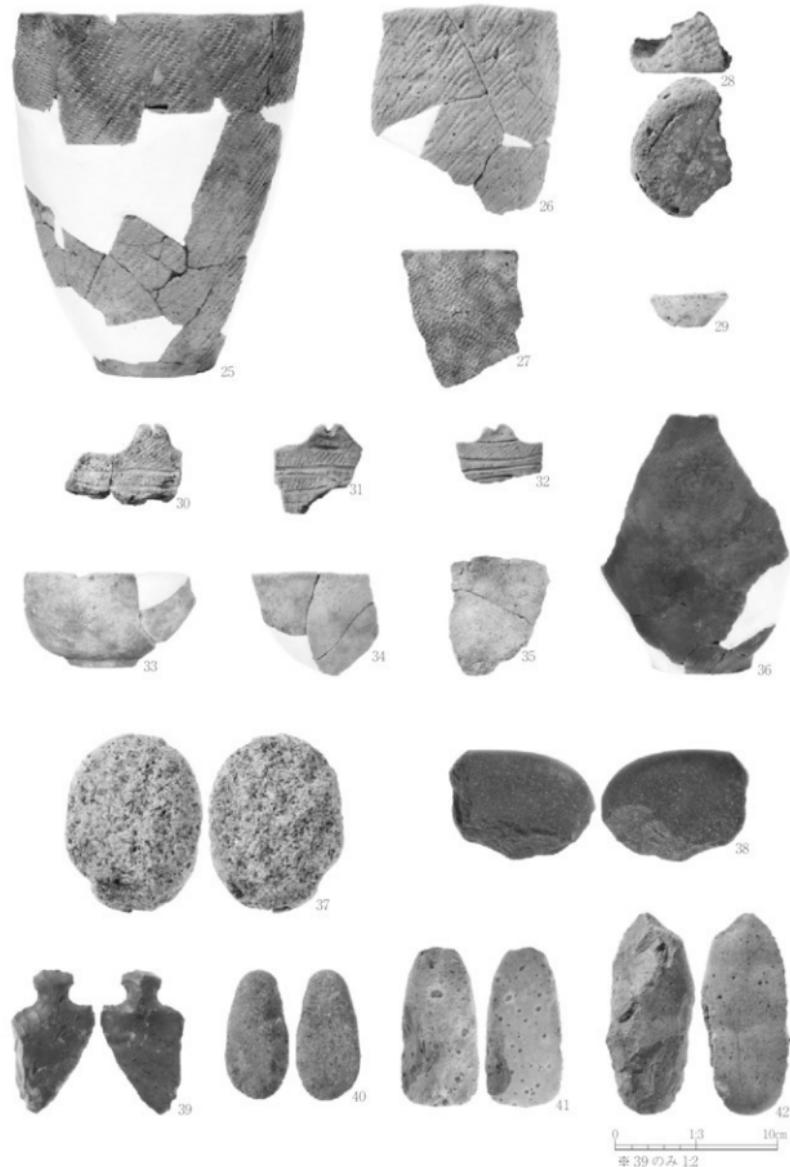


SN 01 断面 (W→)

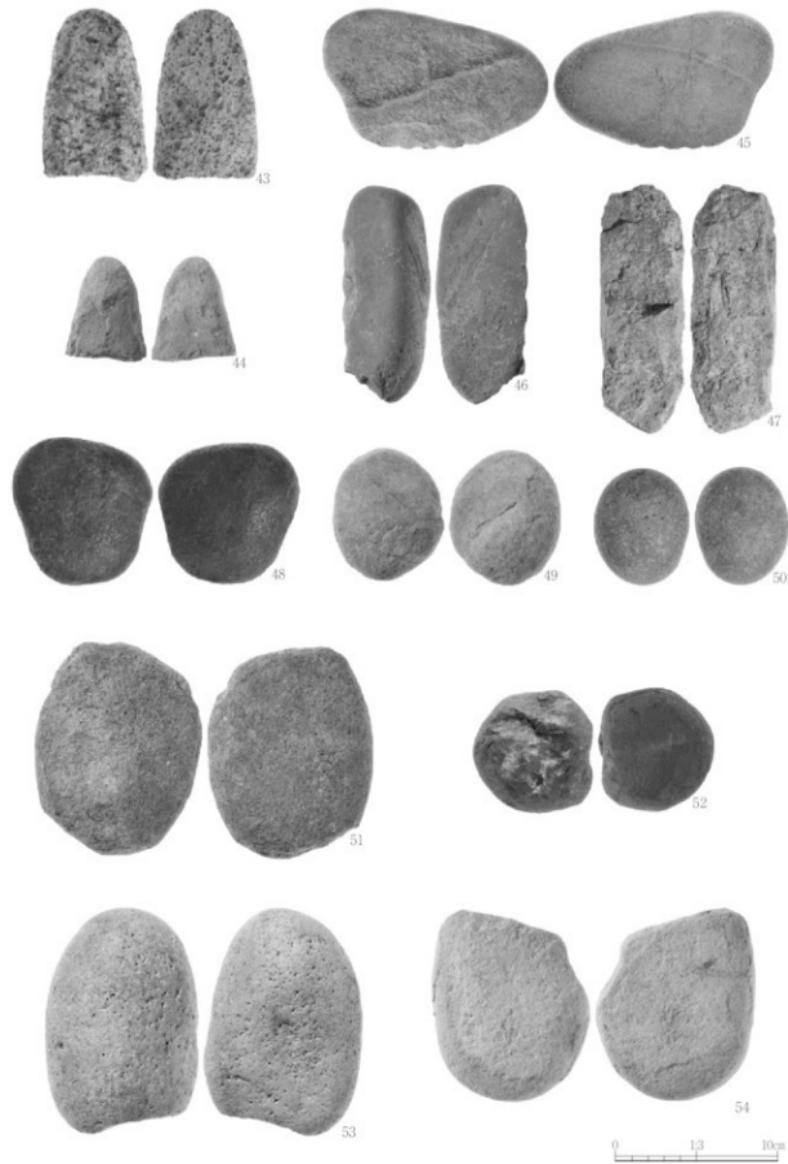
写真図版7 SKT 09～11 陥し穴状遺構、SN 01 焼土遺構



写真図版 8 土器 (1)



写真図版9 土器（2）、石器（1）



写真図版10 石器(2)

(2) 下向遺跡

所 在 地	九戸郡洋野町中野第1地割地内	遺跡コード・略号	I F 89-1394・S M-14
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	2,400m ²
事 業 名	三陸沿岸道路	調査終了面積	2,400m ²
発掘調査期間	平成26年4月9日～5月12日	調査担当者	濱田 宏・宮内勝巳・ 藤田崇志

1 調査に至る経過

下向遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（洋野～階上）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間を含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては平成24年9月5日付け国東整陸二調第30号により三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年10月24日から10月25日にわたり試掘調査を行い、平成24年10月26日付け教生第1326号により、工事に先立つて発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地

下向遺跡はJR八戸線陸中中野駅から北西約2kmに位置し、海岸からも約2km離れている。遺跡の立地する台地は標高136m～138mと高位にあり、北東方向に穏やかに傾斜している。また、北側は有家川、南側を有家川の支流である本木川が流れ、深く浸食され急崖となっている。

3 基本層序

基本層序は試掘調査の結果も踏まえて第Ⅰ層から第Ⅴ層に分層している。遺構は第Ⅲ層内で確認されているが、擾乱等も見られ不明瞭な遺構もみられる。基本層序の特徴は調査区の北側と南側では様相が幾分相違していることである。特に第Ⅲ層は標高の高くなる南側では薄く北側が厚く堆積している。

第Ⅰ層	10YR3/2	黒褐色	シルト	しまりなし	粘性なし
表土（森林腐植土）					
第Ⅱ層	10YR3/3	暗褐色	シルト	しまりなし	粘性なし
草木根を多く含む					
第Ⅲ層	10YR2/2	黒褐色	シルト	しまりやや有り	粘性やや有り
黄褐色土の小ブロックを全体に含む					
第Ⅳ層	10YR4/4	褐色	シルト	しまりやや有り	粘性やや有り
漸移層で火山灰の粒子（1～5mm大）を全体に含む					
第Ⅴ層	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	しまり有り	粘性やや有り
地山（八戸火山灰）浮石を含む					

4 調査の概要

遺構の検出は重機で表土を除去した後、第Ⅱ層下位での遺構検出を行ったが第Ⅲ層の黒褐色土と遺構埋土の差異が不明瞭であることから、第Ⅲ層下位まで掘り下げている。一部では第Ⅳ層上面まで掘り下げて遺構の精査を実施している。

（1）遺構

調査区内で検出された遺構は、陥し穴状遺構6基と土坑1基である（第2図）。各遺構の検出は表土を除去し、徐々に掘り下げ基本層序第Ⅲ層下位での検出である。また、調査区の北西端で弥生時代の土器片が出土し、土器集中箇所としたが堅穴住居跡等は確認できなかった。

S K T O 1 陥し穴状遺構（第3図、写真図版2）

調査区南側のはば中央部に位置し、重複はなく単独で検出した。平面形態は溝状を呈し、開口部は長軸3.30m×短軸0.75m、深さは検出面から90～115cmである。埋土は6層に分かれ、底面には黒褐色土が10cm～20cmほど堆積している。底面はほぼ平坦で幅は0.20～0.25mを測るが、両端は0.30m前後と広くなっている。壁は垂直気味に立ち上がり、中位から上位は外傾している。遺構内から遺物は出土していない。

S K T O 2 陥し穴状遺構（第4図、写真図版2）

調査区南側のはば中央部に位置し、重複はなく単独で検出した。平面形態は溝状を呈し、開口部は長軸3.35m×短軸0.52m、深さは検出面から92～98cmである。埋土は6層に分かれ、中位から底面まで暗褐色土が堆積している。底面はほぼ平坦で幅は0.05～0.15mを測る。壁は垂直に立ち上がり、中位から上位は外傾している。遺構内から遺物は出土していない。

S K T O 3 陥し穴状遺構（第4図、写真図版2）

調査区の東縁中央側に位置し、重複はなく単独で検出した。遺構は調査区外に大半が延びている。平面形態は溝状を呈し、開口部は検出部分で長軸2.25m×短軸0.95m、深さはⅡ層下位から150cm前後を測る。埋土は7層に分かれ、底面には黒褐色土が約10cm堆積している。底面は中央部にむかって傾斜して深くなり、端部の幅は狭いが中央部にむかって広くなり0.15mを測る。壁は底面からほぼ垂直に



第2図 下向遺跡遺構配置図

120cmほど立ち上がり、上位は幾分外傾している。遺構内から遺物は出土していない。

SKT04 陥し穴状遺構（第5図、写真図版2）

調査区の南側東寄りに位置し、重複はなく単独で検出した。平面形態は溝状を呈し、開口部は長軸2.65m×短軸0.71m、深さは検出面から120~125cmである。埋土は7層に分かれ、底面には黒褐色土が15cm前後堆積している。底面はほぼ平坦だが北東方向に傾斜し、幅は0.10m前後と狭いが両端はやや広くなっている。壁は幾分外傾しながら立ち上がり、中位から上位は広くなっている。遺構内から遺物は出土していない。

SKT05 陥し穴状遺構（第5図、写真図版2）

調査区の中央東端に位置し、重複はなく単独で検出した。遺構の一部は調査区外に延びている。平面形態は溝状を呈し、開口部は検出部分で長軸2.85m×短軸0.40m、深さは第Ⅲ層下位から約110cmを測る。埋土は7層に分かれ、底面には黒褐色土と暗褐色土が15cm前後堆積している。底面は調査区外方向に傾斜して深くなり、幅は5~10cmと狭い。壁は外傾気味に立ち上がり、そのまま上位まで外傾している。遺構内から遺物は出土していない。

SKT06 陥し穴状遺構（第6図、写真図版2）

調査区の中央東端に位置し、重複はなく単独で検出した。調査区の東縁側で検出され、遺構の大半は調査区外に延びている。平面形態は溝状を呈し、開口部は検出部分で長軸1.95m×短軸0.47m、深さは第Ⅲ層下位から110cm前後を測る。埋土は5層に分かれ、底面には黒褐色土が約10cm堆積している。底面は中央部にむかいで高くなり、浅くなっている。幅は0.10~0.15mを測り、端部でやや広くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが上半部は崩落が著しく広くなっている。遺構内から遺物は出土していない。

S K 0 7 土坑（第6図、写真図版2）

調査区の北端中央に位置し、重複はなく単独で検出した。平面形態は不整円形を呈し、検出面での規模は東西3.55m×南北3.50m、深さは85~95cmを測る。埋土は10層に分かれ、堆積状況からは人為堆積と判断される。底面の凹凸は少なく中央部が窪み、低くなっている。西壁側は傾斜した底面から緩やかに立ち上がり、東壁側は幾分屈曲して立ち上がる。遺構内からは陥し穴状遺構と同様に遺物は出土していない。

遺物集中箇所

I A 4iグリッドに位置し、調査区の北西端のトレンチ調査で検出された土器の集中箇所である。第Ⅱ層上位から土器片が出土し始めたことから、第Ⅲ層上位まで掘り下げている。しかし、箇の根が深く明確な層序は捉えられなかった。出土した土器片は小破片ながら30数片出土したが、堅穴住居跡等の存在は考えにくく、遺物集中箇所一括として取り上げている。

(2) 出土遺物（第7図）

今回の調査で出土した遺物は礫及び石器3点と土器片30点数点であり、石器2点と土器片17点を図示した。1は磨石で幾分扁平ながら全体に擦痕がみられる。2は磨石で角錐状を呈し、平坦な擦痕が4面みられる。3は口縁部片。単節LR。4は胴部片。単節RL。5は口縁部片。端部は指頭による連続する押捺。単節LR。6は脚部の接合部分。接合部は粘土帯が貼り付けられている。7は胴部片で外面に煤付が付着している。単節LR。8は胴部片。単節LR。9は胴部片。単節LR。10は胴部片。単節LR。11は胴部片。単節LR。12は底部片。底部の周縁部は高くなる。13は頸部片。2条と3条の二段平行沈線。単節LR。14は頸部片。2条の平行沈線。二段。単節LR。15は頸部片。2条の平行沈線。地紋不明。16は頸部片。2条の平行沈線。単節LR。17は頸部片。3条の平行沈線。単節RL。18は頸部片で5条の平行沈線と1条の鋸歯文。地紋不明。19は胴部片。2条の平行沈線と1条の鋸歯文。

以上の遺物は遺構に伴うものではないが、2の磨石は遺構検出の抜張時に出土したもので、陥し穴状遺構に近接しているが時期については不明。1は土器集中箇所に近接していることから弥生時代中期から後期の可能性が考えられる。土器については、僅かながら縄文時代中期に属するものもみられるが、弥生時代中期から後期のものが多く出土している。

5まとめ

6基の陥し穴状遺構は北東方向に緩やかに向かう傾斜面で検出され、各遺構の分布からみるとその配列は散在的であり、当然ながら調査区外に広がる状況である。出土遺物がないことから時期を決めるには躊躇するが、形態などの特徴から縄文時代後期に属するものが大半であろうか。

これら陥し穴状遺構の町内での検出例は増加しており、やや離れるが約12km北に所在する平内Ⅱ遺跡が挙げられる。平内Ⅱ遺跡は2度の発掘調査が行われ、56基の溝状の陥し穴状遺構が発見されている。遺構の時期は縄文時代後期を中心として捉えられているが、縄文時代中期末の土器片が出土した溝状の陥し穴状遺構も数基確認されており、時間的な継続性と時期的な変遷も指摘されている。

土器集中箇所として取り上げた土器類は、弥生時代中期から後期に属するもので、調査区外に同時期の堅穴住居跡を含めた遺構の存在を窺わせる。

なお、下向遺跡平成26年度に關わる報告はこれをもって全てとする。

第1表 出土石器一覧

No	出土地点・層位	器種	最大計測値 (mm)			重量 (g)	石質(山地)	残存状況
			長さ	巾	厚さ			
1	I A4g・II層～III層	磨石	80	69	48	384.06	花崗閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀 完存
2	SK05試張区	磨石	65	50	40	135.90	花崗閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀 一部欠損

第2表 出土土器一覧

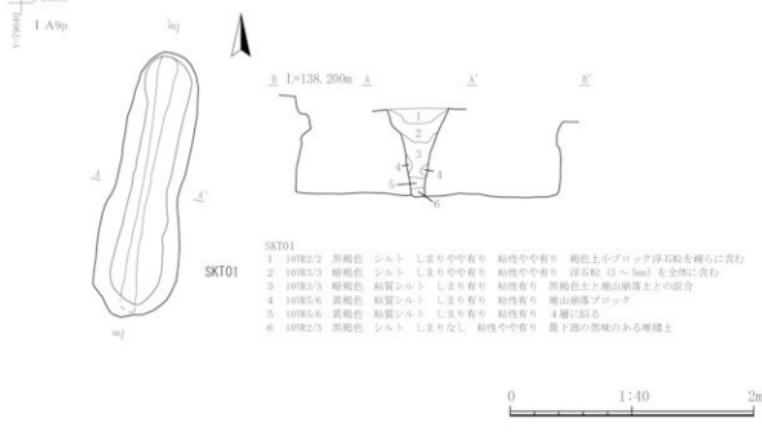
No	出土地点	層位	器種	部位	文様・装飾(口縁部・胴部・底部)	時期
3	I A4i	II～III層	浅鉢	口縁部片	LR。横	縄文中期～後期
4	西側トレンチ	II～III層	深鉢	胴部片	RL。縱	縄文中期～後期
5	I A4i	II～III層	鉢	口縁部片	LR。横+斜め。指頭による押捺。外面に煤付着	縄文晩期
6	東壁1トレンチ南側	表土～20cm	鉢	脚部片	脚接合部は粘土帶が貼り付けられる。	縄文晩期～弥生
7	I A5h	II～III層	鉢	脚部片	LR。横+斜め。外面に煤付着	弥生中期～後期
8	西側トレンチ	II～III層	鉢	脚部片	LR。縱+斜め。	弥生中期～後期
9	I A4i	II～III層	鉢	脚部片	LR。横	弥生中期～後期
10	I A4i	II～III層	鉢	脚部片	LR。縱	弥生中期～後期
11	I A5i	II～III層	鉢	脚部片	LR。斜め。外面に煤付着	弥生中期～後期
12	I A4i	II～III層	鉢	底部片	底部外縁の周縁は台状	縄文晩期～弥生
13	I A5h	II～III層	鉢	頭部片	LR施文後、平行沈線。外面に煤付着	弥生中期～後期
14	I A4i	II～III層	鉢	頭部片	LR施文後、平行沈線。外面に煤付着	弥生中期～後期
15	I A4iトレンチ	II～III層	鉢	頭部片	平行沈線のみ	弥生中期～後期
16	I A4i	II～III層	鉢	頭部片	LR施文後、平行沈線。外面に煤付着	弥生中期～後期
17	I A4i	II～III層	鉢	頭部片	LR施文後、平行沈線。外面に煤付着	弥生中期～後期
18	I A4i	II～III層	鉢	頭部片	LR施文後、平行沈線+銅銘文	弥生中期～後期
19	I A4i	II～III層	鉢	頭部片	平行沈線+銅銘文	弥生中期～後期

<引用・参考文献>

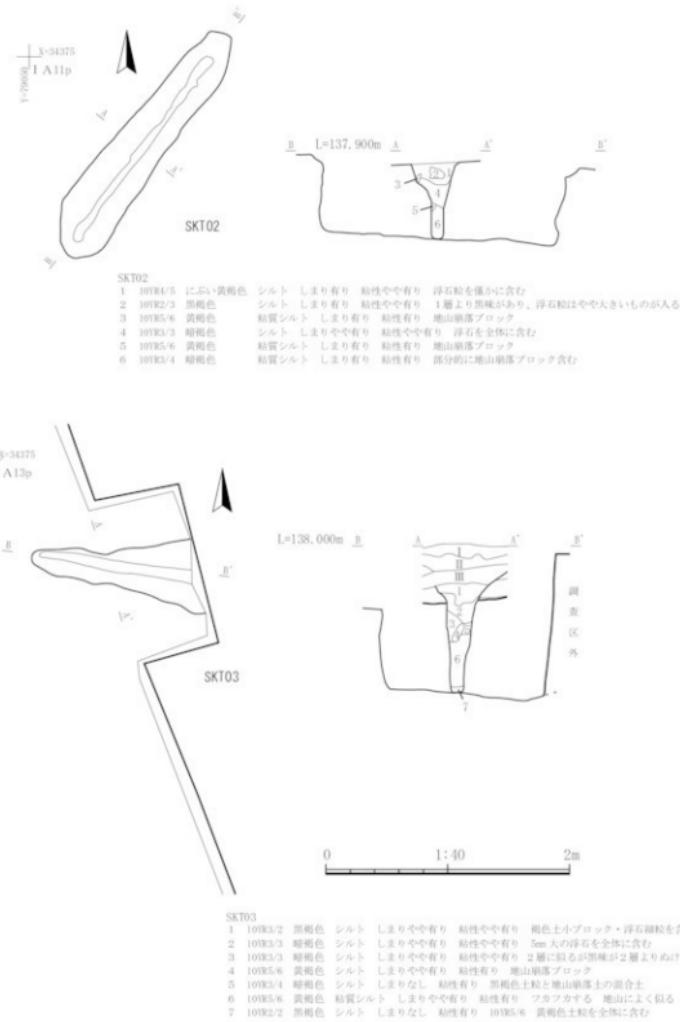
(財) 岩手県文化振興事業団 1996 「ゴゾー遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第238集

岩手県様式町教育委員会 2004 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 様式町埋蔵文化財調査報告書第1集

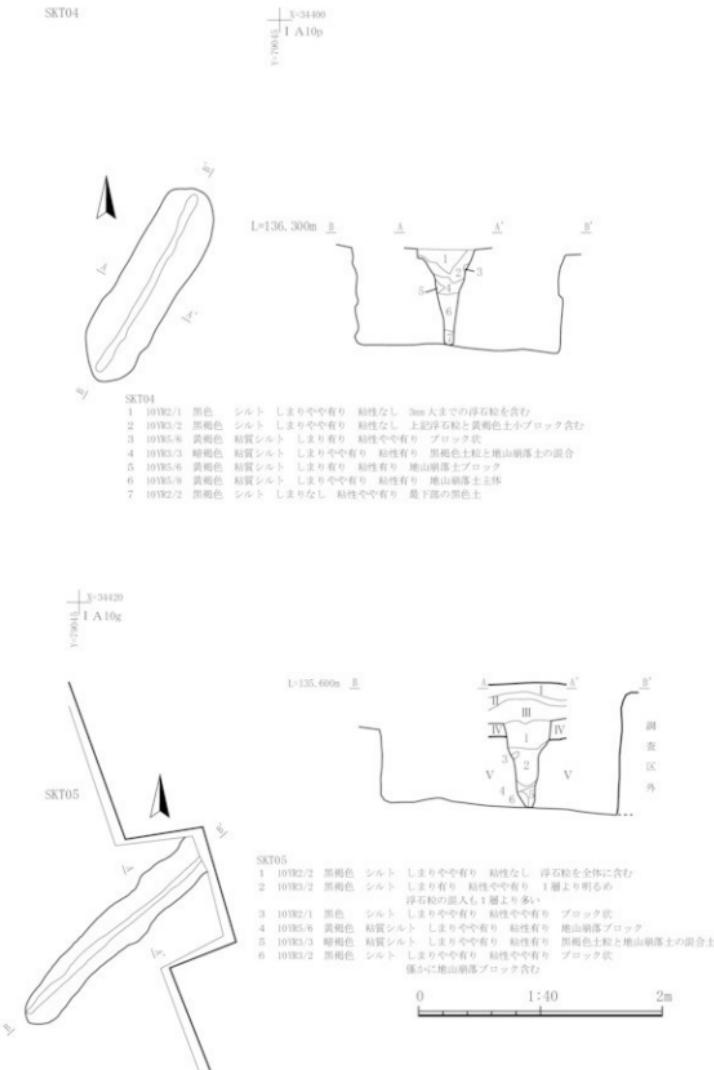
岩手県洋野町教育委員会 2013 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集



第3図 SKT01 陥穴状遺構

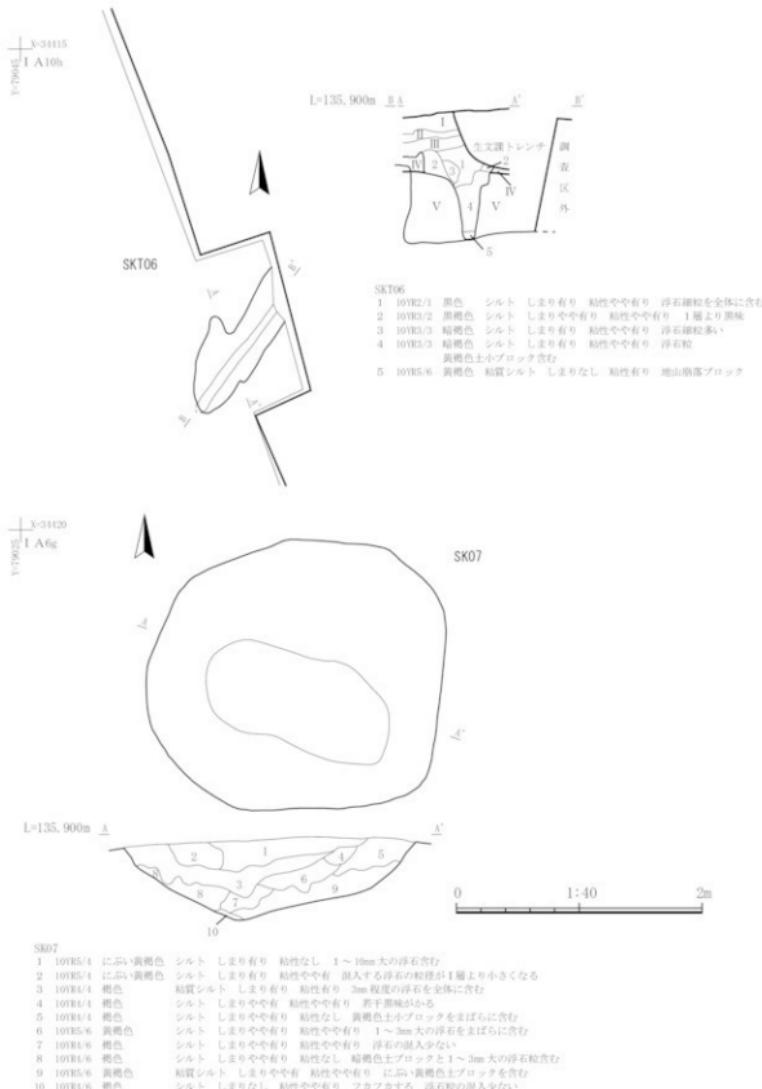


第4図 SKT02・03陥穴状遺構

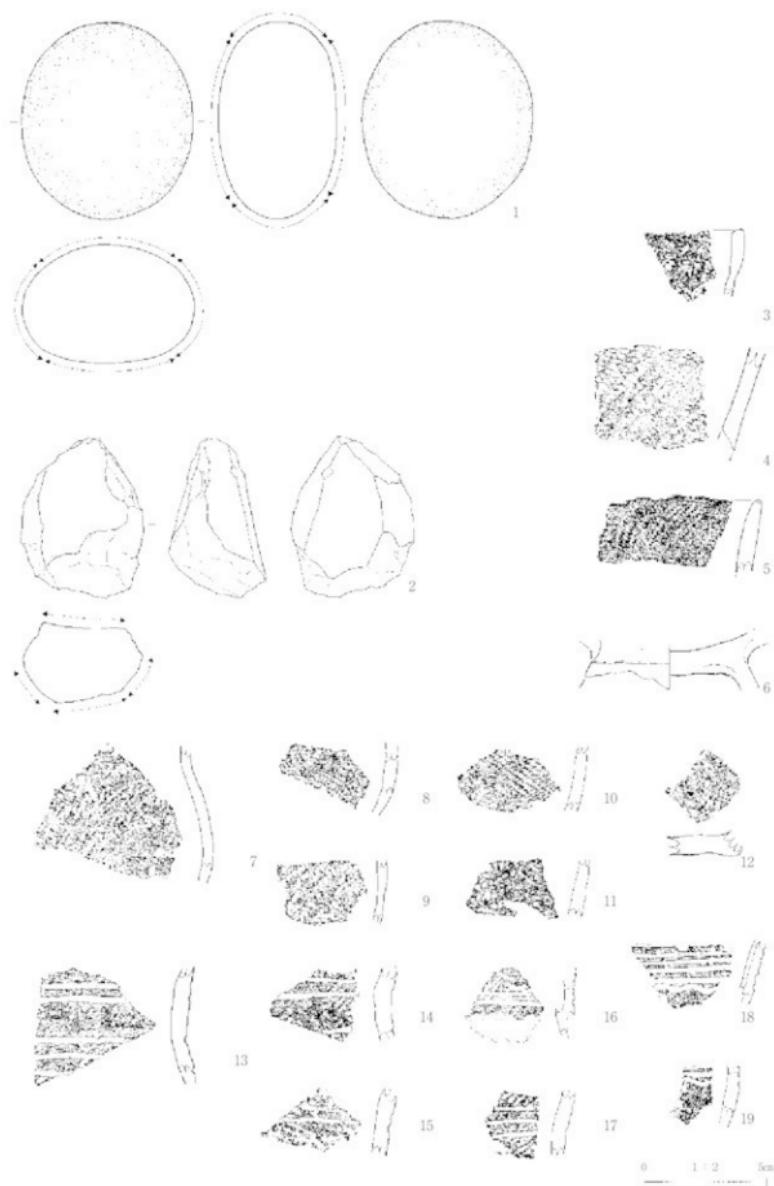


第5図 SKT04・05陥穴状遺構

(2) 下向遺跡



第6図 SKT06陥し穴状構造、SK07土坑



第7図 出土遺物実測図

(2) 下向遺跡



下向遺跡近景（北から）



下向遺跡近景（西から）



SKT01 埋し穴状遺構完掘（北から）



SKT01 埋し穴状遺構土層断面（南から）



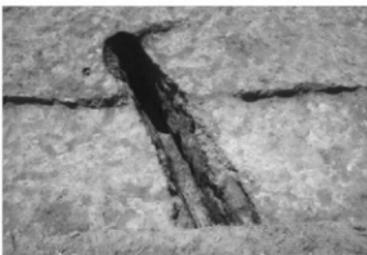
SKT02 埋し穴状遺構完掘（北東から）



SKT03 埋し穴状遺構完掘（東から）



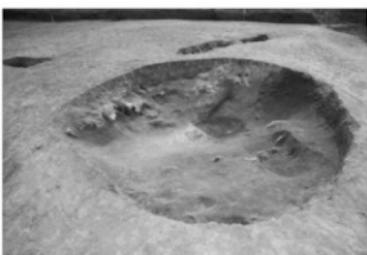
SKT04 埋し穴状遺構完掘（北から）



SKT05 埋し穴状遺構完掘（東から）

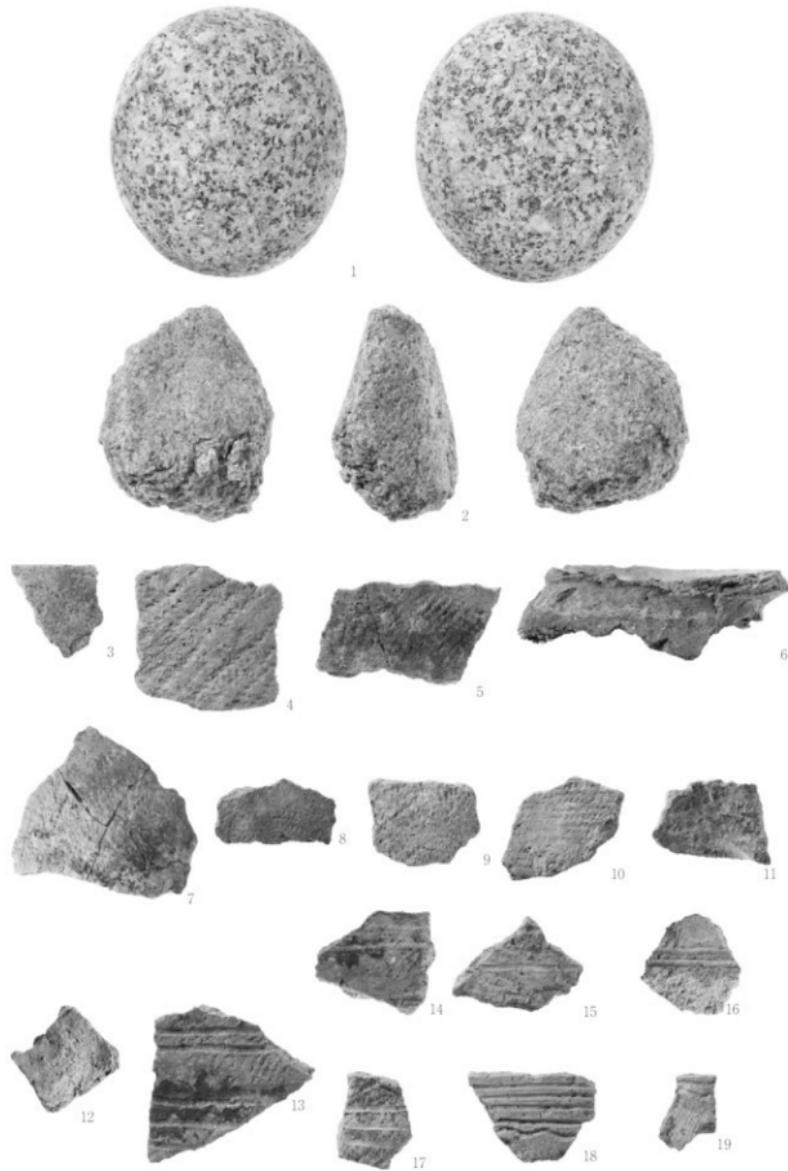


SKT06 埋し穴状遺構完掘（東から）



SK07 土坑完掘（北から）

写真図版2 SKT01～06 埋し穴状遺構、SK07 土坑



写真図版3 出土遺物

(3) 沼袋II遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村尾肝要 46-1ほか
 委 託 者 國土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成26年7月7日～9月5日

遺跡コード・略号 K G 11-2263・N B II-14
 調査対象面積 3,695m²
 調査終了面積 3,695m²
 調査担当者 藤本玲子・小林弘卓・宇部めぐみ

1 調査に至る経過

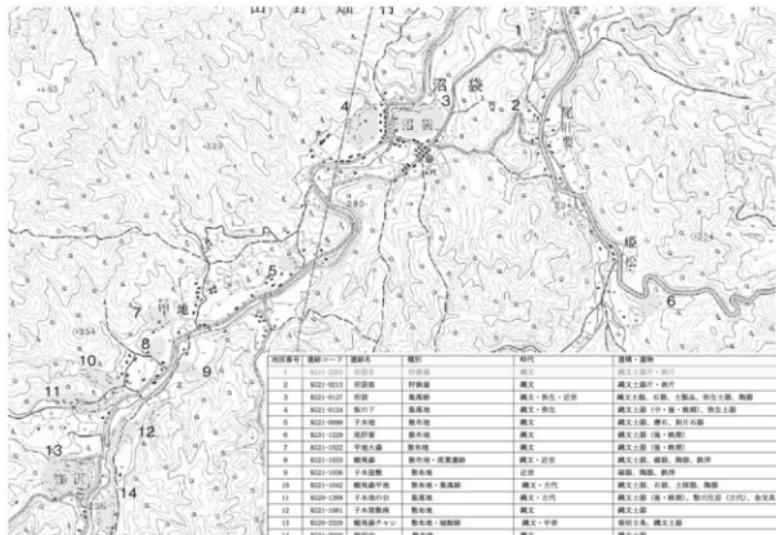
沼袋II遺跡は、一般国道45号三陸沿岸事業(尾肝要～普代)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月2日付け国東整陸二調第703号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年12月4日～12月6日にわたり試掘調査を行い、平成25年1月30日付け教生第1543号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財團法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



1:25,000 沼袋

第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地

沼袋II遺跡の所在する田野畠村は岩手県沿岸北部に位置し、北は普代村、南西に岩泉町、東は太平洋に接する。東西約17km、南北約14km、人口約3534人(2014年11月1日現在)、面積156.19km²である。西部、中央部は北上山系のなだらかな起伏が広がり、東部は名勝北山崎、鶴の巣断崖にみられるように200m前後の隆起海岸が太平洋に延びる谷を深く刻んでいる。平地は約16%でほとんどが山林である。遺跡は高位段丘面に位置し、海岸との距離は約10km、標高は約230~240mである。遺跡は国土交通省田野畠防災除雪センターから北西約300mの距離に所在し、微視的には調査区北側に位置する2級河川普代川の蛇行・洪水などを成因とする河岸段丘上に立地する。西側に支流であるツジベシ沢、大平沢、田代沢が、東側に尾肝要川、マギノ沢が流れる。比高5~10mの低位面を中心とした範囲で、調査区中央には現在も上流から沢が流れ、豊富な湧水もみられる。立地から調査区東側は沼地が広がっていた。

1889(明治22)年4月1日に村政が施行され、旧田野畠村、浜岩泉村、沼袋村が合併し、北閉伊郡田野畠村が成立した。その後、1896(明治29)年3月29日に北閉伊郡、中閉伊郡、東閉伊郡が合併し、下閉伊郡となり、田野畠村は下閉伊郡となった。三陸沿岸は869(貞觀11)年7月9日に三陸沖で発生した貞觀地震によって大きな被害を出し、1611(慶長16)年12月2日には同じく三陸沖で慶長三陸地震が発生し大きな被害を出した。1896(明治29)年6月15日には三陸沖で明治三陸地震が発生し、これに伴って起きた明治三陸大津波に襲われ、三陸沿岸一帯は甚大な被害をうけた。海拔約25m、海岸から約360mには2トンの堆積岩が2個存在しており、明治三陸大津波によって運ばれてきたと言い伝えられ「津波石」と呼ばれている。国土地理院によって海拔約25mまで海水が駆け上がってきることが確認されている。2011(平成23)年3月11日にはマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)が発生し、津波による大きな被害を出した。

遺跡の所在する沼袋地区には、集落遺跡と確認された沼袋遺跡(図1-3)、坂の下遺跡(図1-4)が現在の沼袋集落とほぼ同位置に存在する。両遺跡とも沼袋II遺跡南西標高約230~240mに位置し、本遺跡と同じ標高に立地する。

〈参考文献〉

- 田野畠村史編さん委員会 1985 「田野畠村史1」
田野畠村教育委員会 2001 「田野畠村内遺跡詳細分布調査報告書1」 田野畠村文化財調査報告書第6集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006 「沼袋遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第483集

3 基本層序

調査区内における基本層序は第4図の通りである。

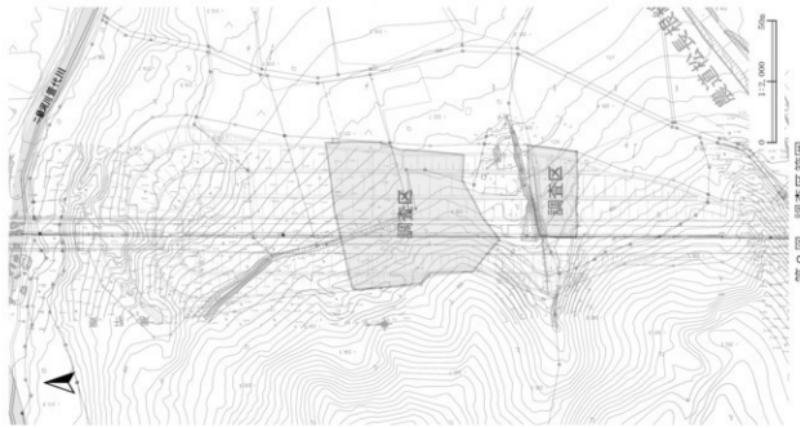
4 調査の概要

(1) 遺構

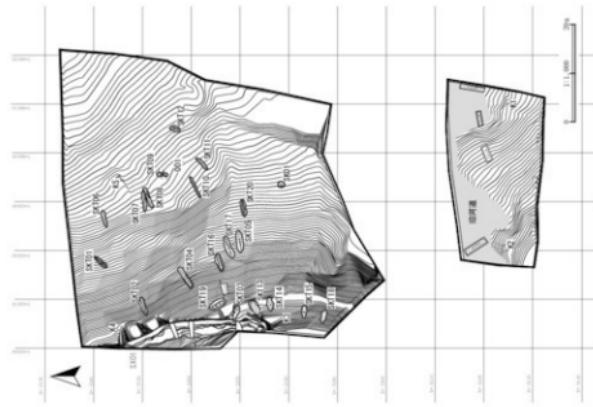
沼袋II遺跡は尾肝要岬北麓に位置し、今回の調査で東向き緩斜面中腹部と裾部付近に縄文時代の陥し穴状遺構21基、旧河道1条、雨裂跡1条を確認した。陥し穴状遺構は、溝状18基、楕円形2基、円形1基で、なかには逆茂木痕を有するものがある。調査区西側中央部付近から谷川が形成されており、検出された旧河道から調査区東側に広がる沼地に集まる動物を狙ったものと想定される。遺構については第1表に記載した。

(2) 遺物

調査区遺構外北東端から縄文土器片が2点(1・2)出土した(写真図版8)。他に不掲載とした剥片2点が出土している。



第2図 調査区範囲



第3図 造構配置図

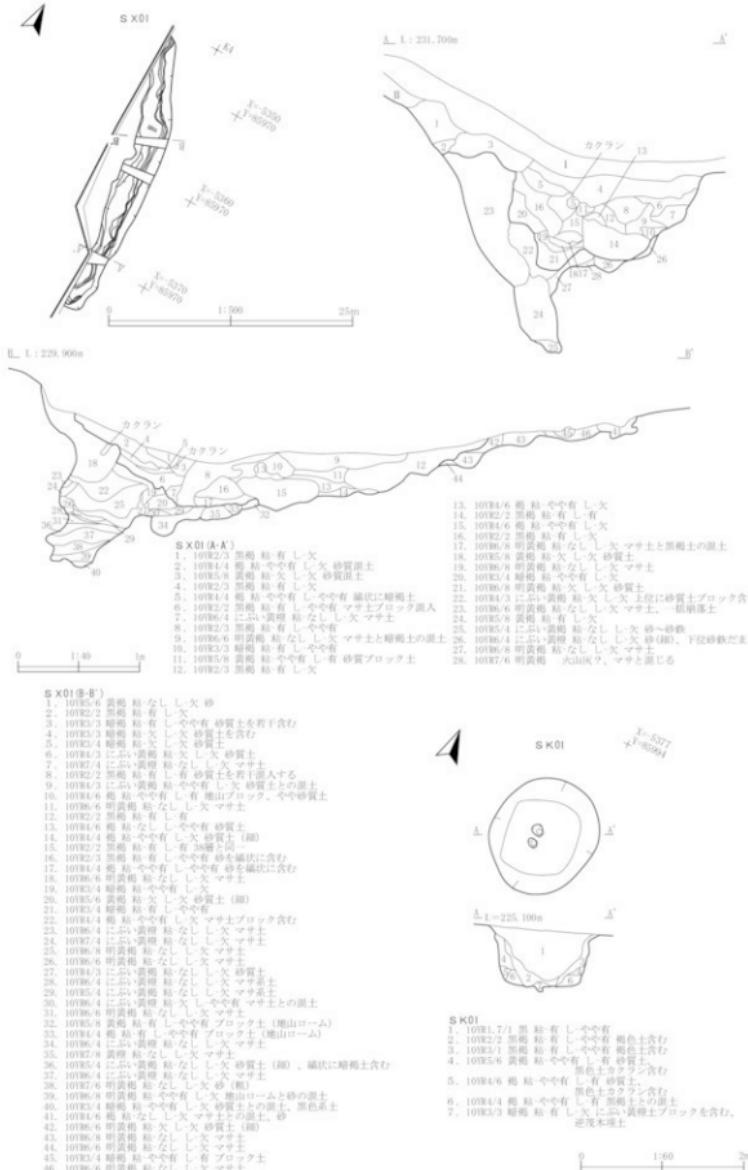


基本配置
A. 109E2/3 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
B. 109E3/3 に高い地塊 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-7),
C. 109E3/4 に高い地塊 有質シルト 級1 1/2 地質49% (109E-8),
D. 109E4/4 に高い地塊 有質シルト 級1 1/2 地質49% (109E-8),
E. 109E6/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
F. 109E7/4 に高い地塊 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
G. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
H. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
I. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
J. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
K. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
L. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
M. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
N. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
O. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
P. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
Q. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
R. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
S. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
T. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
U. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
V. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
W. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6),
X. 109E8/6 明鏡 有質シルト 級1 1/2 地質0% (109E-6)

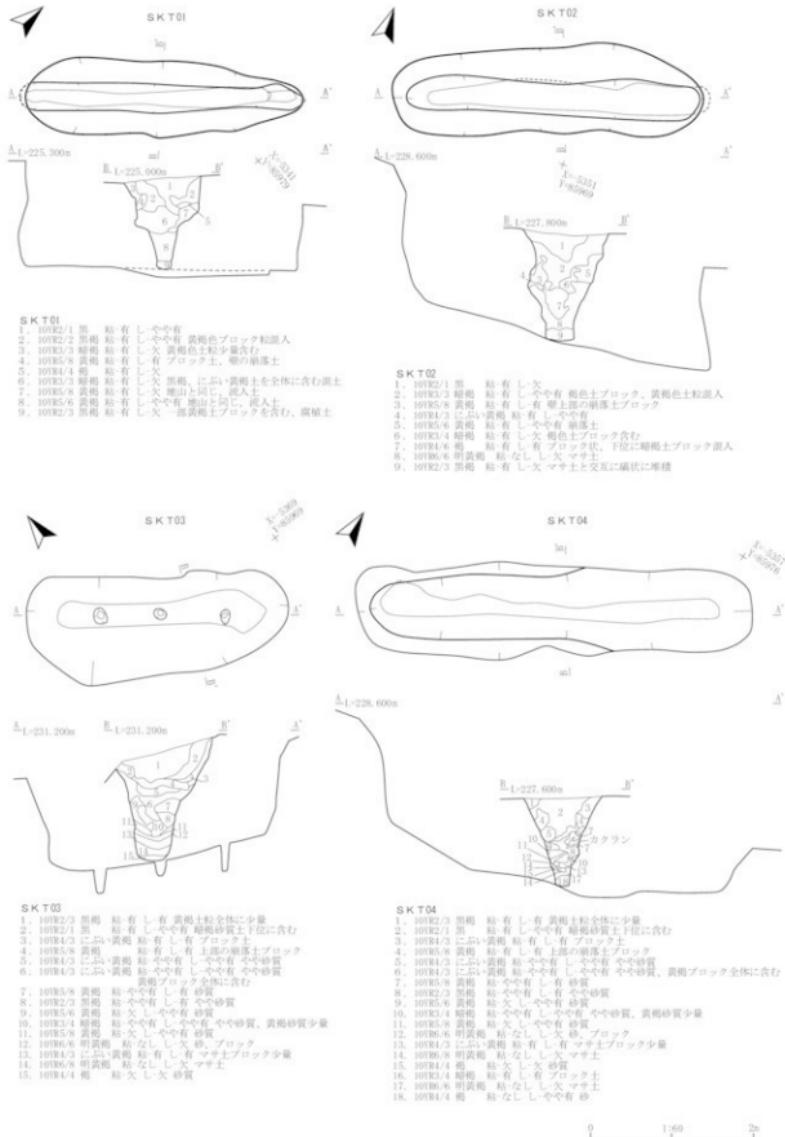
*凡例
級1 ~5%弱 = 2
級1 ~3%弱 = 3
級1 ~2%弱 = 4
級1 ~1%弱 = 5
級1 ~0%弱 = 6
級1 ~0%弱 = 7
級1 ~0%弱 = 8
級1 ~0%弱 = 9
級1 ~0%弱 = 10

第4図 基本配置

(3) 沼袋Ⅱ遺跡

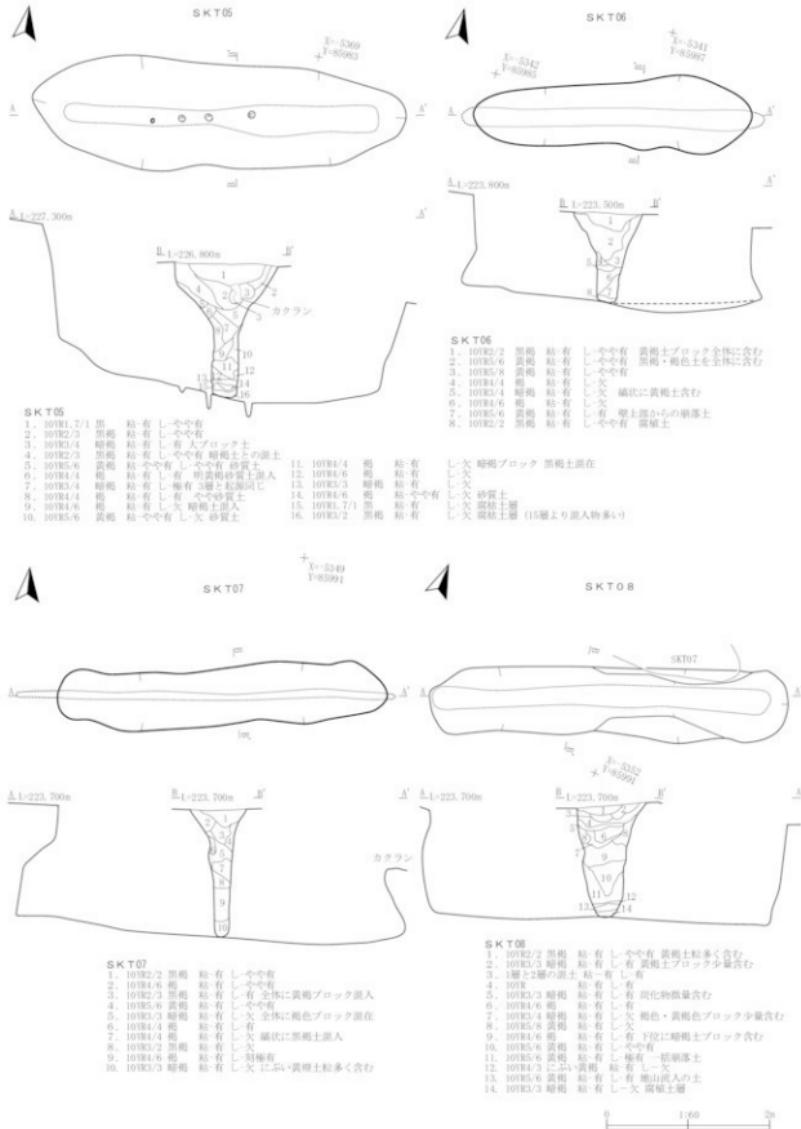


第5図 SX01 雨裂跡、SK01 陥し穴状遺構

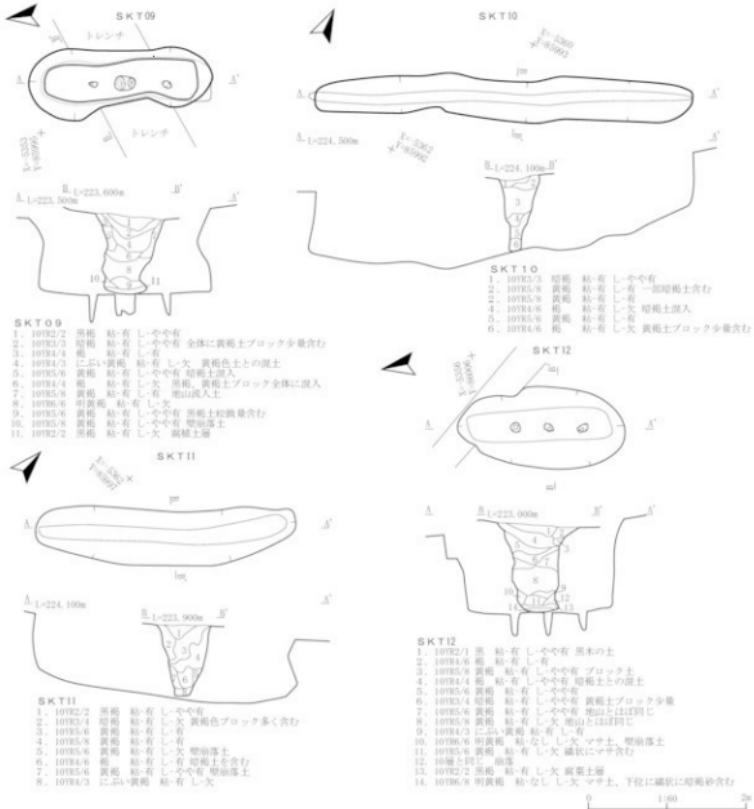


第6図 SKT01 ~ 04 掘し穴状遺構

(3) 沼袋Ⅱ遺跡



第7図 SKT05～08 陥し穴状遺構

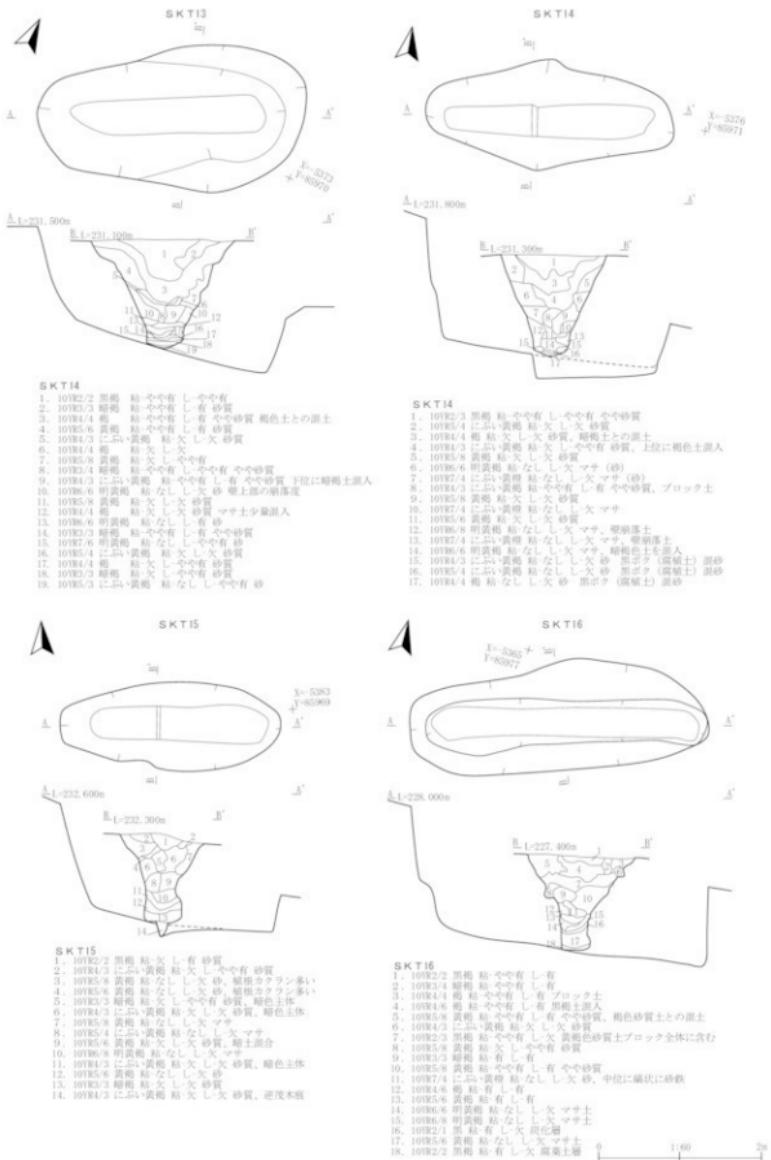


第8図 SKT 09~12陥入穴状構造

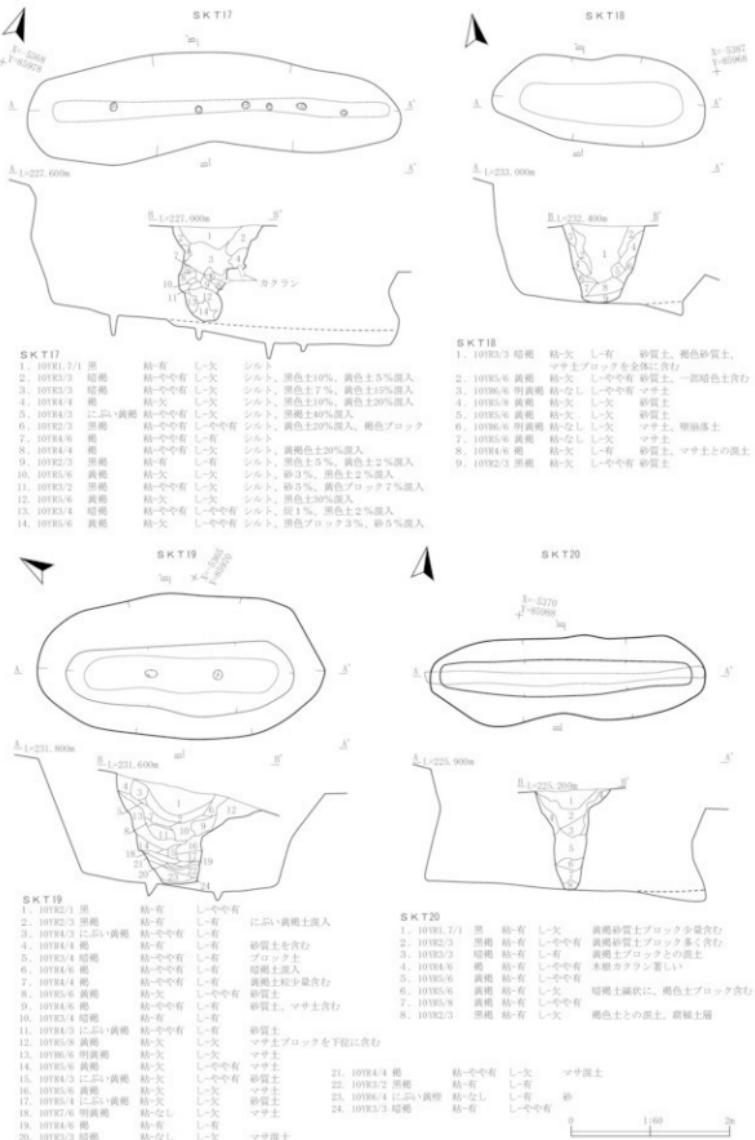
第1表 造構観察表

遺構名	位置	層位	断面	地質	平面図	平面(単位)	測定(単位)	測定(単位)	剖面図	備考
SKT 09	第 1 領	2	II'	-	S-30' - E	西門	140 × 130	70		
SKT 09	第 1 領	2	III	-	S-34' - E	溝状	140 × 95	130		
SKT 09	第 1 領	2	III	-	S-37' - E	溝状	160 × 105	150		
SKT 09	第 1 領	3	II'	-	S-38' - E	溝状	120 × 110	100	近傍木 2	
SKT 09	第 1 領	3	II'	-	S-39' - E	溝状	160 × 120	120	近傍木 2	
SKT 09	第 1 領	3	II'	-	S-40' - E	溝状	160 × 120	120	近傍木 2	
SKT 09	第 1 領	3	II'	-	S-41' - E	溝状	140 × 140	100	近傍木 2	
SKT 09	第 1 領	3	II'	-	S-42' - E	溝状	140 × 90	120	近傍木 2	
SKT 09	第 1 領	4	II'	10972/2~4 黒粘	S-43' - E	溝状	160 × 75	100	10972/2 黒粘(表面)木 1	
SKT 09	第 1 領	4	II'	10972/2~4 黒粘	S-44' - E	溝状	140 × 95	140		
SKT 09	第 1 領	5	II'	-	S-45' - E	溝状	160 × 95	110	近傍木 2	
SKT 09	第 1 領	5	II'	-	S-46' - E	溝状	160 × 110	130		
SKT 09	第 1 領	5	II'	-	S-47' - E	溝状	160 × 75	120		
SKT 09	第 1 領	5	II'	-	S-48' - E	溝状	160 × 115	100	近傍木 2	
SKT 09	第 1 領	5	II'	-	S-49' - E	溝状	160 × 180	180		
SKT 09	第 1 領	5	II'	-	S-50' - E	溝状	160 × 130	100		
SKT 09	第 1 領	6	II'	-	S-51' - E	溝状	170 × 130	100	近傍木 1	
SKT 09	第 1 領	6	II'	-	S-52' - E	溝状	160 × 130	100		
SKT 09	第 1 領	6	II'	-	S-53' - E	溝状	160 × 130	100		
SKT 09	第 1 領	7	II'	-	S-54' - E	溝状	160 × 180	150	近傍木 2	
SKT 09	第 1 領	7	II'	-	S-55' - E	溝状	160 × 140	100		

(3) 沼袋Ⅱ遺跡



第9図 SKT13～16 陥し穴状遺構



第10図 SKT17～20 鎮し穴状遺構

[分析鑑定報告 1]

沼袋II遺跡出土テフラの検出同定及び火山ガラスの屈折率測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県田野畠村に所在する沼袋II遺跡は、尾肝要岬北麓の普代川に面する緩斜面上に立地する。同遺跡からは、縄文時代の遺構・遺物が検出されている。今回の分析調査では、検出された遺構のうち旧河道より採取された火山灰質試料を対象として、テフラの検出同定および火山ガラスの屈折率測定を行い、既知の火山灰との対比することにより、それらの年代指標に関する資料を作成する。

1. 試料

試料は、沼袋II遺跡の旧河道より採取された火山灰質試料(試料名：旧河道 火山灰)である。層相は、褐～黒褐色の砂まじりシルトである。

2. 分析方法

(1) テフラ検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

(2) 火山ガラスの屈折率測定

屈折率の測定は、処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスを対象として、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

3. 結果

(1) テフラ検出同定

結果を表1に記す。試料中に白色を呈し、発泡がやや良好で、斜方輝石斑晶を含む軽石が少量、無色透明の軽石型火山ガラスが微量混在する。

(2) 火山ガラスの屈折率測定

火山ガラスの屈折率測定結果を図1に記す。屈折率はn1.512–1.514という狭いレンジであり、n1.513での集中度が高い。

4. 察考

今回分析調査対象とした試料からは、軽石および火山ガラスが検出された。沼袋II遺跡の地理的位置を考慮すれば、十和田カルデラからの噴出物である可能性が高い。

今回分析対象とした試料のように、比較的高い屈折率を示す火山ガラスは、町田・新井(2003)に示された十和田カルデラ起源完新世テフラのうち、十和田中振テフラ(To-Cu: 町田・新井2003; Hayakawa 1985)と十和田南部テフラ(To-Nb: 町田・新井2003; Hayakawa 1985)が該当する。

これらの噴出年代について To-Cuは曆年較正年代で約6,200年前(工藤・佐々木 2007)、To-Nbは約9,400年前(工藤・佐々木 2007)という年代値が得られている。のことから、分析対象試料が採

表1. テフラ分析結果

試料名	軽石			火山ガラス		備考
	量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	
旧河道 火山灰	++	W+sg/W+g(spa)	0.8	+	cl-pm	

凡例 一 舍まれない (×)きわめて微量 + 微量 ++ 少量 W白色
g良好 sgやや良好 最大粒径はmm cl無色透明 bwバブル型 pm軽石型 spa斜方輝石斑晶包有

された旧河道堆積層は、前述した年代のいずれか以降に形成された可能性がある。

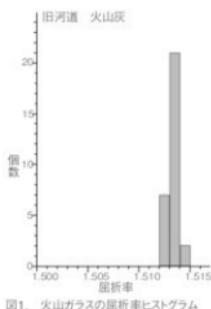
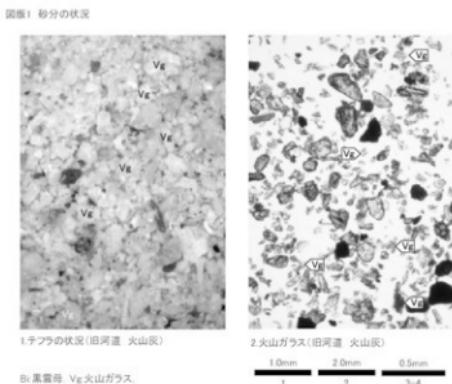


図1. 火山ガラスの屈折率ヒストグラム



引用文献

- 古澤 明1995 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.
Hayakawa,Y. 1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reseach Institute University of Tokyo,vol.60 507-592.
工藤 崇・佐々木 寿2007 十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年.地学雑誌,116,653-663.
町田 洋・新井房夫2003 新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
町田 洋・新井房夫・森脇広1981 日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.
町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 1984 テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－.渡辺直経編

[分析鑑定報告2]

沼袋II遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

沼袋II遺跡は、岩手県下閉伊郡田野畠村沼袋地内他に所在する。測定対象試料は、陥し穴状遺構と考えられる土坑から出土した炭化物2点である(表1)。

2 測定の意義

この遺跡は陥し穴状遺構を主体とする狩猟場と考えられ、時期を特定する根拠となる出土遺物が少ない。このため、年代測定により試料が出土した遺構の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
 (2) 酸-アルカリ-酸(AAA : Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、 0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、 1M 未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

(3) 沼袋Ⅱ遺跡

- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシェウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2)¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{14}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{14}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法 (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-I4I601	No.1	SKT07 埋土下層	炭化物	AAA	-26.09 ± 0.52	2,450 ± 30	73.67 ± 0.25
IAAA-I4I602	No.2	SKT16 最下層	炭化物	AAA	-13.39 ± 0.64	4,500 ± 30	57.14 ± 0.20

[#6890]

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。試料の¹⁴C年代は、No.1が2450±30yrBP、No.2が4500±30yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、No.1が2697~2434cal BP、No.2が5281~5054cal BPの間に各々4つの範囲で示され、No.1が縄文時代晚期後葉から末葉頃、No.2が縄文時代中期前葉頃に相当する(小林編2008)。試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ 未補正値、暦年較正 ${}^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 未補正値		暦年較正(${}^{14}\text{C}$ 年代)	1σ 暦年較正範囲	2σ 暦年較正範囲
	Age (yrBP)	$\pm 1\sigma$ (%)			
IAAA-141601	2,470 ± 30	73.51 ± 0.24	2,454 ± 27	2697calBP - 2634calBP (28.2%)	2703calBP - 2608calBP (29.0%)
				2616calBP - 2590calBP (10.9%)	2619calBP - 2556calBP (10.8%)
				2573calBP - 2526calBP (2.1%)	2610calBP - 2595calBP (16.9%)
IAAA-141602	4,310 ± 30	58.51 ± 0.19	4,495 ± 27	2586calBP - 2414calBP (27.5%)	2544calBP - 2363calBP (49.3%)
				525calBP - 5214calBP (30.0%)	5250calBP - 5066calBP (95.6%)
				5136calBP - 5105calBP (14.6%)	5078calBP - 5024calBP (10.9%)

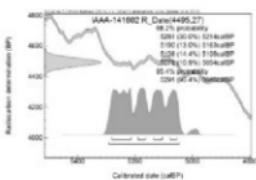
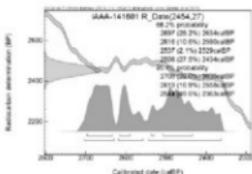
[参考値]

引用文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data. Radiocarbon 19(3), 355-363



[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

まとめ

今回の調査では、東向き緩斜面中腹部と裾部付近に縄文時代の陥し穴状遺構21基、旧河道1条、雨裂跡1条を確認した。陥し穴状遺構の内訳は、溝状18基、楕円形2基、円形1基で、逆茂木痕を有するものもある。調査区西側中央部付近から東西方向に谷川が形成されており、検出された旧河道から調査区東側に広がる沼地に集まる動物を狙った狩猟場であったことが明らかとなった。溝状陥し穴状遺構は、埋土にクロボク土が堆積する場合が多く、縄文時代中期以降に東北北部で主流になると指摘されている(坂本・杉野森1997)。そのため、今回の調査で確認された溝状の陥し穴状遺構も縄文時代中期以降のものである可能性が高い。沼袋Ⅱ遺跡の陥し穴状遺構を形成した主体者がいざれに住んでいたかは今回の調査では決定的な根拠は見つからなかったが、遺跡から南西へ3kmに位置する集落遺跡の沼袋遺跡(第1図-3)、坂の下遺跡(第1図-4)と同時期に包括されるものであることは確かである。

なお、沼袋Ⅱ遺跡平成26年度調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

参考文献

佐藤宏之 2007 「縄文時代の狩猟・漁撈技術」『縄文時代の考古学5 なりわい—食料生産の技術—』同成社

桜井秀雄 2000 「原村、南平遺跡にみられる陥し穴の年代」『信濃』第52巻 第10号

坂本真弓・杉野森涼子 1997 「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』第2号 青森県埋蔵文化財調査センター

田村壯一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要』VII (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

平野祐 2007 「東北地方南部における縄文時代陥し穴の形態と地域色」『紀要』XXVI (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(3) 沼袋Ⅱ道路



沼袋Ⅱ、沼袋Ⅲ遺跡遠景（南東から）



調査区近景（東から）

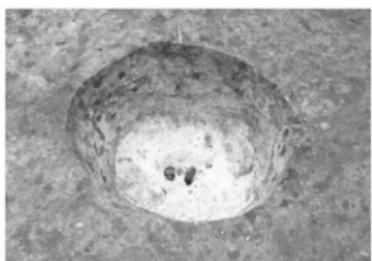
写真図版1 調査区全景



S X 01 雨裂跡断面 A-A' (北から)



S X 01 雨裂跡断面 B-B' (北から)



S K 01 詰し穴状遺構完掘 (東から)



S K 01 詰し穴状遺構断面 (北東から)



S K T 01 詰し穴状遺構完掘 (東から)



S K T 01 詰し穴状遺構断面 (南東から)



S K T 02 詰し穴状遺構完掘 (東から)



S K T 02 詰し穴状遺構断面 (東から)

写真図版2 S X 01 雨裂跡、S K 01、S K T 01・02 詰し穴状遺構

(3) 沼袋Ⅱ道路



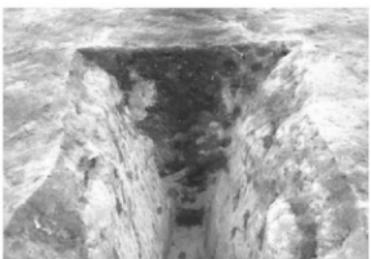
SKT 03 埋し穴状遺構完掘 (南東から)



SKT 03 埋し穴状遺構断面 (北西から)



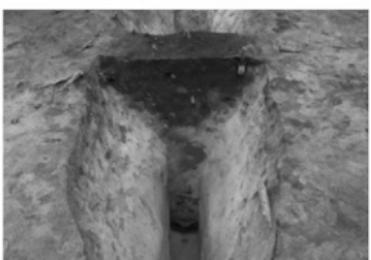
SKT 04 埋し穴状遺構完掘 (北東から)



SKT 04 埋し穴状遺構断面 (北東から)



SKT 05 埋し穴状遺構完掘 (東から)



SKT 05 埋し穴状遺構断面 (東から)



SKT 06 埋し穴状遺構完掘 (東から)



SKT 06 埋し穴状遺構断面 (東から)



SKT 07・08 埋め戻し穴状遺構完掘 (東から)



SKT 07 埋め戻し穴状遺構横断面 (西から)



SKT 08 埋め戻し穴状遺構横断面 (西から)



旧河道トレンチ断面 (北西から)



SKT 09 埋め戻し穴状遺構完掘 (南から)



SKT 09 埋め戻し穴状遺構横断面 (南から)



SKT 10 埋め戻し穴状遺構完掘 (東から)



SKT 10 埋め戻し穴状遺構横断面 (西から)

写真図版4 SKT 07～10 埋め戻し穴状遺構

(3) 沼袋II道路



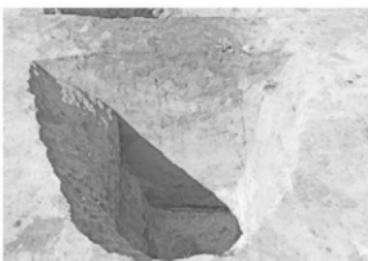
SKT 11 埋し穴状遺構完掘 (北東から)



SKT 11 埋し穴状遺構断面 (南西から)



SKT 11 埋し穴状遺構完掘 (南西から)



SKT 12 埋し穴状遺構断面 (南から)



SKT 13 埋し穴状遺構完掘 (東から)



SKT 13 埋し穴状遺構断面 (東から)



SKT 14 埋し穴状遺構完掘 (東から)



SKT 14 埋し穴状遺構断面 (東から)

写真図版5 SKT 11～14 埋し穴状遺構



SKT 15 埋し穴状遺構完掘 (東から)



SKT 15 埋し穴状遺構横断面 (東から)



SKT 16 埋し穴状遺構完掘 (東から)



SKT 16 埋し穴状遺構横断面 (東から)



SKT 17 埋し穴状遺構完掘 (東から)



SKT 17 埋し穴状遺構横断面 (東から)

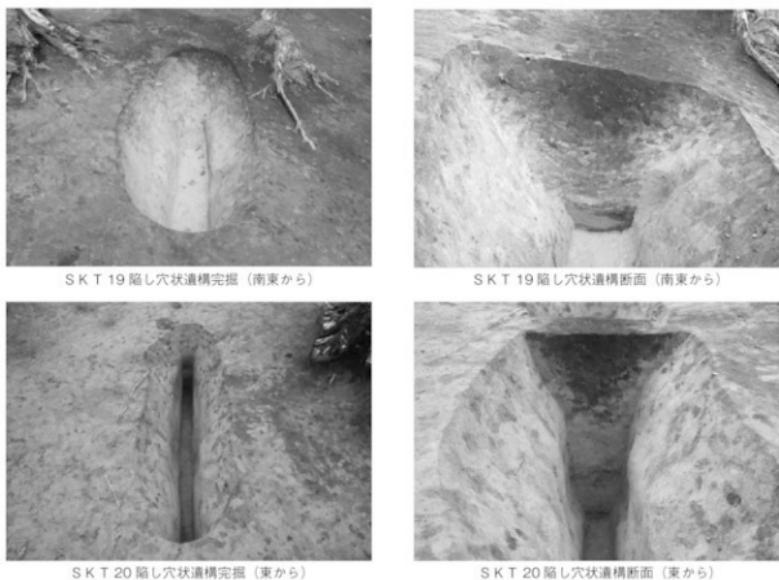


SKT 18 埋し穴状遺構完掘 (東から)

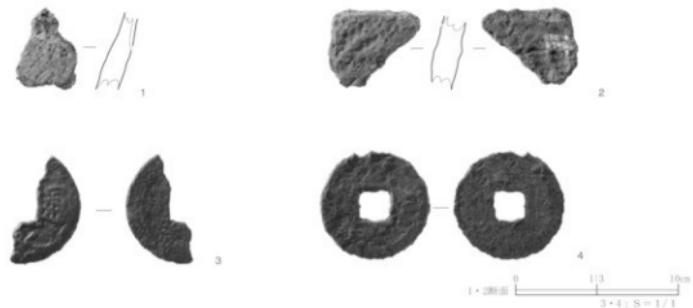


SKT 18 埋し穴状遺構横断面 (東から)

写真図版 6 SKT 15～18 埋し穴状遺構



写真図版7 SKT19・20 陥し穴状遺構



写真図版8 出土遺物

第4表 遺物観察表

遺物番号	出土地点	層位	器種	残存部位	口径	底径	器高	文様(外面)	内面	時期	備考
1	SK01	埋土上位	深鉢	側部	-	-	-	LR・RLR 縞	-	縄文時代後期?	
2	斜面中央	IV層	深鉢	側部	-	-	-	LR 縞	LR 縞	縄文時代後期?	
3	調査区東側	擾乱	古銭	-	-	-	-	寛永通宝		江戸時代以降	銅製
4	不明	擾乱	古銭	-	-	-	-	寛永通宝		江戸時代以降	銅製

(4) 沼袋Ⅲ遺跡
ぬまぶくろ
沼袋Ⅲ遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村尾肝要 73 ほか 遺跡コード・略号 K G 21-0213・N B III-14
 委 託 者 國土交通省東北地方整備局三陸国道事務所 調査対象面積 950m²
 事 業 名 三陸沿岸道路 調査終了面積 950m²
 発掘調査期間 平成 26 年 7 月 7 日～9 月 5 日 調査担当者 藤本玲子・小林弘卓・宇部めぐみ

1 調査に至る経過

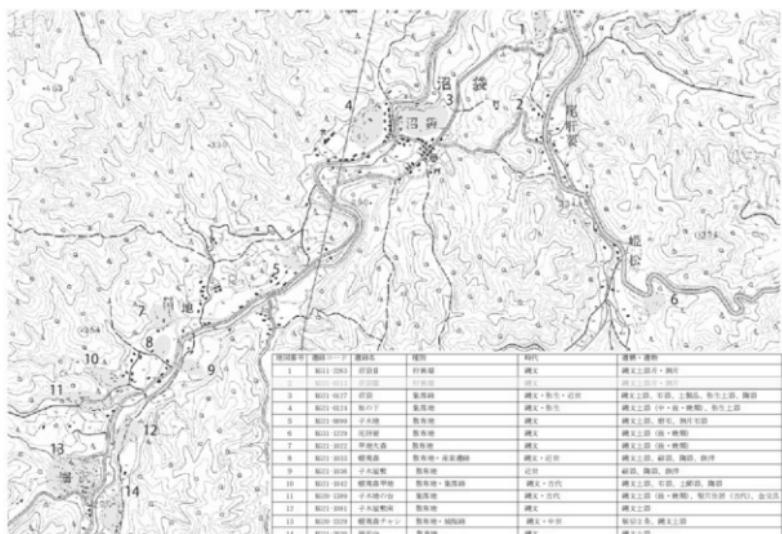
沼袋Ⅲ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業(尾肝要～普代)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月2日付け国東整備二課第703号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年12月4日～12月6日にわたり試掘調査を行い、平成25年1月30日付け教生第1543号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

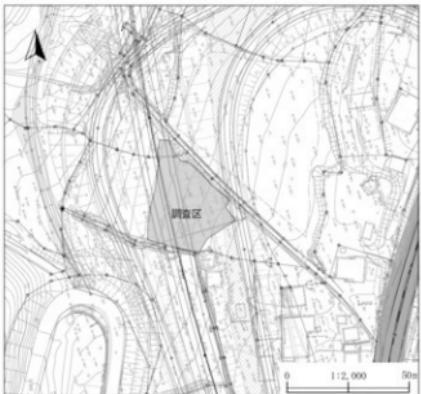
その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財團法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。」

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

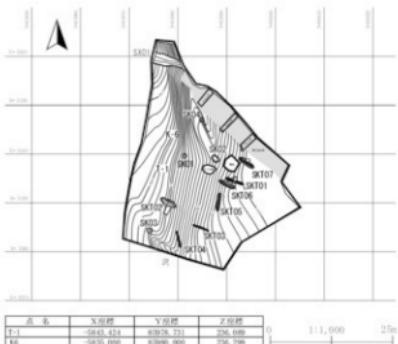


第1図 遺跡位置図

(4) 沼袋Ⅲ遺跡



第2図 調査区位置図



第3図 遺構配置図

2 遺跡の立地と環境

沼袋Ⅲ遺跡の所在する田野畠村は岩手県沿岸北部三陸海岸に位置する。以下、沼袋Ⅱ遺跡参照(p.p.48)。

3 基本層序

調査区内における基本層序は第4図の通りである。

4 調査の概要

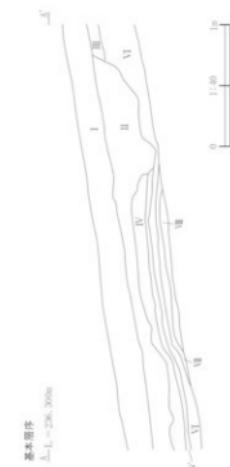
(1) 遺構

縄文時代の陥し穴状遺構7基、雨裂跡1条、時期不明土坑4基を確認した。詳細は第1表遺構観察表に記載した。

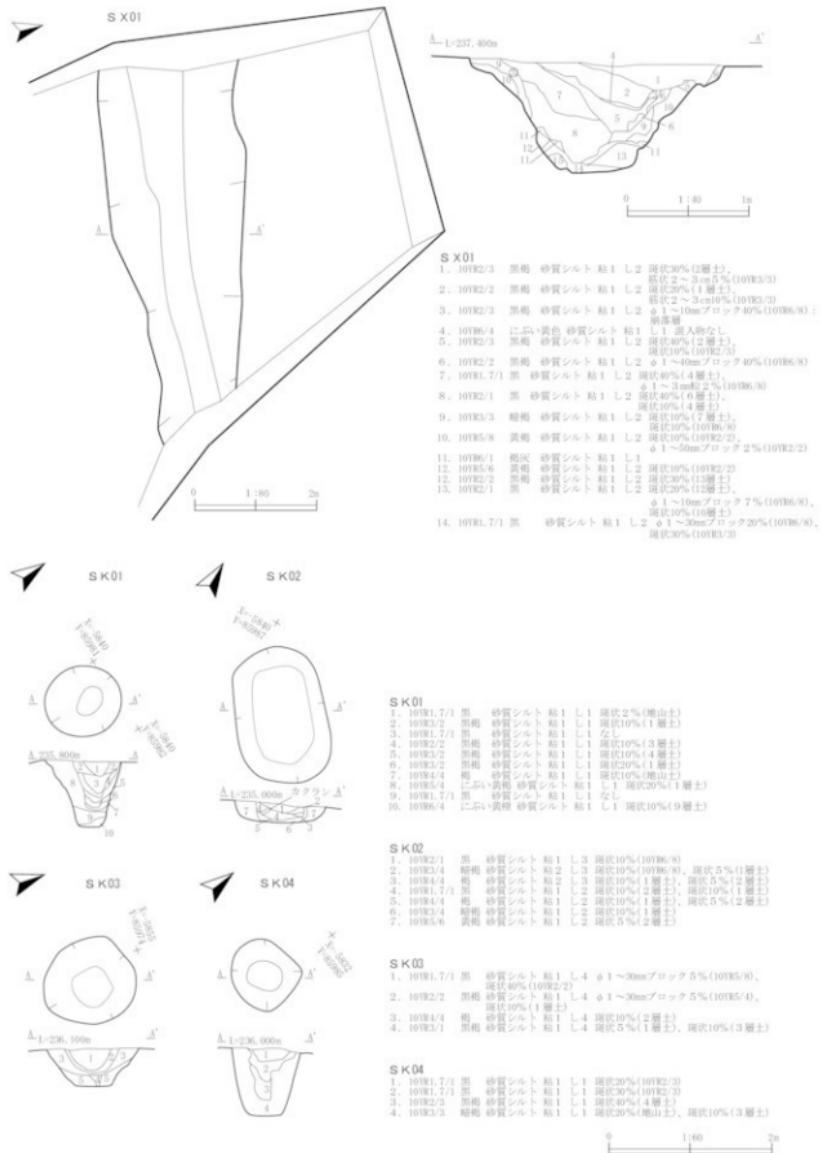
(2) 遺物

調査区北東端から縄文土器片が1点(第8図1)が出土した。

基本層序	
I-1.10982.3	昭和 砂質シルト
I-1.2	固結(?)10985.0
II-10982.3	にふくらぬれ 砂質シルト(?)
III-10982.3	砂質シルト(?)
IV-10982.6	昭和 砂質シルト(?)
V-10982.4	にふくらぬれ 砂質シルト(?)
VI-10982.6	昭和 砂質シルト(?)
層	地盤
I	1
II	2
III	3
IV	4
V	5
VI	6

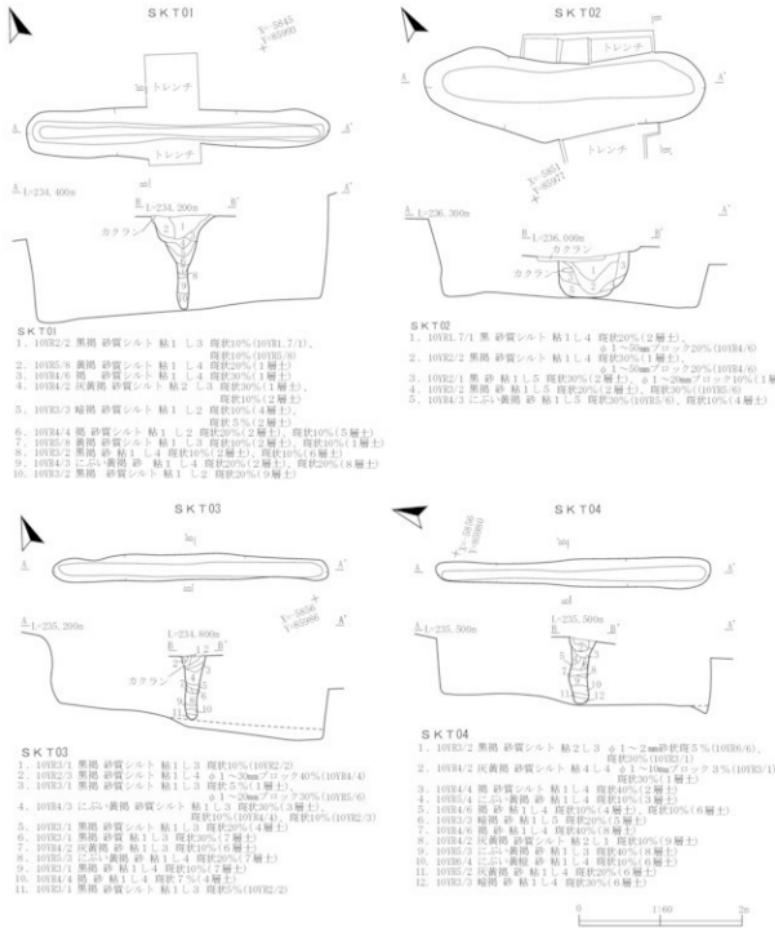


第4図 基本層序



第5図 SD01 雨裂跡、SK01～04 土壌

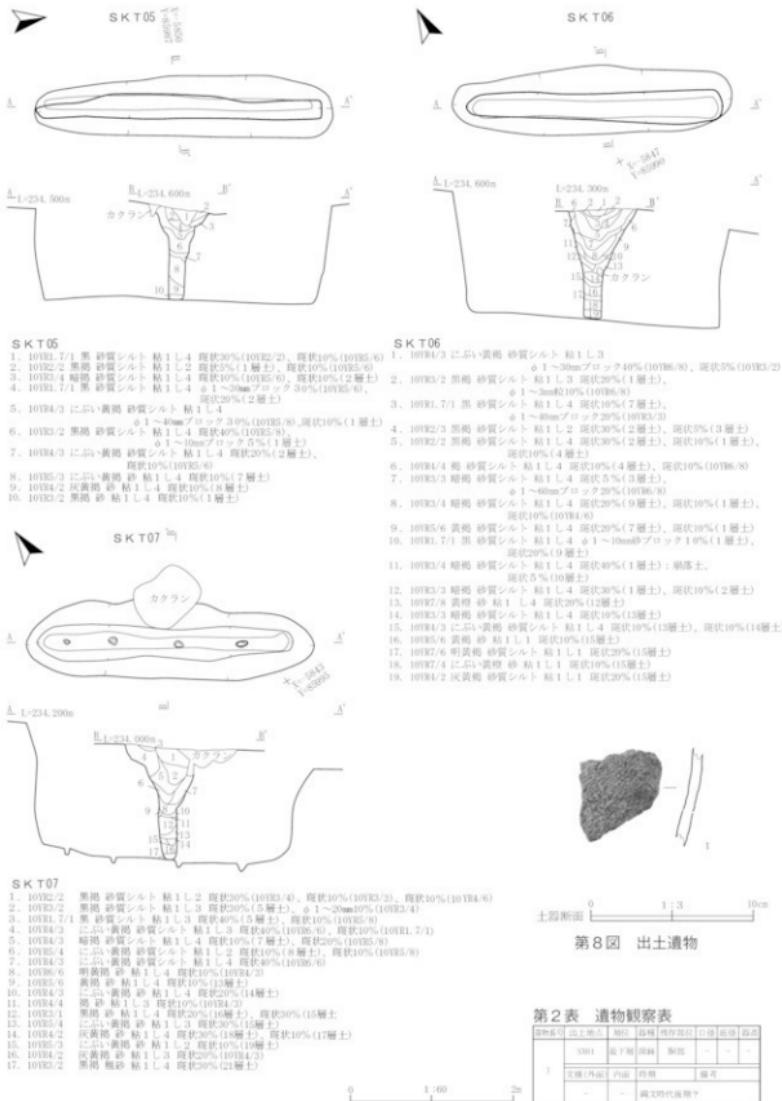
(4) 沼袋Ⅲ遺跡



第6図 SK T01~04陥し穴状遺構

第1表 遺構観察表

遺構名	回数	平面図形	構造物	裏側開口	直面方向	平面形	開口面 (cm)	深さ (cm)	材質類似	備考
SKT01	第1回	4	単	Y-79'-4	内	210×7.5	170	—	—	—
SKT01	第2回	2	単	Y-80'-4	内	160×8.0	85	—	—	—
SKT01	第3回	2	単	Y-81'-4	内	160×10.0	10	—	—	—
SKT01	第4回	2	単	Y-82'-4	内	110×10.0	40	—	—	—
SKT01	第5回	2	単	Y-83'-4	内	160×10.0	60	—	—	—
SKT01	第6回	3	単	Y-77'-4	内	160×10.0	160	—	—	—
SKT01	第7回	3	単	Y-78'-4	内	210×10.0	110	—	—	—
SKT01	第8回	3	単	Y-79'-4	内	160×10.0	110	—	—	—
SKT01	第9回	3	単	Y-80'-4	内	210×10.0	84	—	—	—
SKT01	第10回	4	単	Y-81'-4	内	210×7.5	120	—	—	—
SKT01	第11回	4	単	Y-82'-4	内	210×8.0	170	—	—	—
SKT02	第1回	4	単	Y-58'-4	内	210×8.0	170	近赤 8.4	—	—



第8図 出土遺物

第2表 遺物観察表

分類番号	出土地點	地層	層位	堆積	地質	露頭
1	10TR1	10TR1	10TR1	—	—	—
2	10TR2	10TR2	10TR2	—	—	—

第7図 SKT05 ~ 07 鎮し穴状遺構

5 まとめ

(1) 沼袋Ⅲ遺跡

今回の調査では、東向き緩斜面中腹部に縄文時代の陥し穴状遺構（以下、陥し穴と略す）7基、雨裂跡1条、時期不明土坑4基を確認した。陥し穴は全て溝状で、なかには逆茂木痕を有するものがある。調査区南北にそれぞれ西から東へ向かって沢が形成され、調査区は沢間に位置する。本遺跡は、こうした水辺に集まる、または逃げ込んだ動物を狙った狩猟場と判明した。

溝状陥し穴は、埋土にクロボクが堆積する場合が多く、縄文時代中期以降に東北北部で主流になることが指摘されている（坂本・杉野森 1997）。今回の調査で確認された溝状陥し穴も縄文時代中期以降の可能性が高い。沼袋Ⅲ遺跡に形成された毬施設の管理・運営者の居住城は、今回の調査では確認できなかったが、遺跡から南西へ3kmに位置する集落遺跡の沼袋遺跡、坂の下遺跡がその候補となろう。

(2) 沼袋Ⅱ、Ⅲ遺跡についての考察

沼袋Ⅱ、Ⅲ遺跡双方で今回みつかった急・緩斜面上の等高線に直行する陥し穴底面はすべて傾斜している。類例は同条件に立地する他遺跡の陥し穴にもみられ（桜井 2000 他）、地形によって掘りやすさが異なるなど、形状については遺構の立地環境からの検討が必要（大泰 2007）である。陥し穴の配列について、田村（1987 他）は「丘陵の裾」、「尾根地形」、「沢状地形」、「川」への意識が考えられ、「等高線にそって」、「緩斜面を横断」、「尾根を横断」、「比較的平坦な地形面への縁に数箇所まとまる」等の条件を提示している。沼袋Ⅲ遺跡から北へ約25kmに位置する沼袋Ⅱ遺跡は、これらの条件を備えている。SKT 02・04・17、SKT 05・16、SKT 14・15・18、SKT 06・08・10、SKT 09・12、SKT 01・11は既に指摘（田村 1987、岩文理 2007）しているように、2・3基が等高線に沿って、もしくは等高線に直行するように配置されているのが確認できる。沼袋Ⅱ遺跡では上記6セットが確認され、沼袋Ⅲ遺跡では SKT 01・03、SKT 06・07 の2セットが同じく等高線に沿って配置されていることが確認できた。また、県内で出土している狩猟文土器（岩文理 1988）には溝状陥し穴がセット関係を持って描かれている。こうしたことから両遺跡の陥し穴はその配置に明確な意図があると理解される。また、この地域の縄文人が狩猟の対象としていた獲物として有力なのがシカとイノシシである。シカは河川に逃げる習性をもち（大泰 2007）、平坦部が丘に移行する斜面の下端や台地の縁辺を通ることが多い。そのため陥し穴はテラス部分に構築（磯村 1990）される傾向がある。沼袋Ⅱ遺跡のテラス範囲は、人為的削平のため前述の特徴を有するか不明であるが、陥し穴が傾斜の始まる平坦部際に集中することは確かである。

なお、沼袋Ⅲ遺跡平成26年度調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

参考文献

- 磯村亨 1990 「第5章まとめ 陥し穴状遺構について」『石神遺跡発掘調査報告書』pp.51-52 秋田県文化財報告書第191集
大泰司統・佐藤宏之 2007 「縄文時代の狩猟・漁撈技術」「縄文時代の考古学5 なりわい—食料生産の技術—」同成社
桜井秀雄 2000 「原村、南平遺跡にみられる陥し穴の年代」『信濃』第52巻第10号
坂本真弓・杉野森淳子 1997 「青森近県における陥し穴集成」「研究紀要」第2号 青森県埋蔵文化財調査センター
田村壯一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」「紀要」VII(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 「馬立Ⅱ遺跡」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第122集
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006 「沼袋遺跡」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第483集
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007 「野古遺跡」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第501集

[分析鑑定報告1]

沼袋Ⅲ遺跡出土テフラの検出同定及び火山ガラスの屈折率測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県田野畠村に所在する沼袋Ⅲ遺跡は、尾肝要峠北麓の普代川に面する緩斜面上に立地する。同遺跡からは、縄文時代の遺構・遺物が検出されている。今回の分析調査では、検出された遺構のうち溝跡より採取された火山灰質試料を対象として、テフラの検出同定および火山ガラスの屈折率測定を行い、既知の火山灰と対比することにより、それらの年代指標に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、沼袋Ⅲ遺跡のSX01雨裂跡より採取された火山灰質試料（試料名：SX01-11）である。層相は、にぶい黄褐色を呈す砂まじりシルトである。

2. 分析方法

(1) テフラ検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

(2) 火山ガラスの屈折率測定

屈折率の測定は、処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスを対象として、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

3. 結果

(1) テフラ検出同定

結果を表1に記す。試料からは軽石が検出されず、無色透明の軽石型火山ガラス、無色透明のバブル型火山ガラスが極めて微量が含まれ、さらに微量の黒雲母斑晶が混在する。

試料名	軽石			火山ガラス		備考
	量	色調・発光度	最大粒径	量	色調・形態	
SX01-11	-	-	-	(+)	cl-pm, cl-bw	黒雲母斑晶+

凡例 一：含まれない、(+)：きわめて微量、+：微量、++：少量、#：白色
g：良好、sg：やや良好、最大粒径はmm
cl：無色透明、bw：バブル型、pm：軽石型、(pm)：斜方輝石斑晶包有

(2) 火山ガラスの屈折率測定

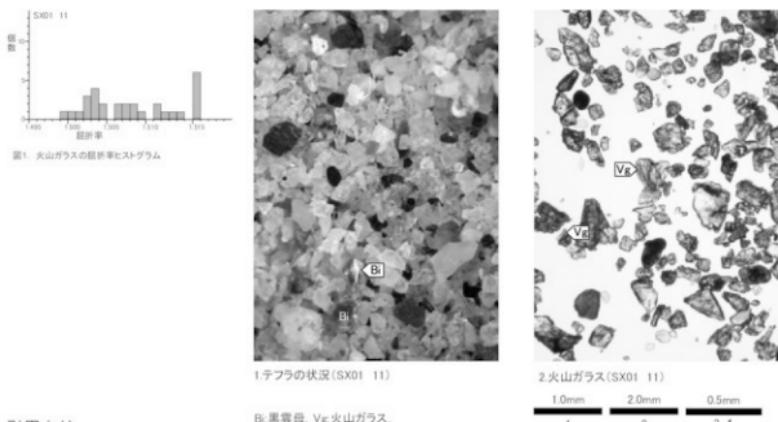
火山ガラスの屈折率測定結果を図1に記す。屈折率はn1.499 - 1.515という広いレンジを示し、モードは不明瞭であるがn1.503、1.515付近にある。

4. 考察

今回分析調査対象とした試料からは火山ガラスが検出された。沼袋Ⅲ遺跡の地理的位置を考慮すれば、これらはいずれも十和田カルデラからの噴出物である可能性が高い。分析対象試料では、火山ガラスの屈折率のレンジが広く、モードはn1.503、n1.515付近にあった。分析対象試料のように比較的低い屈折率を示す火山ガラスを含む十和田カルデラ起源のテフラは、十和田aテフラ (To-a: 町田ほか 1981; 町田・新井 2003) と十和田八戸テフラ (To-H: 町田・新井 2003; Hayakawa 1985) がある。そのうち To-a は屈折率のレンジが 1.500 - 1.508 を示し、西暦 915 年に噴出したとされる。また To-H は、屈折率のレンジが 1.505 - 1.509 のレンジを示し、約 1500 年前に噴出したとされる (町田・新井 2003)。

一方、分析対象試料の最高値である屈折率 n1.515 の火山ガラスを含むテフラとしては、白頭山苦小牧テフラ (B-Tm: 町田ほか 1981; 町田・新井 2003)、To-Cu、To-Nb が知られる。B-Tm の分布範囲は、町田・新井 (2003) によれば、岩手県北部以北が南限にあたるとされており、本遺跡周辺にも降灰があった可能性がある。なお、その噴出年代については、10 世紀頃とされている。

今回の分析調査の結果、上述したテフラが SX01 雨裂跡内で混在し、埋積したことが示唆される。したがって本試料が採取された 11 層は、To-a や B-Tm が降灰したとされる 10 世紀ごろ以降に形成されたと考えられる。なお、混在する黒雲母斑晶は、十和田カルデラや白頭山の噴出物に由来するものではなく、田野畠村付近に分布する白亜紀前期の田野畠花崗岩体に由来するものと考えられる。



引用文献

- 古澤 明 1995 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌 101 123 - 133.
 Hayakawa Y. 1985 Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Research Institute University of Tokyo vol.60 507 - 592.
 工藤 崇・佐々木 寿 2007 十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年. 地学雑誌 116 653 - 663.
 町田 洋・新井房夫 2003 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会 336p.
 町田 洋・新井房夫・森脇広 1981 日本海を渡ってきたテフラ. 科学 51 562 - 569.
 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 1984 テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－. 渡辺直経編 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 865 - 928.



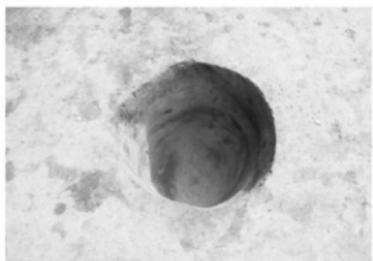
沼袋Ⅱ、沼袋Ⅲ遺跡遠景（東から）



調査区近景（西から）

写真図版 1 調査区全景

(4) 沼袋Ⅲ遺跡



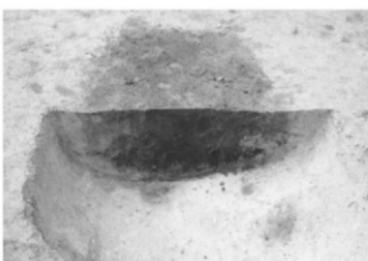
SK01 土坑完掘 (南東から)



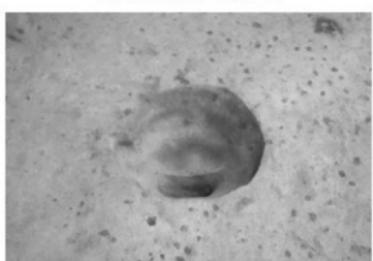
SK01 土坑断面 (南東から)



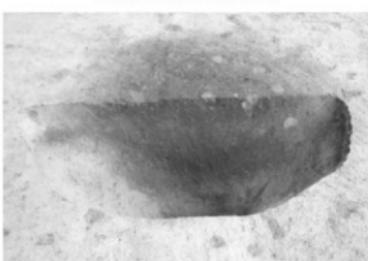
SK02 土坑完掘 (南東から)



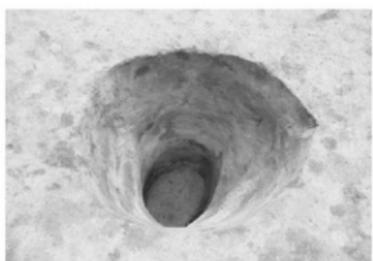
SK02 土坑断面 (南東から)



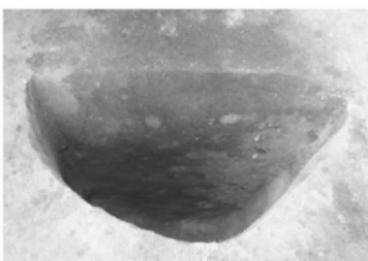
SK03 土坑完掘 (東から)



SK03 土坑断面 (東から)



SK04 土坑完掘 (南東から)



SK04 土坑断面 (南東から)

写真図版2 SK01~0.4土坑



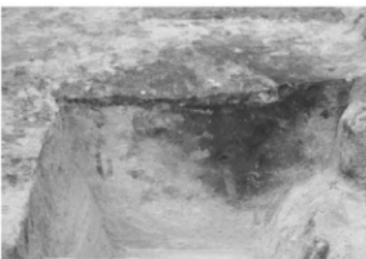
SKT 01 塗し穴状遺構完掘 (南東から)



SKT 01 塗し穴状遺構断面 (南東から)



SKT 02 塗し穴状遺構完掘 (南東から)



SKT 02 塗し穴状遺構断面 (南東から)



SKT 03 塗し穴状遺構完掘 (東から)



SKT 03 塗し穴状遺構断面 (東から)



SKT 04 塗し穴状遺構完掘 (南東から)



SKT 04 塗し穴状遺構断面 (南東から)

写真図版3 SKT 01~04 塗し穴状遺構

(4) 沼袋Ⅲ遺跡



SKT 05 埋し穴状遺構完掘（南から）



SKT 05 埋し穴状遺構断面（南から）



SKT 06 埋し穴状遺構完掘（南東から）



SKT 06 埋し穴状遺構断面（南東から）



SKT 07 埋し穴状遺構完掘（南東から）



SKT 07 埋し穴状遺構断面（南東から）



SXO 1 雨裂跡（南東から）



SXO 1 雨裂跡断面（南東から）

写真図版4 SKT 05~07 埋し穴状遺構、SXO 1 雨裂跡

(5) 八幡沖遺跡

所 在 地	一関市室根町折壁字41-3	遺跡コード・略号	N F 93-1069・H O-14
委 託 者	一関市	調査対象面積	1,000m ²
事 業 名	市道千刈田向山線道路改良事業	調査終了面積	1,000m ²
発掘調査期間	平成26年10月16日～12月19日	調査担当者	杉沢昭太郎・中川重紀・鈴木貞行・白戸このみ

1 調査に至る経過

八幡沖遺跡は、「市道千刈田向山線」の建設事業に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

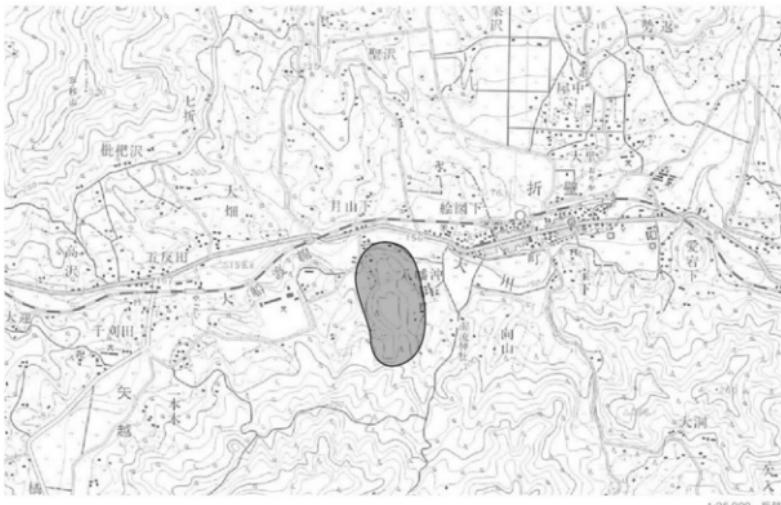
本路線は、一関市室根町矢越字千刈田地内的主要地方道本吉室根線を起点とし、室根町折壁字向山地内国道284号室根バイパスに接続するアクセス道路として計画した路線であり、室根町矢越・津谷川地区とバイパスを繋ぐ生活道のほか、市立室根中学校への通学路としても重要な路線である。

本路線の整備により、安全で円滑な交通体系の確保とバイパスへのアクセス向上を図り、住民生活の利便性向上を目的に事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、接続する国道284号室根バイパス事業にて事前に岩手県教育委員会による分布調査及び試掘調査が行われ、埋蔵文化財が確認されていたことから、発掘調査を一関市教育委員会を経て岩手県教育委員会へ依頼した。

当建設整備課は、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成26年10月15日付けで公益財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(一関市建設部建設整備課)



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡調査範囲

2 遺跡の位置と立地(第2図)

遺跡はJR東日本大船渡線折壁駅から約1km南西に位置し、矢越山と新館山から北に延びる細長い尾根上に立地している。この尾根は町内で最も大きな河川である大川のすぐ近くまで張り出しており、折壁地区の多くを見わたすことが出来る。調査区の標高は190~198mで大川からの比高差は約45mである。調査区は尾根南部付近であった。

3 基本層序(第4図)

調査区の殆どは尾根の斜面部分にある。

I層 10YR3/3暗褐色土 粘性と縮まりは共に弱い。植物根や雜物の多い表土。10~20cm。

II層 10YR2/1黒色土 粘性と縮まりは共にやや有り。旧表土。10~40cm。

III層 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性と縮まりは共にやや有り。部分的にみられる。0~10cm。

IV層 10YR6/8明黄褐色土 粘性と縮まりは共にやや有り。遺構検出面。20~60cm。

V層 10YR7/8黄橙色風化花崗岩 粘性弱い。縮まっている。基盤層。30cm以上。

4 調査の概要

調査区内にあった樹木を伐採後、人力による試掘を複数箇所で行った。その後で重機による表土除去を調査区の北半部で実施した。遺構・遺物が少ないことが明かとなつたため協議の結果、調査区の南半部は試掘のみで終了扱いとなった。なお、遺構名については同時期に調査した県事業からの連番となっている。

(1) 遺構

3号土坑 標高188m付近の斜面で検出した。開口部1.6×1.3m、深さ0.8mの平面形が小判形をしている。埋土は地山ブロックを不規則に含む黒褐色土で人為堆積である。平坦な底面の直上から銭貨が7枚、

重なって出土した。底面のはば中央付近である。銭貨の多くは洪武通宝で判読できないものもあるが、寛永通宝は含まない。骨片やその他の遺物は見られなかった。出土した銭貨の流通していた時期から15~16世紀の墓壙といえる。

4号土坑 3号土坑のすぐ西側、標高187m付近の斜面で検出した。平面形は径21mの円形を基調とし、底面は楕円形である。深さは12m程ある。埋土上位には旧表土が入り込んでいるため遺構の規模はほぼ原形に近い状態と判断される。埋土は自然堆積であった。出土遺物は無く遺構の所属時期は不明である。

1号道路遺構 斜面の中腹より少し下、標高183~185m付近に位置している。高い部分を切り土し、低い方へ盛って平坦な面を作りだしているのが現況からでも確認できていた。その範囲は東西約52m、南北は約122mあり、北から南へと下るように延びている。地山面まで下げて他の遺構も探したが無かつた。遺構の規模や形状から堀跡に沿って造られた道路跡の可能性があるが、門跡になるような柱穴や礎石は確認できず、出土遺物もないことから時期も判然としない。

(2) 遺物

3号土坑に伴って7枚の銭貨が底面直上から出土している。この内、6枚の種類が分かっている。何れも洪武通宝で残る1枚も渡来銭の可能性が高い。個々の銭貨の特徴については観察表にまとめた。なお調査区からは銭貨の他に近現代も含め遺物は出土していない。

5まとめ

遺跡は折壁地区を広く見下ろすように北に張り出した細長い尾根を、堀で大きく2つの曲輪に分け、それぞれの曲輪に小規模な平場を複数造りだして城館としている。調査区は南側の曲輪の西辺部にある。

隣接する南側の曲輪にある各平場を同年に調査しているが、殆ど遺構・遺物が見られないため恒常に使われてはいないようである。墓壙が見られるのもこのような場であったからと推察される。発掘調査はまだ行われていないが、より折壁の集落に近い北側の曲輪のほうが城館としては頻繁に利用されている可能性が高い。

なお、八幡沖遺跡の市道千刈田向山線道路改良事業に関わる報告はこれをもって全てとする。

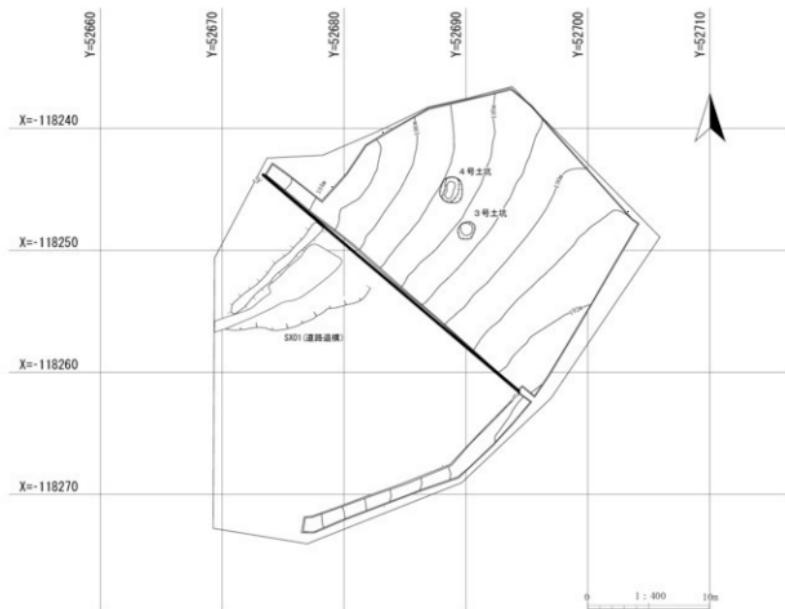
第1表 銭貨観察表

番号	銭名	出土地点・層位・状況	产地	初跨年代	重量(g)	備考
1	洪武通宝	3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土	明	1368	1.1	欠損
2	洪武通宝	3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土	明	1368	2.8	
3	洪武通宝	3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土	明	1368	2.5	
4	洪武通宝	3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土	明	1368	3.0	
5	不明	3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土		—	2.5	渡来銭
6	洪武通宝	3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土	明	1368	2.3	
7	洪武通宝	3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土	明	1368	2.8	

(5) 八幡冲遺跡



第3図 八幡冲遺跡遺構配置図



基本層序

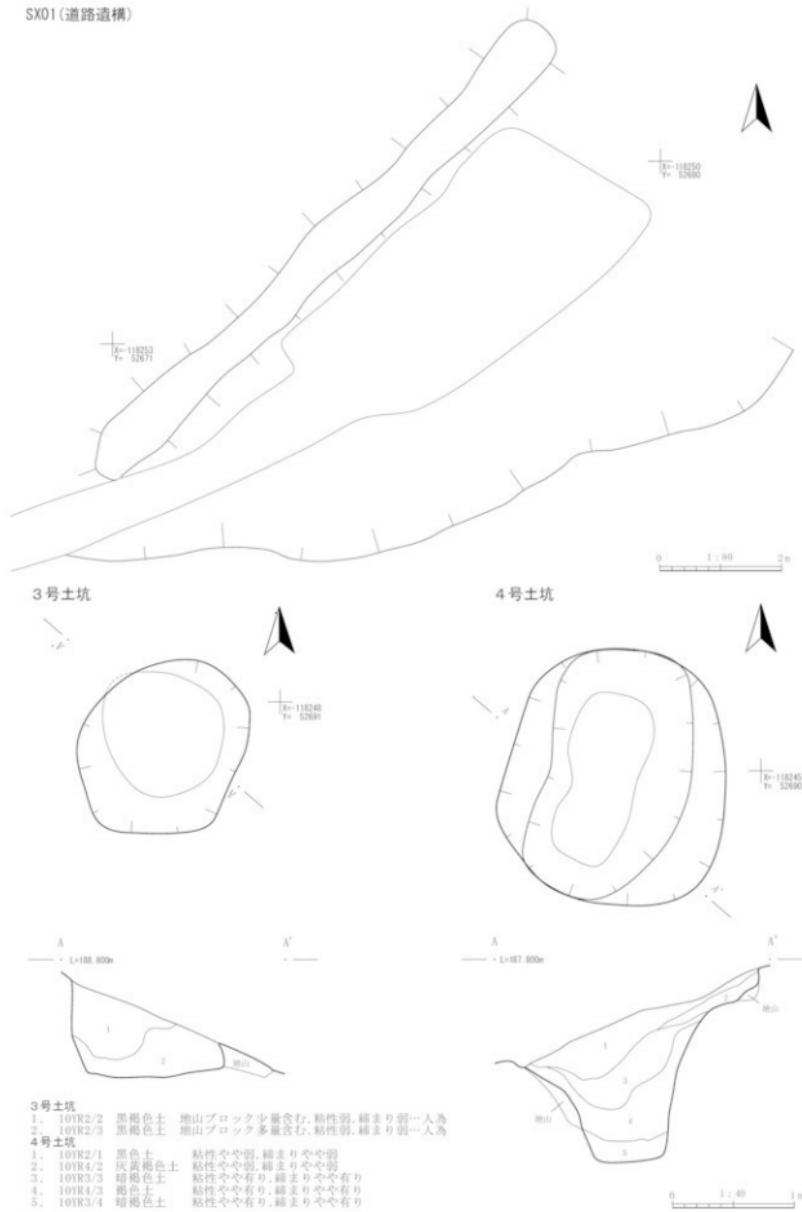


基本層序

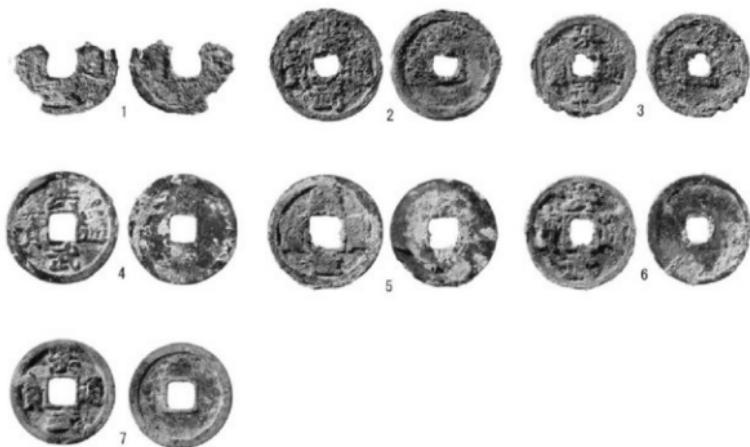
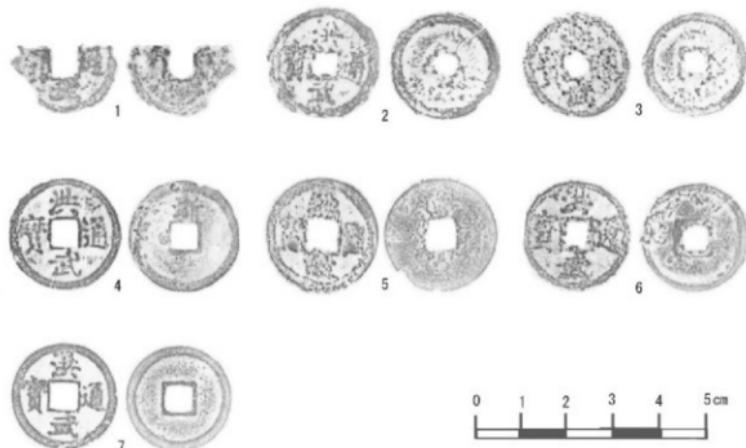
- | | | |
|------|-----------------|---------------------|
| I. | 10Y3/3 暗褐色土 | 表土、草根多、粘性弱、縮まり弱 |
| II. | 10YR2/1 黒色土 | 旧表土、粘性やや有り、縮まりやや有り |
| III. | 10Y3/2 黒褐色土 | 粘性やや有り、縮まりやや有り |
| IV. | 10YR2/4 暗褐色砂質土 | 粘性やや弱、縮まりやや弱 |
| V. | 10YR4/3 にふい黄褐色土 | 若干砂っぽい、粘性やや弱、縮まりやや弱 |

第4図 遺構配置図・基本層序

(5) 八幡沖遺跡
SX01(道路遺構)



第5図 土坑・その他の遺構



第6図 八幡沖遺跡出土遺物

(5) 八幡沖遺跡



遺跡遠景（北から）



遺跡直上から（写真上が南）

写真図版1 遺跡遠景



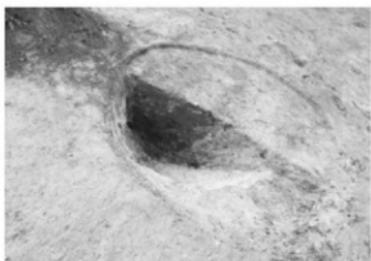
調査区全景（北から）



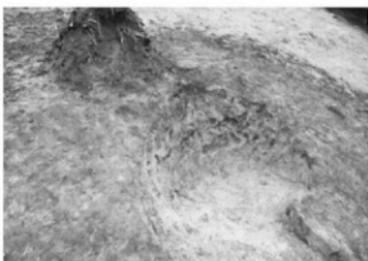
基本土層1（北から）



基本土層2（東から）



3号土坑断面（北から）



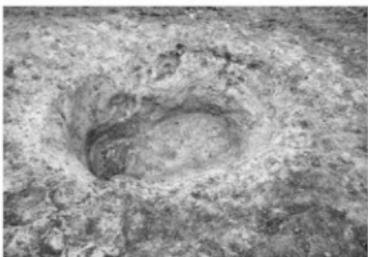
3号土坑平面（北から）

写真図版2 調査区全景、3号土坑ほか

(5) 八幡沖遺跡



4号土坑断面（南西から）



4号土坑完掘（東から）



1号道路遺構（西から）



1号道路遺構（西から）



調査区全景（北から）

写真図版3 調査区全景、4号土坑ほか

II 発掘調査概報

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42 × 32 × 30cm

中コンテナ：42 × 32 × 20cm

小コンテナ：42 × 32 × 10cm

(6) なかむら 中村遺跡

所 在 地 北上市二子町字中村地内
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 北上川中流域河川改修事業
 発掘調査期間 平成 26 年 4 月 7 日～12 月 22 日
 調査終了面積 18,290m²
 調査担当者 丸山直美・高木晃・高橋義介・村木敬・川村均・
 伊東格・清水彩・藤原雅仁・佐藤奈津季
 主要な時代 奈良・平安



遺跡の立地

遺跡は、南流する北上川の西岸に形成された自然堤防上に立地し、標高は約 60 m を測る。調査対象範囲は北上川に沿って南北に 600 m と細長く、南側には昨年まで調査された千刈遺跡が隣接している。

調査の概要

検出遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡 109 棟、掘立柱建物跡 3 棟、土坑 125 基、焼成土坑 69 基、溝跡 25 条、畝間状遺構 8 箇所、焼土 17 基、柱穴状土坑 477 個である。調査の結果、全域にわたって古代の竪穴住居跡を主体とする遺構群が検出され、千刈遺跡からつづく一大集落が形成されていることが判明した。出土遺物は弥生時代後期の土器・石器が大コンテナで 3 箱（旧河道出土）、奈良～平安時代の土師器・須恵器、土製品、金属製品、鉄滓類が大コンテナで約 100 箱である。



古代竪穴住居跡群



住居内土坑遺物出土状況



石組みの構造を持つカマド



作業風景

(7) 新里愛宕裏遺跡

所 在 地 遠野市綾織町新里 30 地割ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事 業 名 東北横断自動車道路釜石秋田線
発掘調査期間 平成 26 年 5 月 21 日～9 月 3 日
調査終了面積 3,000m²
調査担当者 小野寺純也・高橋義介・巴 亜子
主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、JR遠野駅から南西に約1.8kmに位置し、猿ヶ石川を北に望む標高280m前後の中位段丘上に立地する。調査前の状況は雑木林である。北側調査区東側は、鉄塔建設に伴う擾乱を大きく受けているため、遺構の大半が削平されている。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期～後期の竪穴住居跡3棟、土坑13基、陥し穴状遺構5基、フラスコ状土坑20基、焼土4基、柱穴状土坑11個である。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ7箱、石器類大コンテナ4箱、動物形土製品等である。縄文時代中期の竪穴住居跡からは、複式炉を確認している。道路を挟んだ南側調査区から北側調査区斜面地上にかけて、複数の土坑、フラスコ状土坑を検出した。この地点周辺のフラスコ状土坑内には、土器を多く含む黒色土と、焼土が堆積しており、土器とともに遺棄、もしくは斜面地上より流れ込んだと想定される。北側調査区西側には、陥し穴状遺構が集中しており、土器等はほとんど確認できなかった。また、調査区を南北に走る自然流路も確認した。



縄文時代中期の竪穴住居跡



検出した複式炉



埋土中に焼土を伴う土坑

(8) 九重沢Ⅲ遺跡

所 在 地 遠野市遠野町第29地割15-5ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線
 発掘調査期間 平成26年4月9日～6月6日
 調査終了面積 1,550m²
 調査担当者 巴 亜子・高橋義介・小野寺純也・川村 均
 主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、JR遠野駅より南東へ約1.6kmの地点に位置する。遺跡は猿ヶ石川の支流来内川へ向かって注ぐ丘陵に位置する。標高は310～320mで、現状は山林であった。

調査の概要

検出遺構は縄文時代後期の竪穴住居跡5棟、竪穴住居状遺構2棟、フラスコ状土坑1基、土坑6基、埋設土器1基、焼土6箇所、柱穴状土坑7個、遺物包含層1箇所である。

出土遺物は、縄文土器が中コンテナ7箱、石器類小コンテナ1箱、土偶頭部や土鈴などの土製品が小コンテナ1箱である。



遺跡遠景（直上から）



竪穴住居跡（南東から）



フラスコ状土坑遺物出土状況（東から）



出土土偶頭部

(9) 栃洞Ⅲ遺跡

(9) とちばら
（9）栃洞Ⅲ遺跡

所 在 地 遠野市遠野町第31地割ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線
発掘調査期間 平成26年10月6日～11月27日
調査終了面積 2,330m²
調査担当者 巴 亜子・高橋義介
主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、JR遠野駅より南へ約2.1kmの地点に位置する。遺跡は猿ヶ石川支流の来内川沿いの丘陵に位置する。標高は310～320mで、現状は山林であった。

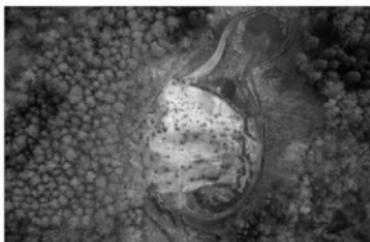
調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期後葉の堅穴住居跡1棟、フ拉斯コ状土坑12基、土坑36基、陥し穴状遺構17基、近世墓7基である。調査区は大きく南斜面・東斜面・北斜面・尾根上の平坦面に分けられ、尾根上の平坦面には堅穴住居跡や近世墓が見つかった。

出土遺物は、縄文土器中コンテナ2箱、石器類小コンテナ1箱、銭貨64枚である。

南斜面にはフ拉斯コ状土坑や土坑が集中していることが確認できた。調査区西側には陥し穴状遺構が多く見つかっている。堅穴住居跡は複式炉を伴い尾根上の平坦面から東斜面にかけて位置しており、斜面下部は確認できなかった。中～近世墓はいずれも人骨が残存しており埋土中から永楽通寶・宣徳通寶などが出土している。

これらのことから縄文時代には尾根上の平坦面を集落・食料保存の場、西側を狩猟の場、南北の斜面を食料保存の場として利用していたことが明らかとなった。



調査区遠景（上が北）



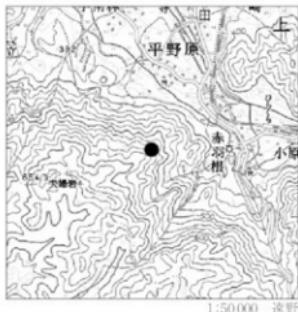
堅穴住居跡（西から）



陥し穴状遺構発掘（西から）

(10) 平野原Ⅲ遺跡

所 在 地 遠野市上郷町平倉第38地割ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線
 発掘調査期間 平成26年9月1日～9月30日
 調査終了面積 1,120m²
 調査担当者 巴 亜子・高橋義介
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、JR岩手上郷駅より南西へ約19kmの地点に位置する。遺跡は猿ヶ石川支流の早瀬川沿いの低地に面した丘陵中腹に立地する。標高は約400mで、現状は山林であった。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構17基、時期不明の土坑1基である。遺構の残存状態が良く、最も深いもので確認面から2.2mほどである。また、陥し穴状遺構も平面形が楕円形状を呈するものと、細長い溝状を呈するものがある。

出土遺物は縄文土器小コンテナ0.5箱、石器小コンテナ0.5箱である。



遺跡近景（東から）



陥し穴状遺構断面（東から）



陥し穴状土坑完掘（北から）



陥し穴状遺構完掘（南から）

(11) 館岡 II 遺跡

たておか
(11) 館岡 II 遺跡

所 在 地 西磐井郡平泉町長島字館岡 23-1 ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事 業 名 一関遊水地事業
発掘調査期間 平成 26 年 4 月 7 日～5 月 17 日
調査終了面積 600m²
調査担当者 杉沢昭太郎・白戸このみ
主要な時代 16 世紀・18 世紀



遺跡の立地

遺跡は、JR 東日本平泉駅から約 2.4km 東に位置し、北上川左岸の河岸段丘縁辺部に立地している。本遺跡の北側には館岡 I 遺跡、南東には小島館跡、南側には猪岡館跡などがある。調査前は住宅が建ち、標高 32 m と 30 m 程の二つの平坦面からなる地形であった。

調査の概要

中世の遺構には堀跡 1 条、堅穴建物跡 1 棟、平場 2 箇所がある。近世では、掘立柱建物跡 4 棟、土坑 20 基、井戸跡 1 基、溝跡 9 条があり、中近世の遺構としては柱穴状土坑 266 個が検出されている。

中世の遺構が確認されたことにより本遺跡は城館の一部であることが明らかになり、城域は更に南へと延びることも分かってきた。館岡 I 遺跡と一体となって機能していた大規模な城館であった可能性が高い。中世末で調査区付近は一旦廃絶するが、18 世紀以降には規模の大きな近世民家の立つ屋敷地となる。

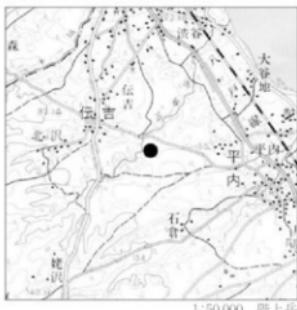
中世の遺物では堅穴建物跡から銭貨が約 30 枚出土した他、瀬戸美濃産陶器 2 点が出土している。近世陶器は中コンテナ 2 箱出土した。



堀跡近景（東から）

(12) にしひらない
西平内 I 遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町種市第37地割地内
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成26年6月2日～11月28日
 調査終了面積 3,250m²
 調査担当者 濱田 宏・宮内勝巳・藤田崇志
 主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、JR八戸線平内駅の西方約1km、洋野町役場から西北西4kmほどに位置し、北流する渋谷川南岸の丘陵上に立地する。遺跡の標高は622～635mで、調査区周辺には雑木や植林された木々の生い茂る山林が広がっている。

調査の概要

今回の調査では、縄文時代後期初頭から前葉にかけての配石遺構群と、それに開まれたように存在する整地層を確認した。この配石遺構は、二つの石列からなる内帶と配石墓と呼ばれる46基の墓の集合体である外帶から構成され、周辺の状況から前者は直径25m前後、後者は40～50mほどの弧状をなすものと考えられる。一方、整地層は上位が黄褐色土、下位が黒色土という異なる二種の土からなり、内帶の構成碑のはほとんどは上の黄褐色土を除去した後に検出された。この二つの整地土はともに厚さ15cmほど、面積約700m²に広がるが、作業時には相当の労力と時間が費やされたことであろう。この他の検出遺構には、陥り穴状遺構17基、土壤墓1基、土坑11基、炉3基、焼土6基、埋設土器1基などがある。

出土遺物は、当該期の土器片や鋸形・円盤状の土製品、ミニチュア土器、焼けた粘土の塊、各種剥片石器など、祭祀に関わるもののが目立ち、未製品を含む石斧の出土点数が極めて多い。また、土偶や岩偶、動物形土製品などの遺物がまったく出土していないことも特徴のひとつとして挙げられる。

縄文時代後期、日本列島は冷涼な気候に見舞われ、このことが豊穣祈願や祖先崇拜に深く結びついたとされるが、この大きな環境の変化が配石遺構を生み出したとも言えよう。次年度は、縄文世界の精神文化の解明を目指し、配石墓群の精査を中心とした調査を継続する予定である。



配石遺構と整地層



西側から見た配石墓群

きたのこし
(13) 北ノ越遺跡

所 在 地 久慈市宇部町第3地割地内
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成 26年5月7日～9月19日
調査終了面積 7,550m²
調査担当者 米田 寛・近藤行仁・佐藤直紀
主要な時代 繩文・古代・中世・近世



遺跡の立地

遺跡は、三陸鉄道北リアス線陸中宇部駅から西へ約600mの丘陵地に位置する。調査区現況は造成林であった。今回の調査区は、東側を宇部館跡と隣接し、標高60～80mを測る。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡2棟（縄文1・古代1）、竪穴建物跡5棟、掘立柱建物跡2棟、陥し穴状遺構16基、墓壙4基、カマド状遺構1基、土坑2基、柱穴状土坑104個である。竪穴建物跡、掘立柱建物跡、墓壙は中世である。

出土遺物は、縄文土器小コンテナ0.1箱、土師器小コンテナ1箱、尖頭器1点、石鏸2点、石匙1点、鉄滓2点、古銭14枚、青磁2点である。



陥し穴状遺構近景



竪穴建物跡近景



カマド状遺構近景



中世墓壙遺物出土状況

(14) 宇部館跡

所 在 地 久慈市宇部町第3地割内
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成 26年 5月 7日～9月 19日
 調査終了面積 1.950m²
 調査担当者 米田 寛・濱田 宏・宮内勝巳・
 佐藤直紀・藤田崇志
 主要な時代 繩文・中世・近世



遺跡の立地

宇部館跡は、三陸鉄道北リアス線陸中宇部駅から西へ約 550 m の丘陵地に位置する。北ノ越川と宇部川に挟まれた丘陵部に普請され、背後の山地（野月山）とは堀切によって分断される。今回の調査区は、西側を北ノ越遺跡と隣接し、標高 50～65 m を測る。別称で八幡館、野月館などがある。

調査の概要

検出遺構は、堀跡 2 条、土壘 2 基、切岸 2 節所である。主郭には宇部八幡社が鎮座し、二重の堀・土壘・切岸で防御されている。

出土遺物は、縄文土器小コンテナ 0.1 箱、埴塙 1 点、古銭 2 枚、中世輸入陶磁器 1 点、コハク塊 1 点である。



宇部館跡遠景

(15) 伏津館跡

所 在 地 九戸郡野田村大字野田第21地割79-1ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成26年4月10日～8月18日

調査終了面積 7,000m²

調査担当者 北田 純・伊藤 武・佐々木あゆみ

主要な時代 繩文・中世



遺跡の立地

伏津館跡は、野田村北部に位置しており、野田村役場の西約800mの独立丘陵に立地している。現況は山林で、標高は27～53mである。

調査の概要

昨年度に続き、2カ年目の調査である。2カ年で確認された遺構は、縄文時代の陥り穴状遺構10基、古代の炭窯跡2基、中世の堀跡1条、土壘1箇所・曲輪7箇所・切岸1箇所・武者走り状遺構2箇所・掘立柱建物跡4棟・焼土11基・土坑25基・溝跡13条・柱穴状土坑143個、出土した遺物は、縄文土器中1箱・石器小コントナ0.2箱・中世の陶磁器大コントナ2箱（輸入・国産）・銭貨31枚・茶臼4点・硯1点・石鉢1点・金属製品6点（青銅製花瓶・鍍金された青銅製目貫各1点含む）である。

今回の調査から、伏津館跡は15世紀に造営された城館で、その後短期間で廃絶したことが確認された。掘立柱建物跡4棟は、最高所の曲輪1とその下の曲輪2から検出している。これらはいずれも重複関係を持たず、小規模な改築の痕跡のみが認められた。建物は、2×5間に三もしくは四面に庇を有し今調査で最大の規模を持つものと、2×7間の二面に庇を有する切妻の建物があり、それぞれに付属屋を伴う。曲輪1は、西から南にかけてL字形の土塁に囲まれており、防御をより強固にしている。南側には腰曲輪が配置され、これから続く武者走り状の通路が東側を巡る。南端の尾根筋は、堀切で分断されており、城館の縄張り範囲を示している。また、調査区外であるが北側には数段の曲輪を確認している。

建物周辺からは遺物がまとまって出土しており、いずれも15世紀の狭い範疇に収まる。これらの遺物には、茶・香・書・花などに用いる道具が揃っており、財力を持った有力者の居館であった可能性が高い。



調査区全景（左が北）



掘立柱建物跡全景

(16) 中平遺跡

所 在 地 九戸郡野田村大字野田第13地割
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成26年10月1日～11月21日
 調査終了面積 2,600m²
 調査担当者 北田 純・佐々木あゆみ
 主要な時代 繩文・古墳・奈良



遺跡の立地

遺跡は、野田村役場から南西約400mに位置しており、明内川と泉沢川によって形成された河岸段丘上に立地している。現況は畠地・宅地で、標高は21.5～24.5mである。これまでの数回の調査で、古代を中心とする大規模な集落が確認されている。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥り穴状遺構13基、古墳～奈良時代の竪穴住居跡3棟・焼土7基、出土遺物は縄文前期の土器・石器各小コンテナ0.5箱、古墳～奈良時代の土師器大コンテナ2箱、紡錘車1点・石器小コンテナ0.5箱、コハク2点である。

調査地点は遺跡範囲の最東端となり、古代の集落と縄文時代の狩り場の広がりが確認された。次年度も調査を継続する予定である。



調査区全景（右が北）

(17) 上泉沢遺跡

(17) 上泉沢遺跡
かみいずみさわ

所 在 地 九戸郡野田村大字野田第12地割4-1ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成26年8月18日～9月30日
調査終了面積 1,540m²
調査担当者 北田 純・伊藤 武・佐々木あゆみ
主要な時代 繩文・古墳・奈良



遺跡の立地

遺跡は、野田小学校から南西約500mに位置しており、泉沢川によって形成された河岸段丘上に立地している。現況は畠地で、標高は22.0～24.5mである。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構60基、古墳～奈良時代の竪穴住居跡7棟・土坑5基・焼土2基、時期不明の柱穴状土坑5個、出土遺物は縄文土器・石器小コンテナ各0.5箱、古墳～奈良時代の土師器大コンテナ1箱・石器5点・鉄製品2点・コハク2点である。

縄文時代の陥し穴状遺構は円形と溝状があり、前期中葉を境に2時期が想定される。これらはいずれも遺跡北側を流れる泉沢川に下る獲物を捕らえるために並列して配置されたと考えられる。

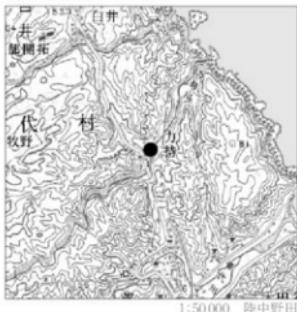
また、古墳～奈良時代の竪穴住居跡は一辺5m前後の隅丸方形を呈し、北西もしくは北東にカマドを有する。7世紀代と考えられる土師器を多く出土しており、該期の集落の広がりが確認された。調査は次年度も継続する予定である。



調査区全景 (上が北)

ちからもり
(18) 力持遺跡

所 在 地 下閉伊郡普代村第16地割字天拝坂地内
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成26年6月2日～11月28日
 調査終了面積 768m²
 調査担当者 星 雅之・川村 均・佐々木隆英
 主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、三陸鉄道北リアス線普代駅の北約2km、力持海岸から西に約1.5kmに位置する。調査地は扇状地性斜面地の東向き緩斜面にあり、標高は約58m、調査前の現況は畑地である。今回の調査地は、平成13～15年度の調査地東側に隣接する。

調査の概要

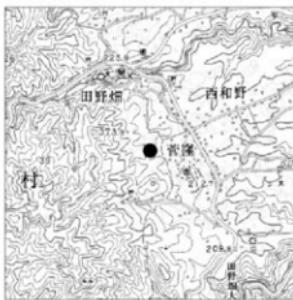
検出遺構は、全て縄文時代で、竪穴住居跡68棟、土坑14基、粘土採掘坑3基、焼土3基、柱穴状土坑75個、捨て場1箇所を検出した。検出した竪穴住居跡を時期別で示すと、前期24棟、中期43棟、後期1棟である。前期は前葉、中期は中葉が主体である。出土遺物は、土器大コンテナ180箱、土製品小コンテナ1箱弱、石器類大コンテナ35箱、石製品3.5箱、コハク小コンテナ3箱が出土した。土器は、縄文時代前期初頭～後期前葉まで認められる。



力持遺跡全景

(19) 菅窪長屋構II遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村菅窪 210-1ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成 26 年 4 月 9 日～7 月 11 日
調査終了面積 1,200m²
調査担当者 小林弘卓・藤本玲子・宇部めぐみ
主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、田野畠村役場より南へ約 2 km の地点に位置し、標高 240 ～ 250 m 台の丘陵地上に立地している。今回の調査区は、東へ延びる狭い尾根とその両側の斜面を含む地点で、調査前の現況は山林である。

調査の概要

検出遺構は、堅穴住居跡 3 棟、土坑 14 基、陥没穴状遺構 2 基、焼土 2 基である。堅穴住居跡はいずれも円形を基調とするもので、床面に石圓炉・地床炉が確認された。これらのうち 3 棟は、出土遺物から縄文時代中期のものと推測され、いずれも尾根頂部付近に構築されている。土坑は調査区全域に見られるが、尾根上平坦部から南側斜面にかかる肩口部分に同規模・同形状のものがまとまって確認された。堅穴住居跡と同じく縄文時代中期のものと考えられる。

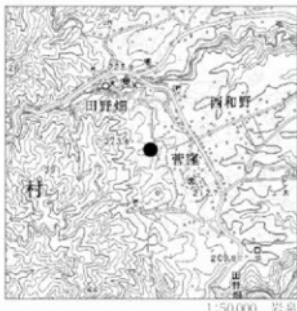
出土遺物は、縄文時代早期・中期のものが出土している。主体を占めるのは中期中葉～後葉の土器であるが、尖底土器や貝殻文が施文された早期中葉の土器も少数見られる。この他、有孔石製品や磨製石斧、剥片石器などが出土している。



航空写真（上空から）

すげのくぼながやかまえ
(20) 菅窪長屋構Ⅲ遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村菅窪 216-1ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成 26 年 4 月 9 日～7 月 11 日
 調査終了面積 2,900m²
 調査担当者 小林弘卓・藤本玲子・宇部めぐみ
 主要な時代 縄文



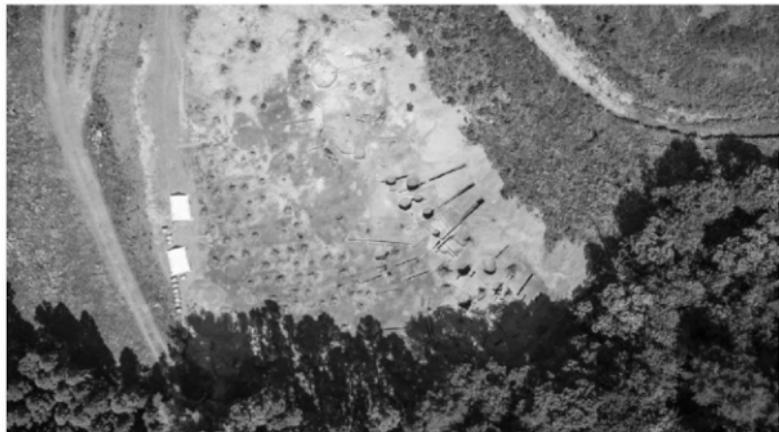
遺跡の立地

遺跡は、田野畠村役場より南へ約 2km の地点に位置し、標高 260～270 m 台の丘陵地上に立地している。今回の調査区は、東へ延びる尾根の頂部とこれを挟む南北の傾斜地を含む地点で、調査前の現況は山林である。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡 5 棟、土坑 17 基、陥し穴状遺構 2 基、炉 2 基である。竪穴住居跡は尾根頂部に構築されており、時期は出土遺物から 4 棟が縄文時代中期中葉～後葉、1 棟が後期前葉に属するものと考えられる。土坑は南側斜面のはば同一等高線上に複数検出されている。規模・形状とも同様のものが多く、フラスコ状を呈することから、貯蔵施設として機能したものと考えられる。出土遺物が少ないと詳細は不明だが、土坑同士の重複がほとんどないことから、同時期に計画的に配置された可能性が窺える。

出土遺物は、縄文時代中期の土器が大半を占める。石器は少数であるが、石錘や石匙などが出土している。



航空写真（上空から）

(21) 向新田Ⅲ遺跡
むかいしんでん

所 在 地 宮古市田老字向新田 164-22 ほか
委 託 者 國土交通省東北地方整備局三陸國道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成 26 年 9 月 16 日～ 12 月 5 日
調査終了面積 2,005m²
調査担当者 鈴木博之・古館貞身・久保友咲
主要な時代 縄文・弥生



遺跡の立地

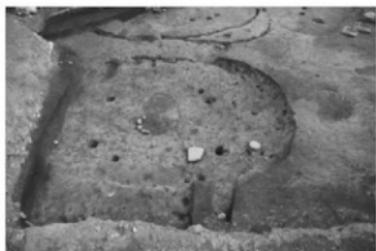
遺跡は、宮古市役所田老総合事務所の北約 7 km に位置し、北上山地が太平洋に接する三陸海岸の海岸段丘上に立地する。遺跡は北西を上位とし、南東にかけて下る斜面上を利用して形成されており、標高は概ね 145 ～ 147 m である。調査前の現況は、畠地と一部宅地であったが、宅地造成のため大規模な地形変更が行われており、遺構の残存度は決してよい状況とはいえない。

調査の概要

本遺跡の調査では、調査区中央に水道管が通っており、また住居移転に伴う諸事情の為、一度に全面発掘調査が行えなかつたが、以下のことが明らかになった。

検出遺構は、縄文時代から弥生時代にかけての竪穴住居跡 17 棟、土坑 13 基、焼土・炉 6 基である。竪穴住居跡については、出土遺物他から判断して、縄文時代前期に属するものと晩期及び弥生時代前期に属するものようである。晩期及び弥生時代前期に属するものについては一部重複が見られる。土坑については副穴をもつものが 2 基あるが、一つは円形の陥し穴状遺構、もう一つはフラスコ状土坑の崩落したものと考えている。焼土・炉については、特に、基本土層の II 層（黒色土）で検出したものは竪穴住居跡に伴うものであった可能性が高い。

出土遺物は、土器が大コンテナ 10 箱で主に晩期末葉から弥生時代前期のものと、一部縄文時代前期と思われるものがある。石器については中コンテナ 7 箱である。



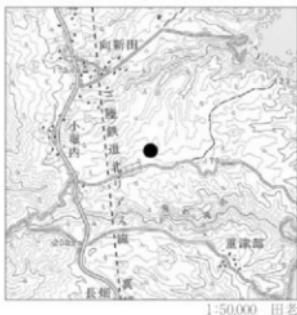
重複する竪穴住居跡



調査風景

(22) 青野滝北 I 遺跡

所 在 地 宮古市田老子青野滝北地内
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成 26 年 4 月 10 日～9 月 19 日
 調査終了面積 4.200m²
 調査担当者 鈴木博之・古館貞身・鈴木貞行
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所田老子総合事務所の北約 6 km に位置し、海岸段丘上に立地する。遺跡の標高は北端の谷部で概ね 152 m 前後、南端の尾根部で概ね 165 m 前後である。調査前の現況は山林である。今年度に発掘調査を実施した青野滝北 II 遺跡の南に隣接する。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡 15 棟、フラスコ状土坑 3 基、陥れ穴状遺構 1 基、土坑 9 基、炭窯跡 2 基である。竪穴住居跡は調査区南端尾根の北側麓に集中しており、重複しているものが多い。ほぼ全ての竪穴住居跡から複式炉もしくは石匂炉を検出した。

遺物は縄文土器が大コンテナ 27 箱、石器が中コンテナ 14 箱、石製の有孔垂飾品が 2 点、石棒が 2 点出土している。縄文土器は中期後葉のものが主体であり、竪穴住居跡からの出土が多い。



調査区全景（直上）

あおのたききた
(23) 青野滝北Ⅱ遺跡

所 在 地 宮古市田老子青野滝北地内

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

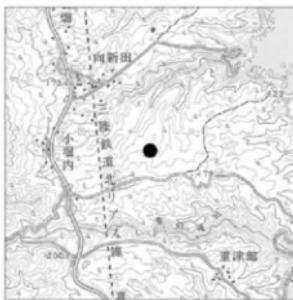
事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成 26 年 4 月 10 日～6 月 20 日

調査終了面積 2,100m²

調査担当者 鈴木博之・古館貞身・鈴木貞行

主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所田老総合事務所の北約 6 km に位置し、海岸段丘上に立地する。遺跡の標高は概ね 153 m 前後で、調査前の現況は山林である。今年度に発掘調査を実施した青野滝北 I 遺跡の北に隣接する。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡 1 棟、陥し穴状遺構 3 基、土坑 4 基である。竪穴住居跡の床面からは石囲炉と土器埋設炉を検出し、2 棟が重複している可能性があったが、精査の過程で単一の遺構であると判断した。

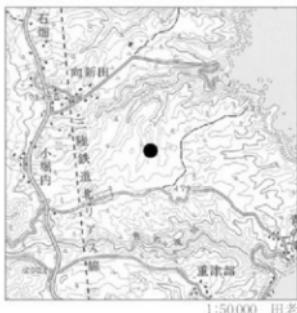
出土遺物は、縄文土器が大コンテナ 4 箱、石器が中コンテナ 1 箱、石製の有孔垂飾品が未完成を含め 3 点である。縄文土器は中期後葉のものが主体であるが、早期の土器も少量出土している。



調査区全景（直上）

(24) 青野滝北Ⅲ遺跡

所 在 地 宮古市田老子青野滝北地内
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成 26 年 4 月 10 日～9 月 30 日
 調査終了面積 2,300m²
 調査担当者 鈴木博之・古館貞身・鈴木貞行
 主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所田老子総合事務所の北約 6 km に位置し、海岸段丘上に立地する。遺跡の標高は概ね 145 m 前後で、調査前の現況は山林である。今年度に発掘調査を実施した青野滝北 II 遺跡の東に位置し、谷を挟んで隣接する。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡 3 棟、陥し穴状遺構 1 基である。竪穴住居跡は調査区東側の尾根から西へ延びる緩斜面にかけて散在しており、いずれも石圍炉をもつ。陥し穴状遺構は竪穴住居跡と重複しており、陥し穴状遺構が古い。

出土遺物は、縄文土器が中コンテナ 2 箱、石器が中コンテナ 1 箱である。



調査区全景（直上）

(25) 高根遺跡

所 在 地 宮古市山口第11地割 55ほか
委 託 者 國土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成26年4月9日～11月14日
調査終了面積 2,690m²
調査担当者 西澤正晴・光井文行・中島康佑・久保友咲
主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所から北西29kmにあり、山口川に面した北上山地からつづく丘陵の先端に立地する。調査地は、2つの尾根とそれに挟まれた谷部に及んでいる。調査前の状況は山林や畠地であった。高根遺跡は、これまで宮古市教育委員会によって過去に2度調査が行われており、縄文時代中期の集落や墓域として知られている。

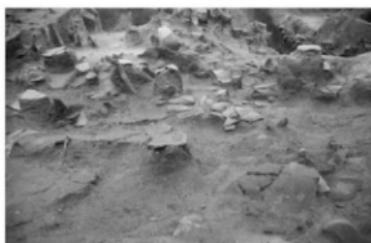
調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡32棟以上、フラスコ状土坑57基、土坑18基、溝跡1条、遺物包含層（捨て場遺構）4箇所、製鉄炉2基である。竪穴住居跡は、縄文時代中期に属すると考えられ、複式炉をもつものが多く、急な斜面に階段状に立地している。とくに北側にある南向き斜面上に多数が立地している。フラスコ状土坑は、縄文時代中期に属すると考えられ、南側の尾根上に集中している。大型のものが多く、直径2m前後、深さ1.5m前後のものがほとんどである。縄文時代中期の包含層は谷を挟んだ両斜面や谷底にある。これらの包含層は、厚さが1m以上もあり、破片の大きな土器片が多量に含まれており、土器捨て場の可能性がある。製鉄炉は斜面中位に2基の存在を確認しており、周囲にはフイゴの羽口、鉄滓が散在している。

これまでのところ、縄文時代中期を中心とした狭い時期に展開した集落であることが判明している。今年度出土した遺物は、縄文土器が大コンテナ173箱、縄文時代の石器が大コンテナ30箱、鉄滓中コンテナ1箱、骨・貝類中コンテナ15箱、土製品小コンテナ1箱である。なお調査は来年度も継続して行われる予定である。



高根遺跡全景写真



包含層土器出土状況

(26) 木戸井内VI遺跡

所 在 地 宮古市松山第7地割1-1ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 宮古西道路
 発掘調査期間 平成26年4月10日～5月27日
 調査終了面積 3,240m²
 調査担当者 福島正和・鈴木次郎・清水 彩
 主要な時代 繩文・弥生



遺跡の立地

遺跡は、JR山田線宮古駅の南西約3kmの閉伊川を臨む高台に位置する。遺跡の立地する高台は二又の段丘となっており、調査区は先端が北方向へ延びる尾根筋と西方向へ延びる尾根筋のそれぞれ稜線上である。両尾根は同一の谷を共有し、それぞれこの谷に向けて急峻な斜面となっている。調査区は斜面部を除いた稜線上のみであるが、標高は70～80mである。調査前は全体が山林であった。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、貯蔵穴1基、陥し穴状遺構10基、弥生時代の竪穴住居跡2棟、時期不明の炭窯6基、土坑2基である。縄文時代の竪穴住居跡は円形平面形態に石圓炉を有する。陥し穴状遺構はすべて溝状の形態のもので、尾根の稜線に沿うように分布している。2棟検出した弥生時代の竪穴住居跡はいずれも方形の平面形態である。

出土遺物は、縄文土器小コンテナ0.5箱、石器小コンテナ0.5箱、弥生土器小コンテナ1箱、土製紡錘車1点である。縄文土器は中期後葉の大木9式、弥生土器は器表面を交互刺突文と弦線によって加飾されたいわゆる天王山式・赤穴式に該当する。弥生土器は全体の器形が判明するものはみられないものの、いくつかの器種構成が想定される。1点の土製紡錘車は弥生土器に伴って竪穴住居より出土したものである。

検出遺構および出土遺物から木戸井内VI遺跡は、縄文時代中期後葉の居住域、弥生時代後期の小規模集落が営まれていたようである。弥生時代後期の竪穴住居跡は岩手県内ではきわめて類例が少なく、今回の調査は貴重な調査事例となった。



縄文時代の竪穴住居（西から）



弥生時代の竪穴住居（東から）

そけいしざき
(27) 磯鶴石崎遺跡

所 在 地 宮古市磯鶴第1地割石崎地内ほか
委 託 者 國土交通省東北地方整備局三陸國道事務所
事 業 名 宮古西道路
発掘調査期間 平成 26 年 5 月 23 日～6 月 30 日
調査終了面積 618m²
調査担当者 福島正和・鈴木次郎・清水 彩
主要な時代 古代



遺跡の立地

遺跡は A 地区・B 地区に分かれており、A 地区は J R 山田線磯鶴駅の北約 300 m の段丘上に、B 地区はそれより約 500 m 東の宮古湾を臨む段丘上にそれぞれ位置する。遺跡の立地する段丘は舌状地形となっており、A 地区は段丘上稜線上、B 地区は段丘先端部の緩斜面地上である。A・B 地区とともに調査前は山林であった。B 地区については通常通り予定範囲の発掘調査を終えたが、A 地区は遺構検出作業途中で工事計画の見直しが企図されたため調査不要となり、調査を中断、一部遺構を検出した状態までの記録保存に留めた。

調査の概要

今回の調査では、A 地区で古代の堅穴住居跡と考えられる遺構を 4 棟検出し、B 地区で時期不明の炭窯と考えられる遺構を 2 基調査した。A 地区の検出遺構はいずれも平面方形を基調としており、表土除去未了の西側にも同様の遺構が連続するものと推察される。B 地区の炭窯とみられる 2 基の遺構は斜面部に土坑状の掘り込みを有し、底面付近で炭化物や焼土粒が一定量認められた。

出土遺物は A 地区で土師器が小コンテナ 0.5 箱出土し、B 地区で縄文時代の土器と石器が数点出土した。A 地区出土の土師器は遺構を検出した尾根稜線上から北へ向けて下る斜面部で出土した。

A 地区の堅穴住居跡 4 棟は検出で留めたため時代は断定できないが、検出した平面形状や周辺で出土した遺物から考えて、奈良時代を中心とする集落であったと推測できる。

B 地区については詳細な時期が明らかではないが、古代以降に製炭がおこなわれた生産域であったことが判明した。また、縄文土器や石器の出土から B 地区周辺域での縄文時代の人々活動があったものと考えられる。



A 地区全景（南東から）



B 地区全景（西から）

ぬまり
(28) 沼里遺跡

所 在 地 宮古市津軽石第4地割 79-4ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成26年4月7日～5月2日
 調査終了面積 400m²
 調査担当者 米田 寛・近藤行仁・佐藤直紀
 主要な時代 繩文・古墳・奈良



遺跡の立地

遺跡は、宮古市立津軽石小学校の西約300mの丘陵地に位置する。調査区の現況は植林であった。今回の調査区は遺跡範囲の北端に位置し、昨年度調査が行われた津軽石大森遺跡と隣接する。本遺跡は標高18～23mを測り、津軽石川西岸の津軽石集落を見下ろす位置にある。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡5棟、陥し穴状遺構6基、土坑1基である。竪穴住居跡はすべて古墳時代末～奈良時代である。

出土遺物は、縄文土器が小コンテナ0.1箱、土師器が大コンテナ3箱、石鎌、石匙、磨石、砥石、敲石等の石器が中コンテナ2箱、土製紡錘車が2点、匙形土製品1点である。



沼里遺跡調査区全景

(29) 荷竹日向 I 遺跡

(29) にちくひなた
荷竹日向 I 遺跡

所 在 地 宮古市津軽石第 16 地割地内ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成 26 年 4 月 10 日～ 12 月 26 日
調査終了面積 15,600m²
調査担当者 溝 浩二郎・藤本玲子・小野寺純也、
中川重紀・立花雄太郎・藤田崇志
主要な時代 繩文・弥生・平安・中世



遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所から南南西約 9.3km に位置し、西側から延びる丘陵地の先端部に立地し、南側の七田川との間に広がっている。北側に昨年調査が行われた払川Ⅲ遺跡が所在する。調査前の現況は畑地および山林であった。遺跡の標高は平坦部で 20 m、山頂部で 72 m を測り、約 50 m の比高差がある。

調査の概要

検出遺構は、古代が堅穴住居跡 52 棟、堅穴住居状遺構 17 棟、土坑 117 基、歎間状遺構 3 箇所、焼土 14 基、鍛冶工房跡 2 箇所、鍛冶炉 5 基、排溝場 2 箇所で、中世は山頂部に堀跡・溝跡・柱穴状土坑、平場に堅穴建物跡があるが、遺物はなく、時期の詳細は不明である。他に縄文時代の陥し穴状遺構を 52 基検出した。

出土遺物は、排溝場から出土した鉄滓が大コンテナ 80 箱、土器は縄文土器小コンテナ 1 箱、土師器・須恵器大コンテナ 10 箱、他に刀子・鎌・鍔などの金属遺物が 160 点と顕著である。



遺跡全景

(30) 石峠 II 遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町石峠第2地割6-30ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成26年4月8日～11月5日

調査終了面積 1,400m²

調査担当者 北村忠昭・佐藤剛・松政里奈

主要な時代 繩文・古代・中世



遺跡の立地

遺跡は、JR山田線豊間根駅の北北東約1kmに位置し、荒川川左岸の丘陵裾に立地する。標高は約35～50m前後であり、調査前は畑地及び山林であった。北西側には中世城館である内館遺跡が隣接している。今年度は、昨年度の継続で4,998m²を対象としていたが、3,598m²分が調査未了となり、来年度に継続する予定である。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡78棟（前期・中期）・竪穴住居状遺構11棟・プラスコ形の土坑13基（中期）・陥し穴状遺構105基（円形・楕円形・溝状・方形）・土坑38基・焼土1基・不明遺構1基・柱穴状土坑12個・古代の竪穴住居跡2棟・中世の墓壙2基・中世～近世の掘立柱建物跡6棟・土坑5基・柱穴状土坑44個・時代不明の墓壙1基・土坑1基・製鉄炉2基・土取り穴1箇所・不明遺構7基・柱穴状土坑2個である。出土遺物は、縄文土器大コンテナ47箱・剥片石器大コンテナ55箱・礫石器大コンテナ168箱・土製品2点・石製品1点・コハク3点・土師器少量・須恵器1点・陶磁器少量・錢貨30枚・鉄滓大コンテナ18箱・羽口小コンテナ1箱・中世人骨等である。

今年度の発掘調査では多数の竪穴住居跡が重層的に確認され、繰り返し居住域として利用されていたことが判明した。また、昨年度と同様、多様な陥し穴状遺構が多数確認され、大規模な狩猟場であったことも判明した。その他に、今年度の調査での特筆するべき点は、人骨の伴う中世墓が確認されたことである。沿岸部での確認例は少なく、貴重な資料と言えよう。来年度も継続して調査を行う予定になっており、多数の遺構・遺物が確認されることが想定され、遺跡の詳細な内容が判明することが期待される。



調査区全景



縄文時代中期後半の竪穴住居跡

(31) 間木戸Ⅰ遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町山田第3地割内
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成26年4月8日～12月19日
調査終了面積 7,660m²
調査担当者 村上 拓・村田 淳・中村隼人・高橋静歩・
佐藤奈津季・森 裕樹・酒井野々子
主要な時代 繩文・古代



遺跡の立地

遺跡は、山田町役場の北方約15kmに位置する。北西側から延びる丘陵の縁部に立地し、南東側は北から南西に流下する沢により区切られている。沢の対岸には昨年度調査が行われた間木戸Ⅱ・同V遺跡が所在し、また南西側で沢田Ⅲ遺跡と接している。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡161棟・竪穴住居状遺構1棟・土坑180基（うちフラスコ状土坑32・陥穴状遺構1）・炉27基・埋設土器1基・溝跡19条・遺物包含層600m²、古代の竪穴住居跡11棟・溝跡3条・焼土1基・時期不明の土坑2基・溝跡4条・切土範囲1箇所・盛土範囲1箇所・排溝場？1箇所・柱穴状土坑約2500個である。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ334箱・土師器・須恵器大コンテナ4箱・石器大コンテナ44箱・鉄滓類大コンテナ6箱・鉄製品（釣針・馬具・刀子等）数点・獸骨・貝類大コンテナ5箇分・有孔垂飾品2点・土偶1点・土鍤1点である。

今回の検出遺構・遺物のうち、主体となるのは縄文時代である。縄文時代の竪穴住居跡は南向きの斜面地に夥しい数が構築されているが、ほぼ全てが中期中葉～後葉のものであり、短い時間幅で何回も建て替えられていたことがわかる。また、フラスコ状土坑等の土坑類からは前期末～中期初頭の遺物が出土することから、調査区周辺にはこの時期の竪穴住居跡が存在するものと思われ、前期末～中期にかけてこの一帯には大規模な集落が形成されていたと考えられる。



縄文時代の竪穴住居跡



古代の竪穴住居跡

(32) 沢田Ⅲ遺跡

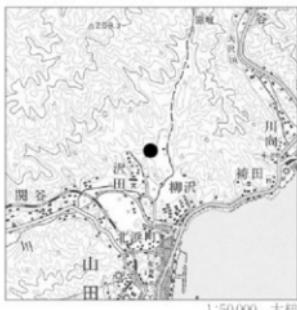
所 在 地 下閉伊郡山田町山田第3地割33-1ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成26年4月8日～11月28日

調査終了面積 3,600m²

調査担当者 阿部勝則・佐藤淳一・河本純一・佐藤あゆみ・
 中島康佑・南野龍太郎

主要な時代 繩文・古代



遺跡の立地

遺跡は、山田北小学校の北東側約300mに位置している。調査区は、山田沢に向かって南向きに開けている場所で、現在の山田沢の汀線より800mほど内陸に入った地点である。調査区の標高は12～30mで、地形により尾根・谷・低地に分かれている。現況は山林・原野である。今年度は、昨年度からの継続調査で、低地を主とする3,600m²について調査を行った。

調査の概要

主な検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡79棟、フラスコ状土坑26基、土坑44基、古代の竪穴住居跡13棟、鉄生産関連遺構として工房跡1棟・炉1基、貝層5箇所などである。出土遺物は、縄文土器・土師器大コンテナ160箱、土製品中コンテナ1箱、石器中コンテナ27箱、石製品中コンテナ1箱、鉄滓類中コンテナ13箱、動物遺存体中コンテナ120箱、植物遺存体中コンテナ1箱などである。

調査区の南西側を除く全域で、縄文時代中期の竪穴住居跡とフラスコ状土坑などが濃密に重なった状態で確認された。竪穴住居内の炉の形態は、地床炉・石囲炉・土器埋設炉・複式炉などさまざまな形態がある。竪穴住居跡の埋土からは、クリを主とする堅果類、獸骨や貝類なども出土しており、縄文時代の食生活を知ることのできる貴重な事例である。遺存状態は良くないが、中期の竪穴住居跡の下位から前期の竪穴住居跡も確認された。当該時期の出土遺物量も多く、当該地区には、中期の集落跡が形成される以前に前期の集落跡が形成されていた可能性がある。古代の竪穴住居跡は、調査区全域に散在しており、すべて北カマドである。出土遺物などから奈良時代と推測される。調査区の南西側では、地形の落ち込みが確認され、集落跡の南西端と推測される等高線に沿って貝層が確認された。2年間の調査で、当該地域における縄文・古代の集落跡の様相を考えるうえで貴重な資料が得られた。



縄文時代の竪穴住居跡



古代の竪穴住居跡

(33) 田屋遺跡

所 在 地 上閉伊郡大槌町吉里吉里第 12 地割字田屋 8
ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成 26 年 9 月 16 日～ 12 月 19 日

調査終了面積 3,600m²

調査担当者 米田 寛・巴 亜子・鈴木貞行・佐藤直紀

主要な時代 縄文・古代・中世・近世



遺跡の立地

遺跡は、JR 山田線旧波板駅から北へ約 500 m の緩斜面地に位置する。調査区現況は造成林であった。調査区は事業地内に 3箇所設定された。遺跡背後の鯨山（標高 610 m）から注ぐ沢流によって形成された小支谷に数多くの遺構・遺物が分布し、今回の調査区も谷底付近の緩斜面地に位置する。

調査の概要

検出遺構は、製鉄関連の工房跡 4 棟、製鉄関連炉跡 7 基、木炭窯跡 10 基、土坑 3 基、排滓場、炭化物集中 2 箇所、焼土 2 基である。焼土は縄文時代、それ以外は古代～中世に属すると考えられる。

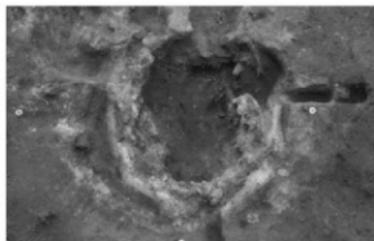
出土遺物は、縄文土器大コンテナ 2 箱、土師器 3 点、鉄床石 2 点、籠羽口中コンテナ 12 箱、鉄滓中コンテナ 100 箱、炉壁中コンテナ 3 箱、永楽通宝 1 枚である。



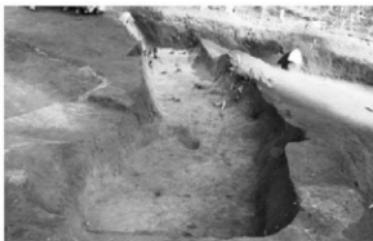
製鉄関連遺構遠景



工房内の製鉄関連炉



炉壁溶着滓出土状況



重複する木炭窯跡

(34) 松磯遺跡

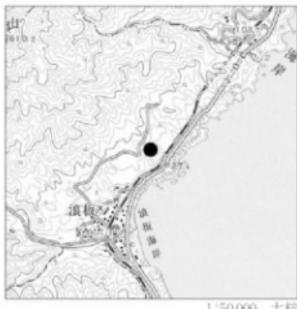
所 在 地 上閉伊郡大槌町吉里吉里第13地割字松磯3
ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成26年11月17日～11月28日

調査終了面積 450m²

調査担当者 米田 寛・巴 亜子・鈴木貞行・佐藤直紀
主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、JR山田線浪板海岸駅より北東へ約1kmの地点に位置する。遺跡は、船越湾に注ぐ浪板川に面した緩斜面上にあり、尾根上・斜面部・斜面下平坦面がある。標高は49～66mで、現状は山林であった。

調査の概要

昨年度調査の隣接地450m²を対象として行った。調査の結果、遺構は縄文時代中期のフラスコ状土坑3基、土坑1基、遺物包含層1箇所が見つかった。

出土遺物は、縄文土器が大コンテナ6箱、石器類中コンテナ2箱、鉄滓2点が出土した。



尾根部完掘（南から）



フラスコ状土坑断面（北から）



フラスコ状土坑完掘（東から）



遺物包含層遺物出土状況（西から）

たくさりくるまどうまき
(35) 田鎖車堂前遺跡

所 在 地 宮古市田鎖第11地割車堂前地内
委 託 者 沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
事 業 名 宮古西道路
発掘調査期間 平成26年6月2日～12月12日
調査終了面積 2,650m²
調査担当者 福島正和・鈴木次郎・宮内勝巳・近藤行仁
主要な時代 平安・12世紀・中世・近世



遺跡の立地

遺跡は、JR山田線千疋駅の南西約15kmの閉伊川とその支流である長沢川によって開析された平野部に位置する。遺跡の標高は6m前後であり、周囲は水田域である。ただし、今回調査した地点はその中でも微高地に立地しており、調査前は畠地が広がっていた。今回は予定されていた面積の約50%調査を終了し、追加調査および今年度未了範囲については次年度調査する予定である。

調査の概要

今回の調査では、平安時代～近世にかけての遺構面と遺構を検出した。平安時代の遺構面では、古代（9～10世紀）の堅穴住居跡11棟・土坑20基、12世紀の井戸跡1基・溝跡2条・土坑25基を調査した。中世（15～16世紀）の遺構面では、堅穴建物跡2棟・掘立柱建物跡3棟・畠1箇所・暗渠1条・土坑5基・柱穴状土坑243個を調査した。近世の遺構面では、掘立柱建物跡2棟・畠1箇所・土坑11基・柱穴状土坑32個を調査した。

出土遺物を時代毎に数量を列記すると、古代の土師器・須恵器大コンテナ8箱、鉄製品・石製品小コンテナ各1箱、12世紀のかわらけ・陶磁器片小コンテナ1箱、鉄製品小コンテナ1箱、銭貨1枚、中近世陶磁器小コンテナ1箱、中世の銭貨10枚である。

今回の調査で田鎖車堂前遺跡は古代～近世にかけての複合遺跡であることが判明した。古代は9世紀を中心とした集落が展開しており、閉伊川流域平野部における古代集落について新たな知見を得ることができた。また、この地域で12世紀の遺構および遺物がまとまってみられる遺跡はこれまで数少なく、特にかわらけは宮古地域で初出である。同時に、鉄製品は小札、馬具などの鉄製品も非常に種少な出土事例であり、この遺跡が12世紀において閉伊地方の拠点であったことが推測される。



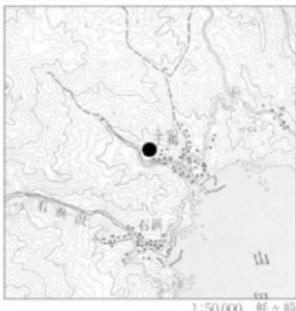
平安時代の堅穴住居跡（南西から）



平安時代終り頃の溝跡（北から）

(36) 千鶏IV遺跡

所 在 地 宮古市重茂第12地割上野地内
 委 託 者 沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
 事 業 名 主要地方道重茂半島線地域連携道路整備事業重茂地区
 発掘調査期間 平成26年9月16日～11月7日
 調査終了面積 2,000m²
 調査担当者 佐藤淳一・佐藤あゆみ
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、JR山田線豊間根駅から東へ約9km、重茂半島の南東部に位置する。調査区は海岸線から沢沿いに内陸へ約500m入った標高40～50m付近の県道に隣接する緩傾斜地で、県道の新設及び拡幅に伴う事業のため概ね東西に細長く、調査前は荒地もしくは畠地であった。隣接する県道部分は、平成8年に宮古市教育委員会によって発掘調査が行われており、縄文時代の竪穴住居跡などが確認されている。発掘調査は次年度以降も継続される予定である。

調査の概要

調査区の基本土層はI層：表土、II層・III層：表土下の整地・擾乱層、IV層・V層：遺構・遺物の包含層、VI層：地山、に大別される。現代の廃棄物等が多量に混入していたIII層と、IV層の上部までは重機で土を掘り下げ、その後、遺構の検出作業を行った。調査区は地形状況、標高、基本土層等の観点から、南区、西区、中央区、東区の4つの地区に区分し調査を行った。

調査の結果、遺構は竪穴住居跡1棟、土坑13基、焼土1基、遺物集中地区3箇所を確認した。遺構は全て西区と中央区の西側において確認しており、他の区域（南区、東区、中央区東側）では確認されていない。中央区西側で確認した竪穴住居跡は複式炉を伴うもので、埋土下部から大木10式と推定される土器片が出土していることから、縄文時代中期末の遺構と推定される。出土遺物は、土器が大コンテナ8箱、礫石器が中コンテナ5箱、剥片石器・石製品等が小コンテナ1箱、それぞれ出土している。出土遺物の大部分は西区と中央区からの出土である。土器の大部分は縄文土器であるが、時期は前期～晩期まで多様である。



千鶏IV遺跡全景（北から）

みやののかいづか
(37) 宮野貝塚

所 在 地 大船渡市三陸町綾里字宮野 15-3 ほか

委 託 者 岩手県警察本部

事 業 名 警察施設灾害復旧事業

発掘調査期間 平成 26 年 4 月 7 日～5 月 30 日

調査終了面積 375m²

調査担当者 星 雅之・佐々木隆英

主要な時代 繩文・弥生・古代



遺跡の立地

遺跡は、大船渡市役所から東約 8.5km、三陸鉄道南リアス線綾里駅の南約 200 m に位置する。調査地は南向き緩斜面地にあり、標高は約 18 m、調査前の現況は宅地である。

調査の概要

検出遺構は、土坑 10 基、柱穴状土坑 42 個、獸骨・炭化物集中区 1 箇所で、全て縄文時代と推定される。

出土遺物は、土器大コンテナ 18 箱、土製品小コンテナ 1 箱弱、石器類大コンテナ 8 箱、石製品小コンテナ 4 箱、獸骨小片少量である。土器は、縄文時代前期～晚期、弥生時代前期、平安時代が出土している。主体時期は、縄文時代前・中・晚期である。土製品は総数 21 点で、ミニチュア土器、土偶、円盤状土製品が出土している。石器類は、剥片石器が 216 点、礫石器 279 点、石製品 79 点が出土した。



宮野貝塚全景

(38) 伽羅之御所跡第23次調査

所 在 地 西磐井郡平泉町平泉字花立 212-5 ほか
 委 託 者 県南広域振興局土木部
 事 業 名 一般県道平泉停車場中尊寺線電線共同溝整備事業
 発掘調査期間 平成26年5月16日～10月31日
 調査終了面積 2,240m²
 調査担当者 杉沢昭太郎・白戸このみ
 主要な時代 12世紀後半



遺跡の立地

伽羅之御所跡は、JR東日本東北本線平泉駅の北約400mに位置し、遺跡の西側は特別史跡無量光院跡、北側では柳之御所遺跡、南側は鈴沢の池跡等と接する。地形は概ね平坦で、現況は県道であった。

調査の概要

伽羅之御所跡は、鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」の中に登場する藤原秀衡の常居所で、息子の泰衡が引き継いだとされる「伽羅御所」のあった場所と考えられている遺跡である。

今回の調査では、12世紀の遺構として堀跡1条、掘立柱建物跡2棟、井戸跡2基、土坑49基、塚跡1条、溝跡9条、整地層3箇所、性格不明遺構1基、柱穴状土坑約154個が検出された。12世紀の遺物として、かわらけが中コンテナ3箱、陶磁器が小コンテナ0.5箱出土している。堀跡は西北西～東南東方向へ延びており、上幅が約5.5mある。堀跡の見つかった位置は「伽羅御所」というより隣接する「無量光院」の南辺に相当する可能性もある。堀跡からは12世紀後半のかわらけが出土した。掘立柱建物跡は梁行4間、桁行7間の南北棟で総柱建物になると考えられ、12世紀後半よりも古い。

検出された遺構は堀跡の北側よりも南側のほうから多く見つかっている。



無量光院跡から伽羅之御所跡へと延びる堀跡

(39) 八幡沖遺跡

(39) 八幡沖遺跡
はちまんおき

所 在 地 一関市室根町折壁字八幡沖地内
委 託 者 県南広域振興局土木部一関土木センター
事 業 名 地域連携道路整備事業折壁地区室根バイパス
発掘調査期間 平成 26 年 9 月 24 日～ 12 月 19 日
調査終了面積 5,110m²
調査担当者 杉沢昭太郎・中川重紀・鈴木貞行・
白戸このみ
主要な時代 繩文・中世・近世



遺跡の立地

遺跡は、JR東日本折壁駅から約1km南西に位置し、新館山から北に張り出す細長い尾根上に立地している。大川を挟んで北側には金薦城がある。調査区の標高は190～198mで大川からの比高差は約45mである。

調査の概要

検出された遺構には、縄文時代の陥し穴状遺構7基、中世の堀跡2条、平場6箇所、柱穴状土坑8個があり、近世及びそれ以降のものとして、土壙1基、溝跡6条、水路跡1条などがある。

遺跡は、折壁地区を見下ろすように北に張り出した細長い尾根を、堀で大きく2つの曲輪に分け、それぞれの曲輪に小規模な平場が複数造られている。各平場には殆ど遺構が見られないため恒常的に使われた場ではない。今回の調査で見つかった堀跡はこの小規模な平場を区画するもので上幅約5m、深さは約2mである。縄文時代の陥し穴状遺構は尾根頂部にあり調査区外へと続いている。

遺物は、縄文土器2点、石器1点、近世陶磁器5点、釘1点である。



堀跡断面（東から）

(40) 赤前Ⅲ遺跡

所 在 地 宮古市赤前第7地割6番地1ほか
 委 託 者 宮古市都市整備部都市計画課
 事 業 名 防災集団移転促進事業赤前・津軽石地区
 発掘調査期間 平成26年4月8日～9月10日
 調査終了面積 6,627m²
 調査担当者 村田淳・中村隼人・高橋静歩・中島康佑
 主要な時代 繩文・平安・中～近世



遺跡の立地

遺跡は、JR山田線津軽石駅から東方約1.3kmに位置し、重茂半島の縁辺部の丘陵西側斜面部に立地する。標高は24～36mであり、調査前の状況は畠地・林野であった。

調査の概要

昨年度から継続調査である。今年度分の検出遺構は、縄文時代中期中葉～後葉の堅穴住居跡22棟・堅穴状遺構2棟・土坑類26基・石壇炉1基・焼土5基、平安時代の堅穴住居跡2棟・鉄生産関連炉1基・柱穴状土坑28個、近世の掘立柱建物跡4棟・柱穴状土坑50個・焼土1基、時期不明の柱穴列4条・畝間状遺構3箇所・土坑29基・焼土19基・溝跡4条・柱穴状土坑160個である。出土遺物は、縄文土器（中期中葉～後葉主体）大コンテナ13箱、土師器・須恵器大コンテナ2箱、陶磁器小コンテナ1箱、石器大コンテナ5箱、鉄製品（刀子・釘等）20点、鉄滓少量・寛永通宝・無文銭各1枚、獸齒・貝類少量である。

今年度の調査では、縄文時代中期中葉～後葉、平安時代、近世の遺構・遺物を検出した。縄文時代の遺構は堅穴住居跡が主体であるが、調査区中央のものは大木8式期、調査区北側のものは大木9式期と時期によって占地が異なる。また、西側斜面下に位置する平成25年度調査区では堅穴住居跡を含む遺構のはほとんどが縄文時代前期末～中期初頭に属することから、2箇年の調査で調査区全域を含めて時代が新しくなるにつれて標高の高い地点（遺跡範囲の東側）に集落が移動していることが判明した。平安時代の遺構としては一辺6.5mと本遺跡では最大規模の堅穴住居跡が検出されているが、検出数は昨年度よりも少ない。しかし、昨年度分を含めると堅穴建物跡（工房含む）が40棟近く検出されており、この時期にも大規模な集落を形成していることが判明した。この他、近世の遺構として掘立柱建物跡がある。このうち調査区北側で検出した1棟は3×6間（1間＝約2m）であり、宮古地域でも規模の大きな部類に属するものである。



縄文時代の堅穴住居跡



近世の掘立柱建物跡

(41) 浜川目沢田Ⅰ遺跡

所 在 地 下関伊山田町大沢浜川目第11地割ほか

委 託 者 山田町

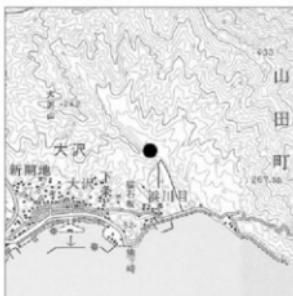
事 業 名 大沢地区漁業集落防災機能強化事業

発掘調査期間 平成26年6月2日～12月17日

調査終了面積 6,240m²

調査担当者 須原 拓・久保賢治・野中裕貴・南野龍太郎

主要な時代 縄文



1:50,000 大畠・霞露ヶ岳

遺跡の立地

遺跡は山田湾から約200m北側に位置する。海岸から続くと推定される低地面およびそこから一段上がる低い段丘末端に立地する。標高は2～7mである。調査前は水田・畑地であったが、調査区の南側は戦時中、旧日本軍による石油貯蔵庫建設のため、遺跡の南側は削平が激しい。

調査の概要

検出遺構は縄文時代中期後葉（大木8b～9式期）の竪穴住居跡15棟、後晩期の竪穴住居状遺構1棟、中期・晚期の土坑46基（うち7基はフラスコ状土坑）、性格不明遺構1基、埋設土器3基、焼土1基、柱穴状土坑40個である。出土遺物は、縄文土器が大コンテナ437箱（中期、晩期主体。他に前期、後期が含まれる）、石器大コンテナ133箱で、古代の土師器、須恵器、近世以降の陶磁器もみつかった。

遺構の分布は中期が主に北側の段丘末端部に、晩期の遺構は南側の低地面に分布する傾向がある。中期の竪穴住居跡は石垣や複式垣が伴われ、また床面中央や垣の脇に伏甕を設置するものも見受けられる。また遺構群上に層厚30cmの遺物包含層が堆積し、大量の縄文土器や石器が出土している。

晩期は竪穴住居状遺構の周辺を中心にフラスコ状土坑や埋設土器、焼土遺構が分布しており、小規模集落を形成している。遺構群の多くは、概ね山田湾の方角に向かって崩落しており、古津波などの自然災害による崩壊があったこともうかがえる。またこの遺構群上も含め、調査区南側の広い範囲で層厚20cm前後の遺物包含層が堆積し、多量の縄文時代後晩期の遺物が出土している。

今回の調査で、本遺跡が海沿いに立地するという縄文時代には特異な環境でありながら、中期と晩期において集落が営まれていたことが分かった。加えて多量の出土遺物群は、遺跡周辺も含め、さらに大規模な集落が展開していたことを推測させるものである。



調査区全景（北東から）



縄文時代中期の竪穴住居跡（北西から）

(42) 焼山遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町船越第6地割地内
 委 託 者 山田町
 事 業 名 船越地区防災集団移転促進事業
 発掘調査期間 平成 26 年 4 月 7 日～6 月 20 日
 調査終了面積 1,500m²
 調査担当者 久保賢治・須原拓・南野龍太郎
 主要な時代 古代・中世



遺跡の立地

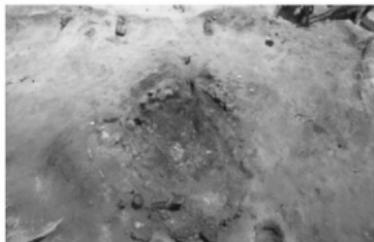
遺跡は、船越半島の山々と船越湾、太平洋を臨むことができる山地の麓に位置する。JR山田線船越駅と山田道路との間に挟まれ、南東に開けた谷の北側斜面地に立地している。標高は約 50 m である。急斜面から緩斜面に移行する地形の変換点に、製鉄炉を伴う工房跡、重複が激しい楕円形の炭窯跡、土坑などの遺構が集中している。当該地の一部は畠地として利用された。その後、戦後の早い時期に杉が植林され、調査以前は杉林であった。

調査の概要

調査区南側には横断する沢跡があり、その北側斜面地に古代～中世の鉄生産関連の遺構群がほぼ同一等高線上に分布する。製鉄工房跡 4 棟、製鉄炉 9 基、炭窯跡 12 基、土坑 12 基を確認した。製鉄工房跡は緩斜面地に形成され、中央に製鉄炉、その周囲の平場と用途不明の土坑で構成されている。工房の手前（谷側）は廃滓場へ続く緩やかな斜面が形成され、奥（山側）は平場とともに床面から緩やかに壁が立ち上がる形状をなしている。炭窯跡の規模は幅約 1 m、長さが 3 m～4 m 程あり、重複が激しく、繰り返し同じ地点で炭作りを行っていたことが分かった。製鉄炉で使用する燃料を生産していたことがうかがえる。

出土遺物は、使用済みの羽口中コンテナ 25 箱や多量の鉄滓大コンテナ 110 箱が主である。製鉄工房跡の床面からは複数の羽口と共に小刀が 1 点出土した。また、遺構は確認されていないが、縄文時代の土器片、石器類が少数ではあるが出土した。

今回の調査からこの焼山遺跡は、製鉄に必要な原料や燃料が得やすく、鉄生産に適した地であったことが明らかとなった。岩手の鉄文化を教えてくれる貴重な遺跡である。



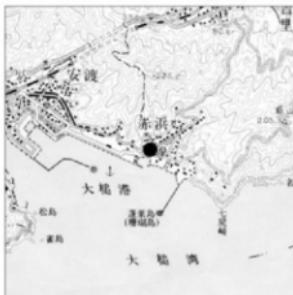
製鉄炉と工房壁の羽口



小刀と羽口の出土状況

(43) 赤浜II遺跡

所 在 地 上閉伊郡大槌町赤浜1丁目207番地ほか
委 託 者 大槌町
事 業 名 土地区画整理事業 赤浜地区
発掘調査期間 平成26年11月4日～12月18日
調査終了面積 1,875m²
調査担当者 小林弘卓・濱田 宏・宇部めぐみ・柄澤 星
主要な時代 縄文



1:50,000 大槌

遺跡の立地

遺跡は、大槌町役場から東へ約3kmの地点に位置し、標高2～6mの大槌湾へと繋がる緩やかな南向きの斜面裾に立地している。遺跡を含む赤浜地区は東日本大震災の甚大な被害を受けた区域であり、調査区現況も宅地であったが、建物はすべて損壊・撤去されている状況である。

調査の概要

今回の調査地点は宅地造成の盛土が厚く、斜面下方にあたる南側においては約1.5mの層厚が認められた。また、地形的にも北方山側からの崖錐性の堆積が著しく、これらを合わせ遺構検査面まで最大3m掘削が必要となった。そのため、今年度の調査は遺構検出にのみ留めることとした。

検出された遺構は、堅穴住居跡6棟、土坑3基、焼土10基、配石遺構2箇所、遺物包含層約900m²である(12/18現在)。堅穴住居跡や土坑は北側に集中して検出されており、十和田中振火山灰で覆われたものも数棟確認された。周辺に縄文時代前期中葉を主体とする遺構が広がる可能性が考えられる。調査区中段～南側においては縄文時代後期の遺物包含層が広がる。検出段階ではあるが、注口土器や土偶等が出土している。また、若干の時期差があると考えられるが、包含層よりや上段部分から、配石遺構が2箇所検出された。まだ一部のみの検出ではあるが、円碟群が弧状または円形に配置された可能性が推測される。これらは来年度の調査によって明らかになるものと考えられる。



配石遺構周辺（南から）

たかだじょうあと
(44) 高田城跡

所 在 地 陸前高田市高田町字洞の沢、鳴石、本丸地内
 委 託 者 陸前高田市
 事 業 名 土地区画整理事業高田西地区
 発掘調査期間 平成 26 年 4 月 7 日 ~ 11 月 28 日
 調査終了面積 27,000m²
 調査担当者 村木 敬・中村利至久・野中裕貴・
 柄澤 星
 主要な時代 中世



遺跡の立地

高田城跡は、陸前高田市役所仮庁舎の南東約 900m、水上山より南へ延びる丘陵上に位置する。標高は 45 ~ 55m 前後で南側の眼下に広田湾を望む立地となっている。調査前の現況は山林であった。本城館は以前からその存在が知られており、八幡館または東館とも呼ばれていた。

調査の概要

本年度は調査以前に想定されていた 5 つある曲輪の内、曲輪 IV と V を対象に調査を行った。曲輪 IV からは、曲輪 10 箇所、切岸 9 箇所、虎口 2 箇所、土塁 2 基、堀跡 1 条、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 5 基を検出した。館は、尾根を切り出した後に縁辺部を版築によって城館の形を築き上げるという構築の特徴が明らかとなった。また、曲輪 V は、近現代の削平を受けていることが判明した。この結果、城館の範囲が曲輪 I ~ IV までと狭まることが分かった。時期については、判断できる遺物が少なく、使用されていた時代についての言及が難しい。次年度も継続予定である。



遺跡遠景

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうろくねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成26年度発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第647集						
編著者名	小林弘卓						
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019)638-9001						
発行年月日	西暦 2015年3月23日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			m ²	
南川尻遺跡	九戸郡 洋野町種市 第28地割	03507	I F 48-1197	40度 24分 51秒	141度 41分 54秒	2014.09.04 ~ 2014.10.30	三陸沿岸道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
南川尻遺跡	集落跡 狩猟場	縄文時代	堅穴住居跡 土坑 陥入穴状遺構 焼土	2棟 5基 11基 1基	縄文土器 石器		
要約	今回の調査区は西から東へ延びる尾根頂部と北側を東流する沢までの斜面地を含む。堅穴住居跡は尾根上の平坦部で確認され、出土遺物から縄文時代後期後葉の構造と考えられる。陥入穴状遺構は尾根上の西側から集中して見つかっており、溝状の形態を示すものがほとんどである。陥入穴状遺構同士の重複が見られないことから、計画的に配置されたものと推測され、効率的に狩猟場として利用されていたことが伺える。						
ふりがな	へいせいにじゅうろくねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成26年度発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団文化財調査報告書						
シリーズ番号	第647集						
編著者名	宮内勝巳						
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019)638-9001						
発行年月日	西暦 2015年3月23日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			m ²	
下向遺跡	九戸郡洋野町 中野第1地割 地内	03507	I F 89-1394	40度 18分 20秒	141度 45分 46秒	2014.04.09 ~ 2014.05.12	三陸沿岸道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
下向遺跡	狩猟場	縄文時代 弥生時代	陥入穴状遺構 土坑	6基 1基	縄文土器・弥生土器・ 石器		
要約	今回の調査で縄文時代後期と考えられる溝状を呈する陥入穴状遺構が6基検出された。この時期では他に梢円形や円形の陥入穴状遺構も検出される例が見られるが、この形態の違いは狩猟の対象動物や狩猟方法の違いによるものとも考えられる。住居等の遺構は確認できなかったが弥生時代中期から後期の土器も出土している。						

*緯度、経度は世界測地系による数値である。

ふりがな	へいせいにじゅうろくねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成26年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第647集							
編著者名	藤本玲子							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019)638-9001							
発行年月日	西暦 2015年3月23日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村遺跡番号				m ²		
沼袋Ⅱ遺跡	下閉伊郡田野畠村尾肝要46-1ほか	03484	K G 11-2263	39度 56分 50秒	141度 50分 23秒	2014.07.07 ~ 2014.09.05	3,695m ²	三陸沿岸道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
沼袋Ⅱ遺跡	狩猟場	縄文時代	雨裂跡 旧河道 陥し穴状遺構	1条 1基 21基	縄文土器片 寛永通宝			
要約	東向き緩斜面腹部と裾部付近に縄文時代の陥し穴状遺構21基、旧河道1条、雨裂跡1条を確認した。うち溝状陥し穴状遺構18基、楕円形陥し穴状遺構2基、円形陥し穴1基で、逆茂木痕を有するものがある。調査区中央付近には東西方向に谷筋が形成されており、検出された旧河道から調査区東側に広がる沼地に集まる動物を狙った狩猟場であったことが明らかとなった。							
ふりがな	へいせいにじゅうろくねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成26年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第647集							
編著者名	藤本玲子							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019)638-9001							
発行年月日	西暦 2015年3月23日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村遺跡番号				m ²		
沼袋Ⅲ遺跡	下閉伊郡田野畠村尾肝要73ほか	03484	K G 21-0213	39度 56分 33秒	141度 50分 25秒	2014.07.07 ~ 2014.09.05	950m ²	三陸沿岸道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
沼袋Ⅲ遺跡	狩猟場	縄文時代	雨裂跡 土坑 陥し穴状遺構	1条 4条 7基	縄文土器片			
要約	東向き緩斜面腹部と裾部付近に縄文時代の陥し穴状遺構7基、雨裂跡1条、時期不明土坑4基を確認した。陥し穴状遺構は全て溝状で逆茂木痕を有するものがある。調査区南北に西から東へ向かって沢が形成され、調査区は沢間に位置する。こうした水辺に集まる動物を狙った狩猟場であったことが明らかとなった。							

*緯度、経度は世界測地系による数値である。

ふりがな	へいせいにじゅうろくねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成 26 年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 647 集							
編著者名	杉沢昭太郎							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2015 年 3 月 23 日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			ml		
八幡沖遺跡	八幡市 室根町折壁字 41-3	03209	N F 93-1069	38 度 56 分 1 秒	141 度 26 分 28 秒	2014.10.16 ～ 2014.12.19	1,000ml	市道千刈田向山線 道路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
八幡沖遺跡	城館	中世	墓塚 土坑 性格不明遺構	1 条 1 条 1 基	銭貨			
要約	遺跡は折壁地区を広く見渡せる北に張り出した尾根を礎で大きく二つの曲輪に分け、それぞれの曲輪に小規模な平場を複数造りだして城館にしている。調査区は南側の曲輪西辺部にあたる。南側の曲輪からは殆ど遺構・遺物が見られないため頗る的に使われてはいないようである。							

※緯度、経度は世界測地系による数値である。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集

平成26年度発掘調査報告書

印 刷 平成27年3月16日

発 行 平成27年3月23日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電 話 (019) 638-9001

F A X (019) 638-8563

発 行 (公財) 岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電 話 (019) 654-2235

F A X (019) 625-3595

印 刷 有限会社 博光出版

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号

電 話 (019) 641-0671